スタートは無名の氏突破せしも須臾にして力盡き、黑田先づ三島の一番槍として群を拔き川崎、長濱之に次げり。三島は例の如く殿軍となりて悠々迫らざるものゝ如く、最後の周の松の木の附近より長濱は川崎を拔き漸く決勝點に近かんとせしも、川崎又之を拔き返へし、決勝點前數米にして三島この二人を拔き、再び吾軍は敗辱の憂目を蒙りぬ。

嗚呼わが選手は四度戰ひて四度敗れ、徒らに竪子の蹂躪に委せしが、思へば彼の天才的强敵とも稱すべき三島、川崎等と對抗せる選手が苦衷や如何なりしならむ。某先輩は今回のレースを目して暴風雨が吹き旋るが如しと評せし言に徵するも、如何に選手が奮鬪し、如何に校友が熱狂せしかを察するに難からざる可し、昨秋本鄕臺上に於ける衝突より高商と本校とは常に相反目し、今年駒場當日に於ても、我應援隊は「戰はん哉時機到る」を連呼して殺氣場内に横溢し、何等かの動機あらば、將に血の雨をも降らさんずる形勢にして、凄愴たる光景、觀者をして慄然たらしむるものありき。而して我選手は數年來の惡戰苦鬪に具さに其辛酸を嘗めたれば、此日に於ける敗戰にも只泰然として運命の左右に委したる態度は悲しくも人意を强ふせしめぬ。

歸來先輩選手の間に議に上りしは、此の年來の敗戰を蒙る所以は一に體力に依る可きを思ひ、かの三島、川崎の如き優良なる體格を有するに反し、我選手は數等劣れるを見て、嘗に脚力の增進に腐心するは未だ達せるの見に非らずとなし、須く體力全部の養成を圖り以て彼の强敵に當る可しとの結論に到着し、是に於てか長濱氏は二三有力なる先輩諸氏の意見に從ひ、ボートの練習をなすことゝなり、此年の暮、一部端艇選手と共に銚子遠漕に赴き、斯くの如くして、一難を經れば勇氣益加はり、百敗撓まざるの一高的元氣を以て飽くまで彼の宿敵を屠らざれば止まじとの決意は牢乎として拔くべからざるものありき。

○明治三十八年度

今年は吉原、瀨川兩選手を大學に送らざる可からず、殘るは只長濱選手一人のみにして、例により寒稽古をなして、三學期に入りてよりは後繼者を得るの必要より春季運動會を開催して一年級分科レースを設け、隱れたる英雄を拔擢せんと試み、其結果として一部一年なる春日弘氏の有望なるを認めて以て擧げて選手の候補となせり。

當時我部の窮狀は、恰かもナポレオン一世によりて蹂躪せられし獨逸の如き狀態にして、十年の昔、旗を武香陵頭に立てしより南征北伐、我に刃向ふものは常に鐵蹄の下に一蹴し去りしが、一朝華胄の若輩に敗れてより、連年之が雪辱の師を起すと雖も、事志と違ひ、殊に昔日我等の威風赫々として天下に其覇を呼號せしを密かに嫌厭せる都下の新聞紙等は奇貨措くべからずとなし筆を揃へて吾部に攻擊非難の鉾を向け、斯くの如く四面楚歌の裡に在りて、我先輩校友の中には幾多のフンボルト、スタイン、のあるありて、能く選手を指導鞭韃せるが爲め漸くにして此頽勢を輓回せんとするの機運に遭遇するに至りぬ。

秋風と共に校友も亦都の人となりて、今年の運動界も漸く多事ならんとする時に當りて、忽如高商の川崎は半途退學してベルギーに留學し、玆に彼か爲め夢寐にも安からざる苦を受け、必ずや一矢酬ひずんば止まじと念ぜし甲斐も無く吾好敵手は萬里の波濤を越えて海外に去り、實にや流星光底長蛇を逸する感無き能はざりき。然りと雖も尙彼に優る强敵の在るあり。多年練磨せる我利劍は當然彼の頭上に試みられざる可からざるなり。

例に依り秋晴の日を期して運動界を催す、前日の豪雨のためグラウンド滑りて、ハンディキャップの走者は大いに苦み、新進の辰野隆生來の駿足に加へてこの天祐のありし爲め適くとして可ならざるなく、殆んど皆一着を占むるの偉觀を呈せり。

是に於て選手候補者を定めて、長濱哲三郎、春日弘、辰野隆の三氏となし、桐淵廣一、松村茂を擧げて委員となして來寮四番室に合宿し、日々大學運動場に練習するの傍ら、都下各學校の競走に於て先づ吾意氣を示さんとて到る處に出場し

勝利を博しぬ。

かくて吾等の鶴首して期待せし大學運動會の日は來りぬ。外敵は學習院の黑田長敬、安場保健のみ。吾選手はスタートを離るゝと共に混亂の中に投ぜらるゝを恐れ挺身して常に先頭を占め、レースは極めて平和の裡に進行して一人も之に肉薄するもの無く決勝點前百米よりは我選手長濱、辰野、桐淵は三騎轡を駢べて此の順を保ちつゝ意氣揚々として決勝線に入りぬ。一高山上應援隊は白旗を振りて狂喜し、遂に退場口に集まりて選手を肩上に荷ひ校庭に到りて熱烈なる歡聲は六寮を震動せしめ遠く谷中の森にその反響をきゝぬ。あゝ吾勝てり、宿年の怨恨その一端を霽らすを得て吾選手も意氣頓に揚り、近き駒場の必勝を豫想して只管に其日の至るを待ちぬ。

高商の川崎一度去つてより、本郷臺上又好敵手の影を認むる能はず。我實力を充分發揮するを得ずして止みしは選手の頗る遺憾とするところなりしが、駒場には多年の頑敵三島の出場あることなれば、心を許す能はず、屢ば駒場に通ひて練習を積みぬ。

愈吾等が運命を卜するの日は來れり。吾選手は長濱、辰野兩氏にして外敵は學習院の黑田長敬、瓜生剛とす。扨て期待せしレースは極めて平凡なるものにして、昨秋に見るが如き波瀾に富ます。吾選手は豫定の行動を執りて二者續いて決勝點に入り、見事なる全勝を博せり。而して當日三島は運動場に來り終始レースを見物せしが、病と稱して出場せず、あはれ多年の宿敵二人まで吾が鋒先を避けしは實に掌中の玉を奪はれしが如き感無くんばあらず。

嗚呼吾遂に勝てり。積年の屈辱を一掃し得て痛快限り無し。かくて吾部復活の曙光は燦然として炬の如く輝き初めぬ。

○明治三十九年度

去歳、憂恨深き駒場原頭に、一舉にして五年の耻を雪ぎたるの時、一千校友が踴躍歡喜如何なりしか。當年此再興の榮光を負うて立つもの春日弘、桐淵廣一、松村茂。

春四月昨年の例に倣ひて春季小會を開き、十月秋季大會を開く。當年の選手の面々、昨年名をなせし辰野隆など新井源水、戸田保志などゝ共に成績よく、桐淵の疾脚は素より然り、春日の驚く可き進境に校友愁眉を開きぬ。

此年一年級對部競走に於て明石和衛始めて出場し、田中肥後太郎亦現はる。又中學來賓競走に獨逸協會より選手として内藤和行來り一着を占めたり。多年空しかりし頭に桂冠は戴かれぬ。吾が名譽は再び失ふ可らず、覇權を讓ること勿れと一千健兒の意氣益々揚る、あゝされども勝に狎れしか敵强かりしか、圖らざりき駒場戰場に再び桂冠を奪はれんとは、今秋駒場の戰に出でしもの春日、桐淵、なれども、敵には多年の合戰に勝ち誇りたる三島彌彦あり、吾が兩選手努力に努力を重ねたれど此れを破る能はず、三島と僅かに相前後して決勝點に入る、此競走に要せし時間はさまで早からず、今少しの努力にて或は勝利を博することを得しやも知れずと口惜し。大學運動會に於ては敵手とするものなく吾選手悠々春日、松村、桐淵の順に入賞す。

今年の駒場に吾校選手始めて運動靴を穿ちて出場せり。

第三期　自明治四十年至大正二年

顧るに、第二期は混沌たる時代なりき。期末に至りて一時の光榮を負ひしも、翌年再び脆くも之を捨つるを見たり、吾等は努力を新たにし決心を新たにして邁進せざるべからず、則ち第三期に入る。此期に於て、吾一高のみならず我國運動界に其人ありと知られたる田中肥後太郎、明石和衛兩氏の出づるあり、吾部の歴史に光輝ある頁を添へぬ。

此年は去歳の汚辱を雪がんものと校友、選手と共に慷慨、意氣天に冲す。時に田中肥後太郎技未だ熟せず、退きし辰野隆氏を再び起てゝ戰はん策成る。然るに田中肥後太郎は先輩春日の肝腦地に塗れしを見て悲憤措く能はず、本年の吾校運命に關する全責任の己れに在りと感ずるや、則ち立ち、戰ひて死に至るも辭せざる事を竊に期す。當時田中は弱腰にカーキ色の運動袴を穿きて練習す。一先輩此れを見て汝今年の選手なるか、豎子何するものぞと。田中靜かに笑ひて答へず。而も此先輩をして、一度田中が黎明枕を蹶て立ち、或は西風徐ろに梧桐を渡りて錦葉地に滿つる中を、或は朔々寸餘の霜柱を踏み碎きつゝ寒風肌を劈きて狂ふ中を白衣の輕裝して運動場に技を練るを見せしめば、且に忸怩として前言の禮なかりしを謝すべし。實に渠れが半年の猛烈なる而も何人も知るなき間になせし此練習こそいみじけれ。さまで疾脚に非りし彼が僅か半年にして斯界の花形と迄云はるゝに至りしは宜なる哉。若し當年三島をして再び駒場に出でしめしならば、如何に目覺しき競走を見るを得しならん、四十年春季に至りて出づるとして勝たざるなき田中が競走振りに斯界震駭しぬ。

此年十月十二日秋季大會には田中肥後太郎は勿論、明石和衛、戸田保志、安形貞助、中村秀美、中村虎之助、田代壽郎、林靜馬、中村一雄など其技倆を表せり。又一年對部競走に清瀧丑之助三部を代表して出でゝ二着を占む。

駒場の合戰は來れり、應援の大軍白旗を飜し田中、中村秀夫兩選手を擁して原頭に立つ、レースは始まりぬ、見よ、白帽の先驅するを。田中難なく一分三十四秒にして勝ち高等農學校の木原、川上之に次ぐ、かくして凱歌は再び向陵に擧りたり。此歡聲を大學に再びしたるを見よ。從來六百米突競走なるものは、出發に於ては成るべく人後に出で、餘力を養ひ置き逸を以て敵の勞に乘じて以て成功するが云はゞ秘訣なりしなり。田中此の戰略の更らに裏に出で、初めの隙に乘じて疾走遙かに敵を拔き、後の敵をして狼狽爲す所を知らざらしめんとす。大學運動場に於ては此新策見事成功す。學習院二名の選手は當時斯界に名ありし伊達を後に置きて一人は迅風の如く走り敵をおびき疲らせんとす。田中氏此後に接して走る。華胄の弟子等田中が學習院の計中に陷りしを見て手を拍ちて喜悅せしが安んぞ知らん一周ならずして田中は猛然先驅

を仆し奮進して伊達の術數も施すべき所なく、一分三十二秒にして六百米突を突破す。此れ實に吾運動界の稀に見る所にして如何に『肥後さん』が健脚の素晴しかりしかを思はしむ。されば三十八年頃より漸次革新されし競走法は此に全く一變して今日の態を爲すに至れり。

○明治四十一年度

秋十月十日吉日を卜して秋季大會は開かる。明石、清瀧、中村、金野、大井、田代、清宮、俟賀、鈴木、村下等或は短距離に或は長距離に竿飛に長飛に於て各錚々たるものなり。今年の選手たる可き者は中村秀夫、清瀧丑之助兩氏なり、此日一年級對部競走には梅澤徹郎(一部)大井伊太郎(一部)井上謙一(三部)等出でしが井上、大井、梅澤の順にて着す。大井、梅澤は運動部に新入せり。又中學來賓競走にては愛知一中石橋一分三十五秒を以て走り青山師範平野之に次ぎ學習院よりは近衛文麿出で三着を占む。

五歳の昔、覇者の桂冠は徒らに朱門の塵に汚されてより、駒場原頭にも綠旗いたづらに秋に驕つて、楓葉紅を散らすあたり亂るゝ白旗に凱歌を唱へし昔の姿は見る由もなく赤誠決死の選手一千校友相抱いて敗衂の歴史に泣きしも、いつまでかくてあらんや、去年晩秋駒場原頭紅黃綠紫の旗皆色なく、覇者のほまれは再び血を以て購ふ事を得たり。年暮れて再び金風都門を訪ふ。今や慷慨の秋は去つて希望の秋は來れり。健兒の雄心勃々として天下に漲る。今歳再び向陵に凱旋の旗を揚ぐるの兆か、好矣。

然れども、此年の駒場に於て端なくも一場の紛紜起りぬ。吾れは此れを優勝旗事件と呼ばんか。今年始めて優勝旗作られ、此事件はその優勝旗に關聯し居ればなり。連年秋季駒場農科大學運動會に於て各專門學校選手競走に賞としては賞牌と副賞品とのみに止り、一般に記念として殘すべきものなかりしを、當年始めて該競走に優勝旗を設け優勝學校の記錄を

ば永く旗に貽さんとせり。恰も吾校選手としては中村秀夫、清瀧丑之助出場す。敵としては慶應に龜山あり、學習院には年來の名士伊達あり、各光榮ある最初の記錄を優勝旗の表に殘さんものと練習おさ〳〵怠りなし。既にして駒場原頭に戰ふ、白旗場內を壓せん斗り、夕陽に映へて輝く。中村秀夫よく馳せたれど龜山の疾走見る〳〵先頭せる中村に肉迫し、殆んど隔りなきまでに至る中村死力を盡して力走し辛じて僅かに先着する事を得たり。然るに一審判官之を誤りて龜山を一着なりとして中村に二等賞を授與し、優勝旗は慶應の手に歸したり。我れを忘れたる熱誠の應援の功空しからずして桂冠吾れに落ちたりと雀躍したる一千の校友、之を見て爰ぞ默視することを得む。柏葉兒は憤然として立ちぬ。

呆然審判官の處置を見るに堪えざりし熱血の兒は、直接審判官に其誤を訂さんとし場內に亂れ入りて優勝旗を再び審判官に復し、更めて之を吾校選手に贈られんことを乞ふ。此に於て審判官は己が誤判せしことを認め、中村秀夫を一等龜山を二等に伊達を三等としたり。偖て言を更めて曰く、予の審判を誤りしは誠に謝すべし、されど、予の誤りを訂さんとして多數の生徒が妄りに場內に亂入し、剩へ、皇孫殿下御座所前に於て喧騒を極めしは何ぞや。果して第一高等學校生徒の爲して可なることか。抑も此優勝旗は勝利を博したる學校に贈るものにして決して選手そのものに授くるものに非ず。今僅かなる予の誤りの爲めに生徒の本分を守らず、皇族に對し奉り不敬の行爲をなしたるを以て、予は第一高等學校に此優勝旗を贈ることを禁ず。但し第一着は明かに第一高等學校なれば、優勝旗は明年駒場運動會まで無所屬のものとして農科大學之を保管すべしと。理や實に彼れに在り。一時の發憤に驅られて審判官に迫りしは好しとするも、皇族に對し奉りて不敬となるの所爲に出でし罪は實に吾校友の輕擧なりき。即ち恐懼して退く。されど其意氣や賞すべし、一に我れを忘れたる決死の選手あれば一に我れを忘れたる狂熱の應援あり。彼仆るれば我立たずんばあるべからず、遇々法に觸れたるのみ。

吾校友優勝旗を審判官の手に收めて退くや、慶應義塾を始め諸專門學校吾校友の行動を難じて止まず、併せて官立學校

の跋扈攻擊を爲し吹々の聲盛んなり。慶應義塾學生曰く、勝は吾れに在り、然るに一高生の橫暴なる、衆を賴みて吾選手を脅す。今日の一高の成功が彌次馬の多數によりてならば、よし、來らん秋は慶應義塾三千の學生を以て駒場を壓倒し吳れんと、切齒して歸る。咄、吾れ何ぞ衆を賴みて暴擧を敢てするの卑怯を學ばんや。正吾れにあるを訂すに安んぞ躊躇することを須ひん。されど只血氣にはやりて輕々しく事を處せしの誹は免れざるべし。

當年の駒場には此の如き波瀾ある勝利を博したり。次で擧行せられたる大學運動會は、さりながら、中村秀夫はいと穩かなる勝利を獲得し、高等師範の選手二名を後に導きつゝ悠々決勝點に入る。

かくて明治四十一年は全勝に了んぬ。

○明治四十二年度

暫らく此所に此時代の我部員の練習振りを記さんに、明治三十八年長濱哲三郎氏年々の敗陣を憂ひ、或は全く運動法を異にせる端艇を漕ぎて筋骨を鍛へ、或は運動場大周廻數十回を爲すなど猛烈なる練習法をとりてより、漸次吾部員は平素の練習に重きを置き、明石などは偏く歐米各國の陸上運動に關する書を涉獵して參考し斟酌して以て吾が練習法に應用しければ、我國運動界に於て常に最新式の練習法によれるは第一高等學校なりき。一高的精神を根柢とせる猛烈なる練習に此最新式の方法を加ふるなれば大成せざるは寧ろ奇しきことゝ謂ふ可し。晴天なれば、運動場に於て或は六百米突を突破し、或は千米突を走り、又は百、二百の短離距(ダッシング)の突進を試み、時としてはスタートの巧妙、競走の懸引を研究し、或時は運動場大周廻十回二十回伸足(ランング)にて續け、天候惡しき時は分館の廊下を數十回廻り、スタートの練習をなす等絕えざる細心の研究と大膽なる不撓の練習とは、第一人者に非ずんば到底知り得べからざる苦心慘憺たるものあり。此頃より外國徒走(ランニング)方法に則りて鐵釘(スパイク)を打ちたる運動靴を穿つ、輕快にして滑り仆るゝことなく方向變換、疾走、スタートなど意のまゝなり。

秋十月吉日秋季運動會を催す。明石、清瀧、大井、梅澤、村下等吾部の人を初め水野、大河平等は腕に、俣賀等は飛躍に金野、山口、關口等は徒歩に各其長所を表はす。明石和衛は常に若干のハンデキャップを有ちながら徒歩競走（コンパンレース）は悉く、一等の賞を受く、驚く可し彼が進境や、清瀧亦よく馳す、今年の駒場、本郷臺の戰に一人として心を痛ますものなく、凱歌を擧ぐる日の一刻も早からん事を願ふのみなり。校友只希望に滿つ。此日一年級對部競走に近衛文麿氏一部を代表して出で一着を占む。

駒場の手合はせの時來る。慶應の龜山昨年の恥を雪かんとして陣頭に現はる、されど彼の脚健なりと雖も吾が明石、清瀧の前には、あはれ力なきものなりき。先輩も安んじ、應援隊も勝を期して意氣揚々たり。號砲鳴る、有色の帽子は何所にありや。只白帽のみトラックを飛ぶが如し。明石、清瀧、出發し、馳せ、而して決勝點に入りしのみ。龜山は無鳥郷の蝙蝠の如く三着を占め得たり。明石遂にヘビーを出すの要なく一分三十四秒を以て靜かに勝つ、校友歡呼を擧げて堂々武香陵に歸る。次で大學運動會あり、商船學校の日下部稍見る可し、號砲鳴るや、明石悠々最後に出發し、有象無象を追ひて歩むが如し。漸次進むに從つて、明石串刺に競走者を拔きて決勝點に入る。日下部頻りに努力して第二次に走る、清瀧拔かんと試みしも疲れたるにや殆んど兩者相並びてゴールに入る。

其他、今年春四月五日早稻田大學に清瀧と共に一、二着を取りしより以來、或は青山學院に、或は慶應、學習院、高師等十一月十三日の大學運動會に至るまで前後八回明石は常に一着ならざるはなく清瀧、大井、梅澤亦よく名を成せり。かくして、本年は向ふものもなく、語るに足るものなく、吾部はひた勝ちにて勝てり。

本年度委員　清瀧丑之助　堀田正恒　清宮外記

斯の如く吾部史は初期の如き光彩を再び放ちぬ、連戰連捷、吾選手の向ふ所、敵が片影をも見ず、選手の過ぐる所、あらゆるものを蹂躙せずんば止まず。あゝされど嘗ては、秋風淅瀝たる夕一千の校友が白旗を擁し、選手と共に紅涙に咽び

しことも忘る可からず、則ち此事を歌ひ、光榮ある部史を讃ひ、併せて選手を鼓舞せんとして、吉植庄亮氏吾部の爲めに部歌を作る。

柏の旗の行くところ
わが光榮と輝きて
あな、あだ人の岡の辭
墨田河原や南濱や
血を吸りけむ悽愴の
またくり返す勝軍
駒場の臺のはれ軍
迅風のたける如くにも
威風凜々わが戰士
秋風吹いて柏葉旗
友よ矛とれ戰はむ
われ等一千こゝにあり

桂冠こゝに二十年
遮るものゝなかりしに
友よ矛とれ戰はむ。
勝たねばやまぬ雄心に
雪の跡を今日こゝに
友よ矛とれ戰はむ。
見よ雄たけびの只中に
いさごを飛ばす柏葉の
友よ矛とれ戰はむ。
易水寒きながめかな
覇權をゆづる事なかれ
覇權をゆずることなかれ。

○明治四十三年度

今年明石、清瀧、大學に入る。殘るは梅澤徹郎、寺畑博郎、中村武夫、村下晴三郎等多士濟々の觀あり。此頃例へば獨逸協會、京華中學、成城中學の如き諸中學生徒の吾れに教導を仰がんとするもの多く集まり、爲めに運動場は日々賑ひ、先輩を頭に孜々として興ある練習を積む。

十一月八日、夜來の陰雨漸く霽れて、天空朗たり。恰もよしと午前十時より秋季大會を開く。徒歩競走に於て本年部員の外、俣賀、五十嵐、大木などよく走る、殊に大木操は當年入學の士而も盛んに入賞し、一年級對部競走に於ても亦一分四

十五秒を以て一着となる。來る可き合戰の名將の卵か。氏は新に吾部に入る。原田憲次郎之に次で部員となる。吾部優勢なるかな。此日鐵槌拋に於て大河原二五米、一に達し、クリケット拋に於ては辰野保一〇〇米、〇五の遠方に投球して各々吾校の記錄を作る。

秋は來りぬ。吾部年中行事の最なるもの、選手の練習火花散るが如し、寺畑博郎常に群を抜きて馳す。駒場に先ちたる數所の運動會には寺畑、中村、出場し、第一選手梅澤は靜かに力を養ふ、時に早稻田に矢野秀男あり、慶應に井手伊吉あり。渠等にとりては吾が梅澤は怖るべき黑馬（ブラックホース）なりしなり、されども噫黑馬の終に "slip" ならざりしを如何にせむ。光榮ある吾部史は再び此明かなる頁の上に黑き汚點を添へたり。駒場には當時、諸校の群雄馳せ參じて狹きトラックを一列に出發する能はず、止むをえず同一學校より出場する二選手を前後に列べ、此所に二列の出發（スタート）を作る。先輩は寺畑を前列とせんとす、梅澤最後の戰場なるを以て前列に花々しく戰ひて退かんことを乞ふ、其氣や賞すべし、されど梅澤が力や足らざりし全力を傾注せる努力も空しうして徒らに豎子をして名を爲さしむ。一着矢野二着は井手皆疲れて僅かに歩を運ぶ、寺畑出發に遲れ雜兵に混じて著しく遲れたれども、よく邁進して三着となり梅澤之に次ぐ、優勝旗は渠早稻田の手に翻々たり、健兒聲を飲みて戎衣淚に濡る。然りと雖も勝負は時なり。暫らく鬱勃たる復讐の念を白旗に包みて退かん哉。されど、いくばくもなく突如昂然たる凱歌一高山より起り。忍岡上時ならぬ喊聲響きぬ、健兒朱門に勝ちしなり。梅澤會稽の恥を思ひ奮然として高工の緋袴を追ふ。寺畑、中村、之に續きたりしが、見る間に三人一團となりて衆を抜き、其儘疾驅して決勝點に入らんとす寺畑の短軀眞先に飛ぶが如く、中村之に接し、梅澤數尺を離れずして快脚を運ぶ、校友熱狂、坐に在るに堪えず、快哉を叫びて雀躍せしが、決勝點眞近にて學習院榊のラストヘビー效を奏し、三着となる。されど此競走に於て寺畑博郎の時間僅かに一分三十五秒許駒場に於ける矢野の記錄（レコード）に優ること數秒なり。明年の勝算既に成る。

本年度吾部委員　梅澤徹郎　寺畑博郎　藤村藍

○明治四十四年度

今年選手　中村武夫　寺畑博郎　大木操

吾部史を顧るに、初期に於ける明かなる頁は暫らくにして突如暗黑に變ず、暗澹なること數頁にして一閃電光の如く光るものあれど、須臾にしてまた光輝沒して見るべからず。忽ち閃々として黑暗々たる中に輝くものあり、光芒發して則ち全史明なり、第三期の光榮ぞこれ也。而も此燦光、あはれ時しも戸塚原頭に起りし黑雲に蔽はれぬ、然れども星移りて一裘葛、妖氣既に散じて清輝乾坤に滿つ、雄劍腰にあり拔けば秋霜三尺、宿敵を屠らずんば止まず、あゝ西駒場の秋誰が爲めに酬なる、南朱門の風色誰が爲めに新なる。

明治四十四年度選手

秋十月七日、天朗かに、氣澄む則ち秋季運動會を開く、中村。寺畑、俣賀、井上、野見山、近衛等の諸氏よく馳せたる外に、今年入學の內藤和行頻りに出でゝ頻りに入賞す、今歲新部員たる人なり。寺畑は今春の元氣僅かに衰へしに反し、中村益進境著しく、寺畑と相俟つて外敵を鏖殺せんと校友愈望を抱く。一年級對部競走に於ては、內藤（三部）、森本（一部）、林（一部）、などなりしが一團となりて走る內漸く進みて內藤ロングにて衆を抜き、次で悠然たるヘビーに移る、忽ち數メートル後方より森本奮然として之を追ひ、肩並ぶと見るや、內藤驚きて歩を早めしも既に遲く、森本一着、內藤、林之に次ぐ。此三

名群を抜きて優秀なりしかば、三名とも部員とせんとせしも林、森本事を以て出づる能はず、内藤及び星野龍猪、吾部に新入せり。

十一月五日、小春の氣肌に暖かし、柏葉の大軍堂々駒場に陣を張る、楓樹の梢に掛けし陣太鼓蓼々と響して、「勝つたがエー」の聲殷々たり。午後四時と云ふに白帽の選手、中村武夫、寺畑博郎拍手に迎へられて場内に入る。敵は既に陣頭に在り、曰く、慶應の井手伊吉。學習院の内藤政邁、山縣三郎高師の泉莞爾等の面々なり。一列に立ちて出發（スタート）す。寺畑理想的のスタートを以て先驅す。慶應の中島之を追ふ。一週にして寺畑退き中村新手となりて中島を拔かんとす。中島死力を盡して爭ひ、兩者相並びて馳する事數十米突、觀者手に汗を握る。第二曲所（コーナー）に至りて内側にありし中村遂に先驅となりしより中村の元氣は中島の衰弱と相俟ちて歩一歩隔るのみ。而して敵將井手は何所に行きしか姿も見えず副將中島のみ僅かに餘喘を保つ、ヘビーに至るや遙か後方に在りし寺畑猛然出でゝ中島亦拔かる、白旗風を生じて感聲百雷の如し、陣太鼓も破れよと打ちし一校友狂喜して樹上より墜落す。中村武夫は出發後いくばくもなくして一選手の爲めに足を踏まれ、スパイク深く足部を貫きたれど、尙屈せず奮走せり。決勝點に至るや、鮮血流れて靴爲めに紅なり。先輩、校友只喜悅の涙に暮る、忽ち君が代の吹奏起り皇孫殿下吾選手、先輩の禮を一々受けさせられながら、靜々と御退場あり、瞬時前の修羅場嚴肅にして水を打ちたるが如く、只柏葉兒の涙に咽ぶ聲かすかなり。洩れ承はる所によれば、年々必ず此會に御來臨あらせらるゝ皇孫殿下には、向陵建兒の雄壯なる活動を殊の外愛でさせられ、日西に傾くとも、一高選手の競走振りを御覽ありて後ならでは、御退場を仰せ出でさせられずと。あゝ光榮ある哉、吾校の選手や。あゝ光榮ある哉、吾校友や。吾等は勝たざるべからず、吾等は勝たざるべからず。

君が代の樂やむ、則ち一千の校友手に白旗を高く捧げ、先頭には選手優勝旗を持ちて、「嗚呼玉杯」を高唱しつゝ、悠々トラックを一周す。何等の快事ぞ、胸に一塵の雲なく、清涼此秋の如し。去歳紅涙に慈を分ちし健兒今滂沱たる涙に共よ

ろこびを俱にす。時に部長丸山教授叫びて曰く、これあるかな、感激の涙と。あゝ人生意氣に感激せるもの、恒にや是れ一滴千金の涙ならずや。

十一月十一日　大學運動會を催す、中村傷いて出でず、寺畑博郎、大木操の兩選手出場す、如何にしけん寺畑全力を傾注せしも高等師範選手泉莞爾を拔く能はず、大木亦徒らに雜兵に圍まれて其技を現はすの餘地なく、三着を學習院山縣に讓れり。憂ふるべからず、吾れに西方の勝利あり。無念の涙にくるゝ兩選手を擁し且つ慰めて校庭に歸りぬ。

今年度本部委員　中村武夫　寺田博郎　金森次郎

○明治四十五年——大正元年度

今年の選手たる可きものは大木操、原田憲次郎、内藤和行なり春季に於ては早稻田にて大木一着を占めし外早大望月の爲めに苦心を嘗め只管に練習をはげみしが五月中旬大木不幸にも病魔の冒す所となり、爲めに止むなく選手を辭するに至り原田亦健康克しからず、されど兎も角も選手は原田、内藤、星野となる。秋來らばと各自注意おさ〳〵怠りなかりしが、圖らずも大喪に會ひ、上下均しく謹慎しすべて會合の如きは御遠慮申上る旨聞え、又駒場よりも本年度運動會中止のこと通告し來りたれば、其儘練習も左迄烈しくすることなくしてやみぬ、されども又一部に運動奬勵の爲めになる運動會の如きは決して御大喪の主意に反することなかるべしとの說起り、有力なる當局者の說によりて此處に十月十二日吾校庭に於て開催す。此會たるや、只校友諸氏が日頃の元氣を發揚する機に充て、一は本部選手が技を練り又新選手選定の期に供せんとせしものにて、在來の秋季大會に非ず、來賓競走の如きを悉く廢し、陸上運動部練習會と稱す。されば素より何等華やかなる所なく一層質素を旨とし、旌旗を用ひず、唯サークルを作りしのみにて開會せり。此會に於ては、内藤、井上、大木、原田、澤田などよく勝ちしが辰野保は砲丸拋に於て十一米、六五、鐵槌拋にて二十六米、二五、クリケットにて百〇二米、三、

何れも一等賞を得、驚く可き鐵腕かな。一年生對部レースに於ては澤田一郎(一部)、弘中(二部)、木村(二部)の順に入賞す。澤田一郎は其他百、四百、六百などに出でゝ、二着若くは一着を得たり。新進有望の士、自ら又徒走を好み直ちに部員となれり。本年吾部の行事此れを以て終る。世は諒闇に際して天地萬籟の聲を絶ち、武香陵頭蕭條として、秋徒らに老ひんとす。然るに、飛報あり、帝國大學秋季運動會を開催し、例年の如く來賓競走をも之に加ふと。恰も吾校の秋季行軍の時なり、即ち吾部選手は演習從軍を止めて、寂寞たる朶蕚に起居し、日々練習を積む。內藤和行常に優秀なり。校友行軍より歸り來るや、澤田一郎をも練習なさしむ、成績內藤に亞ぎければ、擧げて選手とす、今歳諒闇中なるに加へて乃木將軍殉死の故を以て、學習院出場せず、高等師範亦あらず、敵とするものなし。

十一月九日、一高山に校友來り集まる、白旗を以て應援することを許さず、拍手を以てす、號砲は轟けり蠶業講習所の紅帽二人を先にして、原田走る、澤田之を拔きて二位に出づ、原田亦拔きて三位に在り、內藤後方に在りて餘力を貯ふ最後のロングに於て內藤、澤田相次で、先驅せる紅帽岡田を拔き原田、岡田に接して走る、一高山に喊聲思はずも擧る。ヘビーの時は來れり、澤田、內藤を迫ひて走せ相接して、決勝點に入る原田へビーに移りて、忽ち岡田を拔くよと見えしが、躓きて躊躇すること數歩、爲めに拔くこと能はず又相接して決勝點に入りしは遺憾なりき。校友或は賞し、或は慰めて校庭にて運動部の爲めに祝ふ。時に、秋天漠々として晩暮に近き、夕陽御殿山上に一抹の紅を曳いて、楓葉の搖落亦頻りも也。

本年度本部委員　大木操　原田憲次郎　寺尾重義

○大正二年度

本年度本部委員　內藤知行　星野龍猪　武田晴爾

去歳諒闇に際して我部運動會も極めて質素に靜穩の中に終了を告げ、經費亦節減せられしかば、是に於て我部發展の第一歩として、彼の往昔不忍池畔十三哩大競走の壯圖を偲ばんとて、長距離競走の快擧に出で四月二十七日駒場多摩川畔二子間六哩半の道程を卜して以て向陵男子當年の意氣ありや否やを試みんとせり。

當日朝來狹霧深く武藏野に立ち罩めて、新綠の葉末に宿る白露も重たげに、いつ霽るゝとも分たず、暗雲のゆきき繁くして大いに健兒の出走を沮み、出發時間たる午前九時半までに選手の參集せるもの僅かに十名に充たず、是に於てか更らに十時に延ばすの已む無きに至り、野次數名を加へて午前十時六分、十五名の健兒は一發の號砲と共にスタートを切り、朝露繁き駒場グラウンドを後にして、正門を出で道玄坂下より右折して坦々砥の如き大山街道に合し以て二子に直進せり、第一關門たる三軒茶屋に於てはスタートより先頭を持せる林鎌次郎第一に通過し、遠藤、一戸、本山等之に次ぎ牧、守島、日高殿軍となり、かくて十時三十二分に於ては駒澤村なる第一決勝點に林早くも達し、全部悉く十時四十分三十秒以內にして通過し終り、出走者皆元氣旺盛最後の勝利者たる榮譽を荷はんとて其歩度益速力を加へて少數なりと雖も實にや近來の壯觀を呈せり。

殊に第一決勝點に於て五着なりし横田は猛然ラストヘビーを出して長驅先頭に迫り、益その肉薄を見たりしが遂に拔く能はずして三着となり、林、遠藤はこれより先悠々として先着せり、時正に十時五十分、最初より時間を費すこと四十四分、二着者は更らに遲るゝこと三分なりき、第一決勝點に於て優勢なりし本山仲久は其後疲勞加はりたるにや、速力漸く鈍り初めしと見るや、常に中堅を持して精力を貯へし根岸德雄漸次へビイ出して之と輸贏を爭ひ遂に二米の差にて之に克ちしは、當日唯一の珍とするに足る光景なりき。かくして日高信六郎を最終とし皆時間以內に決勝點に入り。新校長瀨戸氏を始めとして教職員、委員、選手、應援者一同見晴し好き玉泉亭の一室に會して賞品授與式を擧行し、玆に吾部最初の試みなる長距離競爭も芽出度成功を以て終了せり。

陸上運動部部史

次いで五月十一日三田、慶應義塾に運動大會開かる本校より選手として澤田一郎を出場せしむ。澤田の見るから輕快なるロングヘビー功を奏して、數十米突の差を以て一着し、敵も味方も新進一高の勇士を賞揚して止まず、吾れに尙ほ內藤あり、秋の戰鬪刮目して視るべし。

編み得たり、吾部二十五年の史、顧れば十有餘年光榮の歷史、高踏高步、風塵の外を行き、志氣雲を凌ぎし幾星霜白旗秋天に搖めきて、喊聲を縱にせしと雖、時の不祥に逢ふて五歲餘、鴟鴞をして徒らに翺翔せしめし日、背血下て襟を霑し紅涙を以て萬斛の愁を分ちし敗衂の頁をも忘るゝこと勿れ。白雲悠々自ら流れ、星は移り物換りて幾春秋、歷史は敎へ歷史は繰り返されて部史に再び光輝を添へぬ。今日吾が第一高等學校陸上運動部の全國に範を垂れ、實に帝國大學と相並びて運動界稽圃の二中心を爲すもの、誠に此血あり涙ある二十五年の歷史に因らずんばあらず。

凡そ技術、遊戯の中にて練習によりて著しく發達するもの、徒走に勝るものはあらじ、如何なる駑馬も絕えざる一ケ年の琢磨によりて、必ず駿馬となると斯界の達人は云へり。されど駿馬にして一ケ年の琢磨を加へしに如かざるべし。現今年々必ず對外試合をなすものは野球部と陸上運動部とならん。願はくは校友諸兄此等兩部に好選手を得しめよ。部の榮譽は則ち吾校の榮譽なり、部の汚辱はやがて吾校の汚辱には非るか。願はくば、吾部史をして此儘に光榮の歷史たらしめよ。今歲は勝たざるべからず。今秋は陣頭に翻して進みし優勝旗を再び捧げて歸らざるべからず。あゝ多端なる秋は將に來らんとす。（了）

第四期

○大正二年秋より大正八年に至る

我陸上運動部は、或は搖籃時代に於ける光榮の歷史、或は外敵漸く强く所謂渾沌の時代の苦戰、或は更に優良なる選手ありて全勝の業成るの後を受けて玆に第四期に入れり、而してこの第四期はある重大なる意義を有すと稱するを得べし。乞ふ吾人をして暫く語らしめよ。

陸上競技の我國に於て唱導せらるゝや天下の青年は擧げて之を迎へたりと雖も、そは未だ甚だ幼稚たるを免れざりき。されど內外の刺戟は玆に大なる進步を促したり。即ち、或は體育協會は組織せられ時を期して公式の大會を開き、或は新聞社の主催にかゝる競技大會は催され、或は遠くストツクホルムに選手を送り、極東オリンピツクのマニラ、上海、東京にて行はるゝあり、更に今春はアントワープの世界オリンピツク大會に送るべき選手豫選會は開かれんとす。斯の如く我國內の小天地にありし、陸上競技は玆に國際的となり世界を舞臺とするに至れり。我一高陸上運動部に於ても從來は帝大駒場のみに力を注ぎ他は之を顧みざりしも、此期に至りこの二對校競技以外に體育協會主催競技大會其他に出場して我向陵の意氣を中外に示すに至れり。換言すれば、我部は玆に更に一新天地に向ひ開拓の一步を進めたりと稱すべきなり。即ち、この時期は我國に於ても我部に於ても陸上競技の普及的傾向の盛となりし時なり。今簡單にこの時期に於ける我部の歷史を敍してその普及的傾向を事實を以て證明せんとす。

○大正二年度後期

十月十一月、秋季大會。內藤和行、澤田一郎等活躍せり。中學選手は靑山師範の平、專門學校は農大船山優勝す。

丸山部長辭任せられ、山川弘毅先生新任せらる。

十一月二日。戶山學校に於て第一回體育協會大會あり。內藤和行、澤田一郎、吾妻俊夫等參加し、內藤、四百米、立幅跳に於て各二等を得。

十一月八日。帝大運動會、選手、內藤和行、澤田一郎、敵は學習院、高師等なり。內藤、澤田、相次ぎてゴールに入り

見事に勝つ。

十一月十六日、駒場運動會、選手、內藤和行、澤田一郎、某校選手は卑劣にも種々の妨害を加へ遂に竪子をして名を成さしむ。切齒して歸る。

○大正三年度

五月十七日、鴻の臺方面に長距離競走を行ふ。

十月十日、秋季大會。澤田一郎、六百米を一分四十秒にて走す。但しハンディ二十五米あり。一年級對部選手は三部の瀧口重一勝つ。中學選手は愛知一中の吉村、專門學校は農大の太田優勝す。

十一月八日。駒場運動會、選手、澤田一郎、弘中協、我選手力走よく勉めたれど遂に慶應の津村に敗れ澤田二着に入る。

十一月十四日。帝大運動會。選手、澤田一郎、弘中協、澤田よく優位を持せしが、俄然轉倒して、慶應の津村、農大の船山等ゴールに入る。本年度より大學は官立私立の區別を廢し、且つ優勝旗を作れり。澤田は津村の妨害によりて、轉倒したるものと認められ、津村は除外されたれど優勝旗は遂に我手に有らず。必勝を期したるにこの事あり、悲憤止む所を知らず。

十一月二十二日。戸山原に於て第二回體育協會大會あり。澤田一郎、弘中協、中村省吾、篠崎國男等參加す。

十一月二十八日。小會を開く。始めて優勝旗を作り部選競走を行ふ。三部優勝して最初のマークを附す。

本年度委員　澤田一郎　島田藤　中村省吾

○大正四年度

五月二日、玉川方面へ長距離競走を行ふ。

五月十七日。上海に於て第二回極東オリンピク大會擧行せられ、澤田一郎、八百米、一哩リレーの選手として出場し。一哩リレーに優勝して歸る。

十月十六日。秋季大會。部選は二部優勝す。山岡愼一、六百米にてハンディ二十五米を有しながら一分三十九秒にて勝つ、中學選手は高師附屬の窪田。專門學校は早大の十川勝つ。

山岡は夏期休暇中北條なる詠歸寮にありて水泳と共に競走の練習をなせしが、秋に至り俄然頭角を現はし、學習院、高師、農大、日齒等運動會に出場し常に優勝せり、期待する所大なり。

十月三十日。帝大運動會。選手、山岡愼一、清水禮三、山岡よく走り期待に背かず一分三十二秒なるレコードを以て優勝し、清水二着に入る。優勝旗一高山に飜る。

十一月七日。駒場運動會。選手、山岡愼一、清水禮三。時に秋雨蕭條。泥濘の中を山岡再び優勝旗を握る。清水三着に入る。全勝の榮冠我手にあり。

十一月二十日、戸山原にて第三回體育協會大會あり。澤田武治、千五百米に參加す。

本年度委員　井上一元　中山元晴　鄕隆

○大正五年度

三月五日。從來不忍池畔、玉川、鴻の臺等に行へる長距離競走を大宮氷川神社前より本校々門に至る間と定め、且つ之を第二學期に於ける年中行事と定む。即ち第一回を行ふ。飯塚博、優勝す。

五月二十日。大阪每日社主催日本オリンピックあり。井上一元、百米にて二等、二百米は二十四秒五分の一を以て一等を得。

九月二日。芝浦に於て明春擧行さるべき極東大會の豫選大會あり。山岡愼一、四百米にて五十五秒五分の四を以て一等を得。飯塚博は十哩にて六等を得。其他。山縣昌夫、杉基一、井上一元等も各入選せり。

十月七日。秋季大會、山岡の外、澤田武治、杉基一等大いに進境を示せり。對部は二部優勝す。中學選手は麻布の志賀、專門學校は不謹愼な態度ありし早大の十川、明大の岡田は之を除き、早大の藤澤を勝者とす。

十月二十九日。朝日新聞社主催東西對抗競技あり。飯塚博、二十五哩にて九等に入り、山縣昌夫、走幅跳に出場す。山岡、春季の慶應、秋に至りては高師、農大にて優勝し、今年始めて作りし明治の優勝旗も之を得て意氣大いに擧る。

十月三十一日。駒場運動會。選手、山岡愼一、杉基一。山岡スタートより先んじ他校選手の追從を許さず、悠々勝ち優勝旗三度、我手にあり。

十一月十二日。帝大運動會。選手、山岡愼一、澤田武治、時に山岡病みて大學病院にあり。敵意外に强しと傳へらるゝに及び、發熱を犯して出場す。而して例の如く優勝し、澤田亦二着に入る。優勝旗は四度我手にあり。全勝は玆に二年を重ね、更に他に一の優勝旗も我有なり。歡呼の聲、洋々として六寮に沸く。

本年度委員　福井瀞　太田忍　秋山雄一

○大正六年度

三月十一日。大宮一高間長距離競走。飯塚博、一時間四十四分五十秒を以て優勝す。菅村道大郎、河野利雄之に次ぐ。金栗四三氏、來賓として參加す。

四月二十七日より二十九日迄、讀賣新聞社主催東海道驛傳競走あり。飯塚博、河野利雄、吉積泰、加藤武雄、菅村道太郎、東方選手として參加し皆優秀なる成績を收めたり。

五月八日。芝浦に於て極東オリンピック大會あり。飯塚博、番外二十五哩に八着に入る。山形昌夫は、走幅に杉基一は八百米にて出場せり。

八月十八日。北條に於ける體育協會夏季練習會あり、山縣昌夫百米に十二秒五分の一のレコードを殘せり。

十月十三日、秋季大會。本年始めて點數制度を採り、一部三十七點にて優勝す。主なる記錄次の如し。百米、內村祐之十一秒五分の一、走幅跳、山縣昌夫、十八呎八吋、四百米、杉基一、五十八秒。中學選手は曉星の平野、專門學校は日齒の山內勝つ。

十一月五日、駒場運動會、選手、河野利雄、杉基一、我選手善く鬪ひしも、遂に日齒の山內優勝し、河野二着に入る。旬日後の報復を期し淚を呑んで歸る。

十一月十日。帝大運動會。本年度より運動場一週宛四人のリレーに改めらる。選手、內村祐之、尾形正作、山縣昌夫、河野利雄。終始よく先頭を持して勝ち、凱歌一高山に起り優勝旗を擁して歸る。

本年度委員　德永豐　尾形正作　中牟田良一

○大正七年度

二月十七日。體育協會十哩競走あり。大島寅治其他數名參加し、大島四等に入る。

二月二十四日。大宮長距離競爭。大島寅治、一時四十七分にて一着、小田切武昌、山田秀三之に次ぐ、來賓金栗氏一時三十九分のレコードを作る。

四月二十一日。朝日新聞社主催東西對抗競技に、十哩、大島寅治、百米、窪田重耐、八百米、一哩リレー河野利雄參加す。

體育協會夏季練習會北條に開かれ、本校よりも多數參加し優秀なる成績を示せり。

十月五日。秋季大會。一部三十二點を以て再び優勝す、重なる記錄、二百米、内村祐之、二十四秒五分の四。鐵彈投射、鄕達夫、九米六二。中學選手は豐島師範の石井。專門學校は早大の金勝つ。

十月二十一日。報知社主催京濱間マラソンに大島寅治、加藤武雄參加す。

十一月二日。體育協會大會芝浦に於て開かる。本校よりも多數參加し、河野利雄は八百米にて二着、大島寅治は十哩窪田重耐は百米にて各四着に入れり。

十一月九日。帝大運動會。選手、長澤信之助、阿部忠雄、窪田重耐、河野利雄、内村、尾形皆病みて新選手を交へて戰ふ。遂に利あらず早大に破れ二等となる。白旗慘として悲風に泣くのみ。

十一月十六日、駒場運動會。選手、河野利雄、尾形正作、高師の齋藤よく走り先頭にあり、ラストに至り河野猛然として之に迫り、最後のコーナーに至りし時、如何なる機會にや、兩者相觸れ共に轉倒し、早大の平野ゴールに入る。物議囂囂たり。審判會議の結果、河野の齋藤に觸れしは惡意に非ずして單に注意の不足なりしと認め、改めて平野を一着とせり。今秋河野は高師、農大等各所にて勝ちたれば必勝を期したるに、この悲慘な敗を被り唯天を仰ぎ長嘆息するのみ。

本年度委員　佐藤茂樹　上野俊亮　野津謙

○大正八年度

三月九日。大宮長距離競走。加藤武雄、一時四十五分。大島寅治、一時四十六分共に昨年のレコードを破る。山崎品造之に次ぐ。

部長山川先生昨年末に赴去せられ、石川剛先生新任せらる。

從來春季小會、對寮試合の團體競走等として、本校西ケ原間往復五哩競走を行ふ例なりしが、四月二十九日始めて殊に我部主催の獨立したる競走として擧行し。大島寅治、三十分四十秒のレコードを作る。

七月中北條に於て夏季練習を行ふ。

十月四日　秋季大會。從來の大會は運動部のみの獨占する所にして寮生全般は極めて冷淡なる傾向ありしを改め、學校の運動會たるの實を擧げんとせり。即ち從來の點數制度及び部選を廢し、各競技にアマチューアレースを加へ、一般寮生の出場を奬勵し、從來の優勝旗は之を一年級組選に與ふる事とせり。亦設備の完全を計り、入場券を發行し不眞面目なる入場者を防止せり。爲に當日は近來になき盛況を呈せり。重なる記錄、百米、窪田重耐、十一秒五分の三、六百米、島村鐵也一分三十五秒五分の四、槍投、小田切武昌、百十六尺六寸、中學選手は埼玉師範の茂木。專門學校は日齒の蓮見勝つ。

十一月三日。明大にて窪田重耐、加藤英夫　阿部忠雄、島村鐵也のメンバーにて優勝旗を得て歸る。

十一月九日。帝大運動會。選手、窪田重耐、長澤信之助、阿部忠雄、島村鐵也。窪田先頭を持せしも、神商の奥山出づるに及び混戰に陷り、早大、神商と接戰して遂に破る。

十一月十六日、駒場運動會。本年度より八百米に收めらる。選手、島村鐵也、杉原雄吉、豫選にて、第一回には杉原コーナーにて躓き轉倒し、第二回に島村は、佐伯、蓮見、得能、茂木等と白熱戰を演じて遂に五着となり。共に惜しくも落選せり、今や多くを語るを欲せず、唯更に來らんとする秋を思ふのみ。

本年度委員　近藤綸二　齋藤慶司　吉田篤二

第五期

○大正九年度

對三高陸上競技試合の開始。

此れまで一高陸上運動部の對外試合は殆んど帝大駒場の兩運動會の專門學校招待レースに出場する事のみであつた。而して當時その試合に勝つ事は即ち東京に於ける或は全國に於ける陸上競技界の覇權を掌握することであつた。併し時勢は次第々々に移つて行く。それと共に極東大會等の刺激を受けた我が陸上競技界もこれ迄の唯のランニングレースより漸く一般陸上競技の方へその重心を移しかけてゐた。當時の我が部員も亦其の點に留意することを忘れなかつたのである。その時宛も大正八年夏我が部員房州北條の體育協會夏期練習會に於て三高の部員と知り意見の合致を見大正九年四月三日三高軍野球、端艇の二對校試合の應援に上京するに際し、陸上競技全般にわたる試合を行ふことになり茲に第一回對三高戰の幕は切つておとされたのである。

四月三日、雨の爲めに三高軍來らず。

四月四日、午後より帝大トラツクに於て試合は開始された。

試合經過

百米　一、大村(三)　十二秒　二、香山(三)　三、藤田(三)

千五百米　一、神田(一)　四分四十八秒五分の一　二、杉原(一)　三、城田(三)

十六封度砲丸拋　一、長澤(一)　八米、五九　二、大竹(三)　八米、二八　三、齋藤(一)　七米、八四

八百米リレー　一、三高チーム(香山、西村、藤田、大村)　二、一高チーム

槍投　一、香山(三)　一三一尺、二　二、高井(三)　一二五尺、二　三、島村(一)　一二〇尺、二

十哩　一、柴野(三)　六八分二六秒五分ノ四　二、石川(三)　三、中山(一)

二百米　一、大村(三)　二五秒五分ノ一　二、島村(一)　三、香山(三)

走高跳　一、夏目(一)　一米、五九　二、岡井(三)　一米、五七　三、

八百米　一、神田(一)　二分一八秒五分ノ四　二、杉原(一)　三、益本(三)

四百米　一、島村(一)　五八秒五分ノ二

二、藤田(三)　三、岡井(三)

圓盤投　一、齋藤(一)　九一・尺〇五

二、清水(三)八八・尺五　三、岩田(一)八五・尺五

二百米　低障碍　一、加藤(一)　三〇秒五分ノ四

二、香山(三)

走幅跳　一、大村(三)　五米・八〇　二、長澤(一)　五米・六八五

三、谷井(三)　五米・六一

高障碍　一、香山(三)　二〇秒五分ノ四　二、谷井(三)

千六百米リレー　一、一高チーム(加藤、阿部、河野、島村)

四分〇秒五分ノ一

二、三高チーム

總點一高三六點　三高四九點

天遂に我に利せず不幸勝利の榮冠は三高軍に奪はれてしまつた。此の日島村は短距離に於て孤軍奮闘し神田は中距離に敵を壓し、齋藤は圓盤に於て當時優秀なる記錄を現し、鬼才夏目の出現しては三高の長所なる走高跳に見事一等を得、加藤英の低障碍に於て敵の主將香山を打破るなど彼等多くの努力も一高軍に不利なりしその日の勢を如何とも爲し得なかつたのである。

併しこの一敗は驕て我を奮起せしめ、遂に或は新しい陸上運動部を作るべき基礎となり或は我をして四勝の榮ある歴史

を遺さしむべき素因ともなつたのである。

又この試合が高等學校對抗競技の先驅であることも亦特筆すべき事柄である。

四月十七日)
同　十八日)　アントワープ萬國オリンピック大會國際選手第一豫選あり、通過せる者島村鐵也、齋藤慶司、岩田永之介、小林芳夫、夏目敏行

四月二十四日)
二十五日)　同第二次豫選會　成績次の如し

四百米　島村鐵也　二着　五十五秒

槍投　齋藤慶司　三等　四十二米一〇

走高跳　夏目敏行　一等　一米六二

五月二十九日　春季小會

六月六日　對慶應オールホワイト

四十九、五對五十八、五にて敗る

此の學年我が部は常に悲境にあつた。帝大に敗れ駒場にては予選に落ちる程の負け方もした。併しこの學年には二つの大きな事業があつた。一つは對三高戰の開始と今一つはトラック建造のことである。

三高戰前より我部員は早くからトラックを有することの必要を感じてゐた。それは大體次の様な理由からであつた。

1. 練習の便利の爲め、當時我部選手は毎日帝大トラックに練習に赴いて居つたのである。

2. 賽友との接近

陸上運動部部史

帝大トラツクでの練習はどうしても一般寮友と生活が遠ざかるやうな結果を生み寮友の理解同情をさまたげたのである。

3. 寮友一般に對する普及

然るに三高に敗れてから一層痛切にトラツクの必要を感じ萬難を排してもトラツク建造のために努力せんとの決心を以て學校當局に相談し幸その同意を得て一體の傾斜地であつた場所を切り開き弓術道場を動かし木で二百五十米のトラツクを境し木の下水を作りともかく走れるだけになつた。こゝに今日のトラツクの基礎が出來たのである。

十月二日　秋季大運動會

島村の獨舞臺の觀あり、二百米二四秒五分の一の好記錄を作る。

組選は文科三組優勝、中等學校リレーに埼玉師範、專門學校は早大　タイム三分五十秒五分の三

帝大運動會

このレースは此の年から千六百米リレーに變つた。我が部選手は八月以來一意覇權の奪還につとめた。島村は四百ランナーとして當時天下無敵であつた。加藤英又巧妙なるスタートランナーとして名あり、强剛柴あり新進加藤重又よく實力をつけ必勝を持して上京して來た。このレースこそ日本千六百米リレーの覇權の爭ひである。

加藤巧に早大平野と並んで走り若冠加藤(重)亦好走早大馬場につきて離れず柴亦そのまゝにてに渡る關西學院は遙に遲れたるがこの時三番渡邊奮闘して稍その差を縮めしも尙勝敗外に在り。我にも島村あり。早大如何に强しと雖も樂に勝つべしと思はれた。しかるに敵に二三米後れたる島村はバトンを取るや如何にせしや急にスピードを早めて早大を拔き早大亦これに釣られて宛も二百米の如きスピードを以て突進した。中半を過ぎ、早大は疲勞して落ち我優勝と思はれしに島村亦疲れ棒立ちになり如何ともするを得ず一高の應援隊の前で勝敗外と思はれし伊達に拔かれてしまつた。我等の無念は勿論寮友皆泣いた。

駒場戰

これより一週日島村は深く心中に期する所あり。毎日駒場に練習し一意此の試合のために備へた。

大正九年度帝大駒場戰選手

我が選手島村、神田當時は試驗の前日なりしも寮友行きて應援するもの多し、敵は明大の得能、農大の梨羽、島村(二分七秒五分の三)は最初より悠ゝリードして堂々勝つ、神田亦四着にておどつてゴールに入る。實に駒場に雌伏すること一年今正にこの勝を得たり。寮友狂喜して選手を擁して歸る。凱歌八寮をゆるがす。

此の秋は帝大には惜敗したけれど駒場に勝ち其の他早大に明大に學習院に各運動會に勝を制し又インターカレツヂ競技會には島村活躍して我部の權威は大いに上つた。

併し我らは重大なる一戰を四月に持つてゐた。即ち第二回三高戰である。我部一同結束して立つた。

我部は米國より歸朝直後の岡部平太氏をコーチに仰いだ。氏は一月中旬より毎日その姿をトラツクに現して氏一流の嚴格なるコーチ振りを以て我々を指導せられた。

陸上運動部部史

三高戰準備のため種々のレース競技會を催した。特に中長距離の元たる五千米西ケ原マラソン等に力を注いだ。唯大宮競走は餘りに距離長く又其の他の事情により中止した。

十二月十六日　西ケ原往復競走
一着　神田　三〇分四〇秒（この競走のレコード）
十二月二十一日　五千米競走

○大正十年度

委員　加藤重一　石田啓次郎　渡邊　諒（鹽見一郎）

一月二十二日　十哩競走
一着　中山　五十九分三十九秒（この競走のレコード）
三月十九日　第一回競技會
同二十六日　第二回競技會

此の結果我は十分の自信を以て試合に臨んだ。

併し長距離の雄中山足を傷け槍投の闘將古在盲腸炎にて倒れ三高は大村、藤田の兩雄尚あり。ジャムブに谷井、坂下の雄あり。形勢樂觀を許さざるものがあつた。

戰況。十哩競走だけ前日に行はれた。

四月二日午後三時我が部は中山傷き、ために神田出場、良く奮闘この門出の一戰に敵將柴野に勝つを得た。併しゴールに入りしとき疲勞その極に達し倒れんばかりであつた。汐見三等に入り中山又傷ける足を引きつゝ凱歌先づ一高に上つ

た。

四月三日、前日よりの雨は益甚だしくなつてトラックは池の如くフィールドの端も見えぬ位であつた。試合はこの中で行はれた。

十哩　一、神田（一）　一時二分四十七秒五分の二　二、柴野（三）　三、汐見（一）
百米　一、大村（三）　一一秒五分の四　二、藤田（三）　三、島村（一）
十六封度砲丸拋　一、菊池（一）　八米八四二分の一　二、古海（三）　八米四二二分の一　三、齋藤（一）　八米四〇二分の一
八百米　一、島村（一）　二分十四秒　二、加藤（重）（一）　三、神田（一）
二百米低障碍　一、西田（三）　加藤（一）　二九秒　三、石田（一）
走高跳　一、谷井（三）　四呎一〇吋　二、岡井（三）　四呎一〇吋　三、小澤（三）　四呎一〇吋
八百米リレー　一、一高チーム（加藤、柴、加藤、島村）二分三十九秒五分の一　二、三高チーム
百十米高障碍　一、谷井（三）　二十秒、二、加藤（英）（一）　三、石田（一）
二百米　一、藤田（三）　二十四秒五分の二　二、島村（一）　三、大村（三）
槍投　一、齋藤（一）　四〇米四四　二、奥田（三）　三七米二六　三、神田（一）　三六米五五
走巾跳　一、小澤（三）　五米四六　二、岡井（三）　五米四四　三、松本（一）　五米三九
四百米　一、島村（一）　五六秒五分の四　二、加藤（重）（一）　三、柴（一）
圓盤投　一、清水（三）　二四米五一　二、土井（三）　二四米一五　三、齋藤（一）　二三米二二
千五百米　一、益本（三）　四分五三秒五分の二　二、神田（一）　三、石田（一）

千六百米リレー　一、一高チーム（加藤、柴、加藤、島村）三分五十四秒五分の四　二、三高チーム

總點　一高四六・二分の一點　三高四〇・二分の一點

試合は百米に始まつた。三高の特技島村の奮闘も及ばず一二等を奪はれた。併し砲丸に新進菊池奮闘一等を得、齋藤振はず三等に落ちたれども八百米に島村、加藤（重）相次いでゴールに入り、神田前日の疲れを物ともせずラストに敵將益本を抜きて全勝しこゝに七點の差を生じ、低障碍にも加藤（英）、西田同着なれども石田三等に入りこゝに八點を勝越し我軍優勢なり。しかれども敵走高跳に振ひ我選手の奮闘も如何ともすべからず。全敗を喫して差二點となりこゝに八百米リレーは一つの勝敗の分れ目となつた。三高のスタート藤田、一高は加藤（英）、藤田この日の元氣當るべからず加藤少しく後る。二番柴、三番加藤（重）良く頑張りて安部を抜く。大村、島村を追へども及ばず一高の勝となる。このレースは實に大切なレースであつた。

午後　高障碍三高谷井雨中のトラクに悠々三歩にて走る如何ともすべからず僅に同點に喰ひとめた。併し次の二百米藤田の元氣遂に島村を抜き又得點の差三點となる。槍投は一高優勢であつたが走巾跳は三高の得意とする所、一高は新進松本一人にて奮闘して前年の優勝者大村を落した。この一點は實に貴重な一點である。四百は豫定の如く見事な全勝に終つたが圓盤雨のため滑りてタアーン出來ず齋藤敗れて差僅に三點となつた。しかも千五百に神田前日よりの力戰に勞れて益本をして名をなさしめ實に勝敗の決千六百米リレーに懸つたのである。併しこのレースは問題にならなかつた。最初より悠々敵を置き百米の差を以て勝ち玆に第一回三高戰の恥を雪ぐことが出來たのである。

トラツクは前年九月に兎に角一通り使へるやうになつて居た。併し完全なものでは決してなかつた。走れると云ふだけのものであつた。溝も不完全な木製であつた。然るに一夜大雨があつて雨水は溝を溢れ出しトラツクを滿し遂に隣家の土手を崩して流れ込むの椿事を起した。そこで我部は學校に交渉し今日の煉瓦の溝を作つたのである。その時我部も決意し

多少の犠牲を拂つてもトラツクを完全なものにせんと齋藤慶司氏其の他の諸氏の異常なる努力により當時に於ては東洋一と稱し又稱せらるゝこのトラツクが出來上つたのである。

トラツク竣成三高戰優勝の喜びに運動會は開かれた。

四月卅日　トラツク竣成對三高戰優勝紀念大運動會

加藤、石田活躍し新進に春秋現る。

組選は文科三ノ組の勝、

稀に見る活氣ある運動會であつた。

これより先上海極東大會選手の豫選が行れた。

加藤（重）四百四十碼に二等を得五十四秒の好記錄を出す。しかも向陵チーム（加藤（英）石田、加藤（重）、島村）は千六百米リレーに勝ち日本記錄三分三十九秒五分の四を作る。

かくの如くトラツクは竣成し、三高戰には雪辱し對外にも大いに威を示し我が陸上運動部の新しき陸上運動部としての基礎漸く定まり華かなる門出の年である。

併しこの年の委員深く考ふる所あり。又トラツクの負擔輕からざるものあり。多く外に出づるをなさず。三高より夏もう一度の挑戰ありしもしりぞけ、行事も出來る丈質素に唯内部一般寮友への普及と來らん秋の帝大駒場に全勝の榮を得んとしての努力に春を過したのである。

八月末信州沓掛に部員一同合宿練習し秋のシーズンに備へた。

十月二日　秋季運動會

加藤、石田、齋藤等の活躍

新進に杉山あり棒高跳に澤田現れ運動會レコードの出るもの多し。

組選リレー文五優勝。

專門學校リレー(千六百米)早大チーム三分四三秒五分の二

大正十年度帝大駒場戰選手

帝大運動會

我が部の加藤、石田の二將に配するに木村、松本を以て陣容を固め、九月以來加藤(英)、岡崎兩氏の下に猛烈なる練習を以て昨年の無念の敗を雪がんとしたのである。

敵は依然早大である。關西學院來らず。

豫選は石田スタートを走り樂に勝つ。

決勝オーダーは松本、木村、石田、加藤、

松本よく走りラスト僅に河合に後れしも美事なるレース振を示して木村につぐ。木村又よく走り。よく頑張りて離れず石田につぐ。石田バトンを取るや急迫早大佐藤に迫り直ちにこれを引き抜きラストスパート見事に引き更にこれを離して加藤に渡す。加藤は當時一流の四百ランナーなり。併し早大内田は元來低障碍走者なれどもその力侮るべからず、バトンの受け渡しを利して我に迫り、そのまゝラストストレートに入りても加藤引き離す能はず兩者肩を並べてゴールに突進し一時は我が選手敗れたとさへ思はれたが加藤ラストの踏張り二歩許りグイ〳〵と出てテープを切る。實に稀に見る接戰である。

しかもタイム三分三十九秒五分の二當時の日本記錄を破つたものであつた。

これ三年目の勝であり昨年の無念なる恥を雪ぐことが出來たのである。石田の奮闘特筆すべく加藤のラストの踏張りなくんば又もや無念の敗を見る所であつた。唯昨年の雄闘西學院の來なかつたことのみが殘念である。

駒場戰

昨年我々は島村の努力により實に久し振に駒場の勝利を得た。今年又覇權を維持せんと加藤、石田の努力は氣の毒な程であつた。しかも本年は決して樂觀を許さなかつた。日齒の戸田は今春より現れて極東大會に勝ち實に二分三秒五分の四のレコードを出してゐる。前に加藤高師運動會にスプリントを利して戸田を敗りしが戸田その後猛練習をせりと開く。當時稀に見る好レースを思はせられた。

加藤、石田共に樂に豫選に入る。石田は悠々三四位になり加藤最初よりリードして半を過ぐ、戸田は常に二位にて加藤を追ひ、後二百米程の松の木あたりよりのスピード猛烈に加藤を抜き加藤追へども及ばず石田又加藤に追ひ付き、兩者渾身の努力をなせども如何ともする能はず、戸田、石田、加藤の順にてゴールに入る。戸田タイム二分三秒八。

我が選手のタイムは二分八秒、僅にそのタイムの優れしを以て慰とする外なかつた。

かくて全勝の擧は遂に成らなかつたが選手一同のなした努力は實に大きなものであつた。

十二月十三日　アマチユアミート(山岡賞レース)

陸上運動部史

トラック竣成してより寮生の毎日トラックに出でゝ陸上競技を樂しむもの次第に增し又その間には各種競技に有望なる人々も現れて來た。それで今までの陸上運動部にない新しいこの會が行はれた。部員は一切出場せず又この秋よりアマチュア標準レーコードを定めこれを破りしものにはレコードメタルを與へると云ふ制度を始めたのでこのメタル保持者も出でず全部新しい人々で行はれた。又一方先輩山岡氏帝大駒場戰の前途を思ひて四百、八百のレースにメタルを贈られたので益々この會は盛んで第一回の企てとしては立派な效果を擧げた。

上田この會に最も活躍し相當の記錄を殘した。

又この年は從來の寒稽古以外に十二月中冬期練習會を行ひ各種競技のコーチをなしこれ亦相當の成績を擧げ一月に入りトラック凍りてからは從來通りの寒稽古を行つた。二月下旬十哩競走を行ふ。

一着　田中

又今迄對部の形式で行はれた三高戰を對校試合となすの必要を感じ二回このことを總代會にはかり滿場一致の贊成を得此處に新しい陸上運動部の基礎は定つた。

○大正十一年度

委員　松本良彦　山口義雄　田中不破三

對三高戰

學制改革のため四月の三高戰は七月に行はれることになつた。一勝一敗の後を受けて、松本主將の任につき、更に眞面目なる練習をモットーとして進んだ。此年卒業の多くの先輩も毎日トラックに現れて熱心なるコーチをなし爲にこの大なる一戰に美事なる勝利を得たのである。

五月六日　春季運動會

松本、春秋、木村、杉山など優る、

組選は文丙

其後次の如く多くの練習試合を行つた。

五月二十三日
同　二十四日　對帝大先輩試合　第一回

六月十一日　對先輩　第二回

七月二日對オール學習院　四六——四四勝

七月十八日對先輩試合

對三高戰

七月三十日於一高トラック

一高選手

松本良彦、岡松進次郎、片岡三郎、梶浦實、菊地正士、北村岩介、木村正彦、國澤新太郎、小部斗志男、佐川清、澤田敬一、島田錦藏、杉山嘉、曾彌益、田中辰男、田中不破三、堤正幸、土井由之、中島正樹、春秋博太郎、牧野正己、安原米四郎、與謝野秀、吉岡秋義、

百　米　一着、望月(三)十一秒五分三　二、春秋(一)　三、內藤(三)

陸上運動部部史

砲丸拋　一等、菊地(一)十一米五八　二、奥村(三)　三、杉山(一)
八百米　一着、木村(一)二分十三秒五分二　二、饗庭(三)　三、佐川(一)
低ハードル　一着、小部(一)二十八秒五分一　二、望月(三)　三、直木(三)
走高跳　一等、松本、與謝野(一)　一米六二　三、小澤(三)
八百米リレー　一着、一高チーム　一分三九秒五分一　牧野、佐川、松本、春秋、
走巾跳　一等、松本(一)　六米四四　二、小澤(三)　三、木村(一)
高ハードル　一着、巖(三)十九秒　二、望月(三)　三、國澤(一)
二百米　一着、春秋(一)　二十四秒五分一　二、內藤(三)　三、小部(一)
五千米　一着、田中(一)　十九分五十二秒五分四　二、吉岡(一)　三、吉田(三)
圓盤投　一等、北村(一)三十米十三　二、杉山(一)　三、奥村(三)
四百米　一着、松本(一)五十六秒五分二　二、春秋(一)　三、曾彌(一)
槍投　一等、山本(三)三十六米二十八　二、杉山(一)　三、直木(三)
千五百米　一着、木村(一)五分〇秒五分四　二、安原(一)　三、片岡(一)
千六百米リレー　一高チーム　四分　佐川、曾彌、春秋、松本、

五七——二七　大勝

斯くの如く我軍の壓倒的大勝に歸した。最初は三高劣り難く見えたが、菊地先づベストフォアの最後の一投に見事敵を抑へて點を消し、八百米に木村の奮闘の結果見事に勝ち越し、新進小部又低ハードルに望月を抑へて、以後三高は一高の爲すがまゝに委せてしまつた。松本の走巾跳に於ける六米四四は當時の日本記錄とタイレコードであり、北村の圓盤一投

よく三十米を越せるなど見事なレコードを殘した。此の一戰は完全なる我軍の勝利で、强敵三高をして一言もなからしめたのである。滿都の新聞雜誌悉く筆を揃えて我勝利を稱へた。實に陣容の整然たる策戰の齟齬なき、各戰士の意氣投合せる此の試合に於けるが如きは未だ嘗て見ざるものがあつた。

山口義雄氏の死

氏は早稻田中學出身、第二回三高戰の低ハードルに出場し新進の意氣を示したが、不幸にして其後病を得て昔日の元氣を失つたが、しかもよく松本主將を助け、今年度委員として努力されたが七月試合以前に再び病魔の冒すところとなり、遂に其八月試合の後間もなく死去された。惜しみても尙餘りあり。こゝに深く哀悼の意を表する次第である。

九月三十日對三高優勝記念

秋季運動會

組選は文五再び優勝し、

中學校リレーは曉星中學、專問學校は明治大學優勝す、タイム三分四十三秒五分四。

帝大戰

三高戰に見事大勝を得た我部は秋の帝大駒場にも覇權を握り、全勝の榮譽を擔はんものと一意專心練習に努めた。

我選手　松本、春秋、木村、佐川、

併し我部は特に傑出せる選手を有せず又佐川未だ若く、且陸上競技の普及につれ他の修業年限長き大學專問學校も練習大いに努め多くの良選手を擁する有樣にて我選手は當然苦戰を免れ得なかつたのである。

しかも當日豫選に於て明治大學、慶應大學の二强者と顏を合せ善戰大いに努めたが如何ともなし得ず遂に從來見ざりし、決勝に出場不能といふ事になつたのである。

我選手は實によく戰つた、しかも尙この結果になつた、いかにも殘念至極ではあるが實力の差誠に止むを得ない次第である。

駒場戰

帝大戰に敗れてせめてもの努力は駒場の一戰に對するそれである。しかも去年我選手を苦しめた戸田尙在り、加ふるに九州よりこの年上京して高師に入學せる納戸は春以來常に戸田を破り天下に獨步する有樣、その間に於ける我選手の苦心は察するに餘りあつた。

當日、如何にせしや戸田は出場しなかつた、納戸には及ばずとも、せめて戸田を敗つて去年の敗を雪ぐべきに彼の不出場は誠に殘念であつた。

我選手、木村、松本、

松本作戰上犧牲となつて走り、木村その後を樂々走り良く抑へて走つたが、納戸の走力飽くまで强く木村渾身の勇を鼓して之を追へども遂に及ぶべくもなかつた。

納戸一等　木村二等

十二月三日

一高一年對浦和高等學校一年練習試合　於一高トラック

新設の浦和高等學校は我先輩のコーチに依つて練習を積んで居たが、練習の爲めに我一年と、試合をすることになつた。

一〇九——九〇にて我が勝利に歸す。

又一方帝大駒場戰に備へんが爲益四百八百米を盛にする必要あり、十二月十五日先輩山岡氏寄贈の山岡ミーチングを擧行す、相當の成績を納め得た。

（以上梶浦記）

○大正十二年度

委員　北村岩介　佐川清　小部斗志男

一月九日より同二十九日まで、この間前學期來の冬期練習會を續行した。皆勤者十名精勤者二十五名といふ比較的よい結果を得た。

三月七日より四月十五日まで、春季休業、休暇中は各自自用に思ひ思ひの研究をするといふことにして、定つた練習をしなかつたが、合宿したものも可成り多くトレーニングの方法に關して各自の考へを纏めるにはかゝる練習も意義あるものであつた。その間四月十三日より三日間水戸を訪問した。此の年は京都に遠征する順なので大きなトラックに馴れる必要上且つ又た新しく近くに出來た水高との友誼を厚ふする爲にとて、十八名の部員が水高を訪れたのであつた。前二日は强風の爲めに練習を妨げられたが十五日は比較的暖く愉快な練習をすることが出來た。

帝大駒場戰廢止の顚末

運上陸動部部史

四月になつてから我が部に取つて非常な大問題が起つた。それは帝大駒場戰へ出場を全然止めることにしたことである。今こゝに少しくその廢止した理由その他當時の部員のかゝる決斷をしたことについて述べねばならぬ。次に掲げるのは當時の主將たりし北村氏の手記である。

血と涙とを以て彩られた光榮ある歷史を有する帝大駒場の戰よ。それはどんなにか向陵感激の生活の對象でありまた我が一高の意氣を天下に示して吳れたことであらうか。大きな帝大の優勝旗に柏葉のマークのいかに多く繡ひつけられてあるかといふことは、これを見る度毎に先輩の殘して行かれた貴い努力に對して尊敬と憧憬の念を起さずには止まない。森に圍まれた駒場のトラックが駒場戰のある度毎にいかにいふにいはれる懷かしさと嬉しさとを感ぜしむることであらうぞ。

時勢は移る。向陵と雖も流轉の世界である。この戰ひを淸き過去の思出として別れを告げねばならなくなつたのである。古い革袋には新しい酒は盛れないとかいふ。我々が眞に目覺めたる生活を送らんとするならばたとへ古き革囊に對する限りなき憧れや敬ひはありながらも、やはり新しい酒は新しい革囊に盛る外はない。

以下少しく廢止になつた理由に就いて書かう。これを考へて見ると內的理由と外的理由とに分れる。我等がこゝに內的原因といつたものは何かといふに一は向陵に於ける一般氣分の變化であり、一は選手生活の革新とでもいふべきである。

傳統が我々の欲求と調和して居る間は問題はない。已に傳統に束縛を感じ、しかも尙ほその傳統を追ふことを余儀なくされるときこゝに虛僞の生活が始まる。三十年の歷史は色々な敎訓を我々に與へて居る。先輩等の眞劍な熱烈なる生活は抑我等に何を敎へ、何を明かにするものであらうか。我々も亦眞劍な僞りのない生活を營むべきことを求むるのである。眞に傳統を重んずる所以は傳統そのものに盲從することではない。傳統によりて傳統の上に出づることである。すでに傳統を追ふことが我々に虛僞を强ひる以上これに反抗し、これを改良するは自己に忠實なるもの、否な眞に傳統を尊ぶものの務でなくてはならない。現下の向陵に於ては從來の傳統形式は多くは不調和になつて來て居る。

飯田町驛から特別仕立ての列車で駒場原頭に押し寄せて行つた人々の熱烈さを將又た一本調子を美しく思ふ。しかし、時代の影響を受けて一本調子になれなくなつた我々に我々の生活と調和せぬ傳統の形式を强ひられることは苦痛である。應援隊を組んで旗を振ることがその人々の氣持にしつくり合つて居るときはそれでよい。應援隊を作ることや旗を振ることが强ひられる樣になつたとき、最早やそれは眞の寮生の生活ではなくなる。對抗勝負の價値如何といふことではない。皆の氣持が斯くの如く變つたのである。すでに全校的背景を失つた試合が依然昔の形式を維持することは無理であらう。何とか改められねばならぬ。

しかるに理由は單に之に止まらぬ。我々の生活欲求は人間となることである。選手生活と雖も窮局の所この人格完成の手段である。勿論我々が運動をやつて居るのはもと〳〵好きだからなのである。しかし選手となつた以上は單に好きだから面白いからといふことだけでは濟まされなくなる。責任あるレースの爲めに苦しい練習を忍びながら頑張つて行かなくてはならない。飜つて我々選手の生活を顧みるに一年中すべてを試合の爲めに費さなくてはならぬ。ラシニングの豫備練習は長き期間を要し、常に攝生に注意しなくてはならぬ。しかも一方選手は重大なる責任を思ふとき、石に齧りついても勝たねばならぬ。自然勉强のことなんか構つて居られなくなる。よく勉强しよく運動するとかいふ。しかしその場合の運動は遊戯享樂を意味する。ほんとに勝ちたいと思ふとき二六時中試合のことが頭から離れぬのは當然である。向陵三年をスパイクと共に送るのも或る人に取つては本懷であるかも知れぬ。しかしそれは果して人間らしい學生らしき生活であらうか。矢張り我々も一年のある時期には束縛されぬ落着いた自由な生活を欲する。自己完成の爲めに自ら深く沈潛し行かんとする望みはなくならぬ。これは我々の無理な願ひであらうか。勿論我々は選手生活を意義ありと思ふ。一年の半分を

選手として送るに吝かなる者でないがしかし他の半分は一個學生として、そして一人の學生としてそして一人の寮生として生活をしたい。春夏は三高戰に秋冬は駒場帝大戰にと日も尙ほ足らず追はれ行くこと我等をしてどうしてもこの願ひを達せしむることは出來ない。いづれか一方はどうしても放棄せねばならなくなる。

以上述べ來つた二つの精神的欲求は吾人に帝大駒場戰の廢止を促すものである。しかも理由は單にこゝに止まらず、更に二つの外的原因を持つて居る。一は帝大駒場戰の形式的矛盾といふべく、一はこれの三高戰との低觸である。形式的矛盾とは次のことを云ふ。帝大駒場戰は對抗勝負といふが實は招待レースで毎年之に出場する學校が一定してない、天下を敵とするならば敵手の一定して居ないことは必ずしも論ずるの要はないかも知れぬ。しかしそれ等の出場校はこの試合をそんなに重大視しなくなつた。勿論應援なんか殆んどついて來ない。帝大駒場戰も昔は日本陸上競技會の代表的なものであつた。しかし今は昔の面影はない。之に代るべき幾多の競技會が起つて來た。そして三高戰の方が試合形式とした所で多くの選手が多くの種目に於て競ふのであるからたゞ二人或は四人といふ小人數で行ふ競技に對して對抗勝負として存續するを許さなくする。

加之今迄は長い間殆んど秋行はれ來つた帝大運動會がこの年より毎年六月に行はれることになつたのである。このレースにベストメムバー四人を揃へるためには七月に行はるべき三高戰に對する準備を疏かにして專問以外の人を無理に使はなくてはならぬ場合がある。その他精神的にも三高戰に先立つ一ケ月前にかゝる重大なる戰を行ひ緊張の度を繰返すのは甚だ不利でしかも團體競技たる三高戰の勝利への第一の必須條件であるチームの統一融合といふものが破壞せられることは明かである。その他多くの點で時期近接せる二者の對立は不可能の樣に思はれる。この場合我々は對校勝負としては前者に比して遙かに合理的なる三高戰をとつて帝大戰を棄てるより外はない。しかしもとよりベストメムバーでなく、又最善の準備なくして帝大戰に出られないこともないが右の樣な態度を以てしたならば自然優勝率の可能性も低下しのみならず先輩の血涙の歷史を汚し、又寮生にも濟まぬわけである。考へて見れば帝大戰にせよ駒場戰にせよその一高の眞に誇りとする所は勝つた數といふことではない。ランニングは他のスポーツと異なり少しでも技倆が異るときは之を凌駕することは非常な困難で、まして過去の歷史に於て幾度か見た如く長年の經驗によつて成れる選手に對してはたとへいかやうにしてもそれがチームワークで無い限り優勝することは殆んど全く不可能である。しかも一高は未だ曾つて敵强しと聞いて練習を怠り、或は出場せぬ樣なことは一度も無かつた。かうして駒場の戰の如きは多くは苦い歷史であつたのだ。優勝數を以てすれば一高よりも多く勝つて居る學校もあらう。しかし一高の誇りとして來つたのは單なる勝利ではないのである。たゞ忍從の中に秘む力强く男々しい向陵魂の淸き發露のみであつた。しかしてこれこそ我部の誇りであり、一高の誇りである。見よかくて殆んど勝敗の數を度外視されて居た一高が勝利を得たとき、世人はこれを吾人の有として與れたではないか。この光榮の歷史を踏みにじつて、確固たる目的なくして出場し得やうか。こんな卑怯なる態度を吾人の內心が許さうか。かく考へ來るときどうしてもこの二戰は全然廢止すべきが適當であると思はざるを得ない。

以上は北村主將の廢止せんとの意向であつた。勿論多くの部員のことである故すべてこれと同じ考へで居たとは云へぬ。多少はその間に異論もあつたが多くの人の歸する所は殆んど北村主將の考へと一致して居たのである。かくして四月中旬より幾度か部員相集り協議してその意向を決定し、四月二十三日及三十日に先輩諸氏の出席を得、部員等の意向を訴ふる所があつた。古い先輩には部員の意向に贊せられざる人々もあつたが新しい人々は部員の氣持ちを諒とせられ全然廢止することがよいとのこと故、部でも遂に廢止といふことに定つたのであつた。五月二十二日の總代會に於て「帝大駒場戰を全廢するの件」といふ議案を提出し北村主將述べる所あり寮生も部員の立場に同情あり、殆んど滿場異議なくて可決せられた。

永い間の問題も遂に解決を見、今後永久に帝大及駒場運動會には出場せぬことになつた。かくて光榮に輝く幾多のロー

マンスを清き追憶の夢の中に置き、新しい光明に滿ちた三高戦へと、この歴史に劣らざる麗はしき歴史を飾るべく、我が陸上運動部はこゝに新しい船路へと舵ひしたのであつた。

この二試合の廢止によつて三高戦に對する責務の益重くなるを感じいかにもして三高を打ち破らんと練習に研究に一層努力した。

五月　五　日　春季小會
快晴でトラツクも非常によかつた。組選リレーは文五復た勝つて四勝した。
八　　日　北村主將三高との交渉のため出發。
十　三　日　清野日商運動會に出で、八百米招待レースに二着となる。
十　四　日　西ケ原對蹇マラソンを行ふ。南北蹇非常に優秀な成績で優勝した。
十　九　日　晴天、對帝大學部練習試合、四十六對二十一にて大勝した。
二十五日　曇天、對帝大醫科練習試合に二十五對十四にて大勝した。
二十九日　對曉星中學千六百米リレーを行ひ大勝した。
六月十　四　日　對帝大練習試合を行ひ四十二對三十九にて敗る。
二十四日　快晴、早稲田高等學院と第一回の對抗競技を行ふ、一高方は元氣にて五十五點半對三十四點半にて大勝した。これで多少自信を得たがしかし一方この日三高は勁敵神商を破りその記錄亦た多く我校より優れ居るを以て、三高の侮り難きを否な近來稀なる關西の强チームなるを知り、より一層の努力の必要を切實に感じた。この頃より三高側の情勢先輩諸氏の通知により一層明かになり、三高は選手を初め生徒も非常なる意氣込なるを聞く。澤田氏を初め加藤、石田、齊藤、渡邊、松本、木村、曾彌、國澤等諸先輩の熱心なるコーチにより、此の頃一層進境を見、一同の意氣も益々あがつた。

七月十　四　日　對帝大滿洲遠征軍練習試合　三十九點半對三十八點半といふ大接戦にて勝ち記錄も可成りよく、殊にトラツクの記錄は非常によかつた。
十　七　日　多くの先輩や蹇生に送られて午前八時東京驛より西下した。夕景京都驛に着き、三高選手の出迎を受け、細雨の降りそぼる中を三高の宿舍へと赴く、
十八日より二十日まで　各自コーチに從つて練習し三高軍の情勢をも見る。
二十二日　第四回對三高競技會
七月の初め以來照りつゞいて居た空も前夜より危しげな雲往來して居たが、その日は早朝少しばかりの降雨のあつたのみで程なく晴れ渡り燒きつく樣な日光は白砂の多い賀茂のトラツクを射つて居た。
試合は午前十時安樂審判長の挨拶あつて後直ちに開始せられた。
出場選手は次の通りである。

岩	佐	一	郎	遠	藤	吉	彦
北	村	岩	介	黒	田	捨	三
杉	山		嘉	清	野	恭	四郎
角	田	忠	夫	土	井	由	之
畠	村	嘉	兵衛		前	田	克己

岡	松	進	次郎	梶	浦	實	
小	部	斗	志男	佐	川	清	
多	賀	芳	光	張	嘉	賓	
中	島	正	樹	西	村	哲	太郎
牧	野	正	己	與	謝	野	秀

片	岡	三	郎				
澤	田	敏	一				
堤		正	幸				
野	田	卯	一				
渡	部	晃					

當日の記錄は次の通り
百　米　一着、內藤(三)　十一秒二二着、小部(一)　三着、望月(三)

砲丸投　一等、北村(一)　十二米二十六半　二等、星名(三)十一米五十九　三等、岡松(一)　十米八十一
八百米　一着、片岡(一)　二分十七秒　二着、清野(一)　三着、今西(三)
低障碍　一着、小部(一)　二十六秒八　二着、望月(三)　三着、直木(三)
走高跳　一等、與謝野(一)　一米六十八　二等、遠藤(一)　一米六十　三等、井街(三)
八百米リレー　一着、三高チーム　一分三十五秒六　望月、門田、佐島、内藤
二着、一高チーム　牧野、佐川、前田、小部

(休憩)

午後二時より
走幅跳　一等、内藤(三)　六米五十　二等、中島(一)　六米十八　三等、星名(三)　五米九十三
高障碍　一等、直木(三)　十七秒四　二等、澤田(一)　三等、井街(三)
二百米　一着、内藤(三)　二十三秒二　二着、小部(一)　三着、望月(三)
五千米　一着、張(一)　十九分三十八秒　二着、土井(一)　三着、吉田(三)
圓盤投　一等、北村(一)　三十米三半　二等、磯田(三)　三十八米四十六　三等、杉山(一)　二十七米八十四
四百米　一着、内藤(三)　五十四秒六　二着、前田(一)　三着、佐川(一)
槍投　一等、畠村(一)　四十米三十二半　二等、杉山(一)　四十米二十八　三等、安東(三)　三十九米三十一
千五百米　一着、清野(一)　四分五十秒四　二着、矢野(三)　三着、今西(三)
千六百米リレー　一着、三高チーム　三分四十一秒　佐島、竹下、望月、内藤
二着、一高チーム　北村、小部、佐川、前田

最初の百米は三高軍の最も意氣込んで居たものであつたし、しかも内藤の元氣は素張らしいものであつたので、小部よく走つて昨年の優勝者望月を破つたが、遂に一三着を取られて二點を先んぜられた。しかしもとよりその記錄は日本最高記錄とタイでもあるし、小部も望月を破つて後の競技に對する自信も得たので、一高軍少しも元氣沮喪せず次の砲丸投には北村主將遙かに他より擢んで、一等となつた。しかし病氣のため岡松元氣なく星名の爲めに敗れたが、この競技で百米の點數を取りかへして同點となつた。次の八百米は一高軍の特技であつたので清野、片岡、黒田巧みな策戰を以て敵を操り完全に三高を壓して一二着を占め、一擧に四點を勝ち越した。次のローハードルでは兩校とも互に大接戰を豫期して居たが果して小部と望月とは火の出る樣なレースをし遂に二十六秒八といふ優秀な記錄を以て小部優勝したが、澤田惜しくも直木に破れ同點となり、その差は依然四點であつた。次の走高跳には與謝野、遠藤一二等となつてこれで又も四點勝ち越し差を大きくし一高十九點三高十一點となつた。次の八百米リレーに勝てば一高もこれから先のゲームが樂になり三高としても之に破れゝば恢復の見込立たずとの思ひで双方必死となつて戰ひ、稀に見る大接戰を演じたが、三高はトラックに馴れて居たためでもあらう、遂に破れた。かくて午前中の總得點一高十九點、三高十四點となり、一高は尙ほ五點を勝ち越して居た。

午後は二時より開始され、走幅跳は内藤樂々六米五十を飛び、中島二等となつたが三等を星名に奪はれ二點勝ち越され次のハイハードルは之又た澤田、直木、望月の競走となつたが、望月倒れ、直木は少しの差で一着となり、澤田惜しくも破れた。次の二百米には小部またよく走つたが遂に駿足内藤に及ばず、走幅跳、高障碍二百米と次第に差がちゞめられ、この二百米にて三高に一點を輸せられた。こゝに於て次の五千米が勝敗の分岐點となり、互に全力を盡して戰つた。その結果一高は張、土井の二人よく走り、遂に一二着を占め、こゝに三點の差を生じた、次いで圓盤投には北村、杉山一、三等を得てその差を五點にし、次の四百米には一着は内藤に占められたが前田、佐川よく走つて確實に二三着となつて三高を

して近づかしめず、槍投に畠村、杉山一、二等となりこゝに於て得點の半を得て、次いで千五百米に清野一等となつて遂に勝敗の數定つた。千六百米は敵に勝を讓つたがかくて試合の幕は鎖された。

夕陽愛宕の山に傾いて長い影をフイールドにうつすとき一高軍の凱歌は擧つた。閉會式あつて後一同凱歌を奏しつゝ宿舍へと歸り、夜は四條八百政で祝勝會を行つた。幾ヶ月の苦心の結晶であるこの勝利を得しに胸ときめき、部員一同轉た感慨に堪えず夜の更くるも知らず杯を傾けて三勝の榮を祝した。

九　月　一　日

三勝の榮を誇りつゝ、泰平の夢に耽つて居た部員はその秋をいかに樂しく過すべきかと思ひ思ひに期待してシーズンを待ち受けた。しかるに何事ぞ一朝不慮の大震災起るや關東の地を荒野と化し、前古未曾有の慘事を來した。荒涼たる都の一隅に壞れ果てた時計臺の慘ましい姿を望むとき轉變の甚だしきを嘆ぜざるを得なかつた。しかし灰燼の中よりなほも叫び出るフエニツクスの聲は先づスポーツの叫びとなり、部員も來るべき三高戰を迎ふべく部の內部の發展その他に力を努め、運動會對寮競技等も行つた。

十一月十一日　全日本選手權大會

澤田出場して高障碍に三着を占めた。

十八日

對三高三勝紀念運動會を行ふ。前夜よりの細雨にトラツクも軟く思ふ樣に盛大に行ふことの出來なかつたのは遺憾であつた。校友會對部リレーは野球部が、中等學校リレーは曉星中學が、そして組選リレーは文五の勝となり、文五は遂に五勝した。

二十五日　インターカレツヂ競技會

小部出場して低障碍に三着を得た。

十二月　二　日　快晴

第二回對浦和一年對抗競技を浦和トラツクで行つた。そして結局四十四點半對三十點半にて勝利を得た。

四　日

對寮競技を行ふ。西明寮と北中朶寮大接戰をし遂に西明寮優勝した。

大正十三年度

委　員　岡松進次郎　梶浦實　中島正樹

一月十日より二月六日まで寒稽古を行ひ非常な盛會であつた。

三月二十六日より四月十五日まで

春期練習會を行ひ一同揃つて正規の練習を始めた。トラツク改修後のため稍々トラツクが柔かつた。

五　月　三　日

午後零時半より春季運動會を開く。雨天に禍せられてトラツクは惡かつた。對部リレーは野球部がまたも優勝し組選リレーは理三が遂に文五を破つて永らく文五の手にあつた優勝旗を奪つた。

十　三　日

アマチユアミーチングを行ふ。出場者は比較的少なかつたがレコードは可成り良かつた。

十　七　日　對帝大法學部練習試合　於一高

本年度初めての試合であり、且つ法學部は本年度の最強の學部なりし故可成り苦戰したが遂に三十五點對三十四點にて

勝利を得た。

三十日

對寮マラソンを行ひ西明寮が優勝した。

六月十四日　快晴　對帝大一年練習試合　於一高

本年度の大學チームは一年の人に隨分優れた人も多く一年といつても可成り強敵なので一高としては相當よい成績ではあつたが遂に四十五點半對四十一點半で破れた。しかしこの頃よりは一同大分記錄も向上し、自信もついて來た。

二十二日　快晴後驟雨　對早高練習試合

この年の早高は早大チームの中堅をなして居るので寧ろ早大だけのチームを迎へるよりも苦戰なのであつた。その結果一高利あらず五十八點對三十二點で破れた。來るべき年には必ず復讐せんと誓ふ。

七月十一日　快晴

對帝大練習試合、四十二點對三十四點にて敗れた。

二十日　快晴

第五回對三高競技會

朝來の快晴にいりつく樣な日光は奇麗に引かれたラインの上に强烈な光を放つて居た。

午前九時半入場式を行ひ安樂審判長の挨拶あり、終つて直ちに百米より試合は開始せられた。

出場選手は次の通りであつた。

石原佑	岩佐一郎	遠藤吉彦	岡田武明
岡松進次郎	奥田勇	恩田陽	片岡三郎
梶浦實	河部國太郎	小池達吉	河野達一
澤田敏一	島津久大	白川元	多賀芳光
堤正幸	角田忠夫	寺尾宏二	中川重雄
中島正樹	成田安正	畠村嘉兵衞	蛭川信久
松田都一	與野謝秀	吉村恭一	渡部晃

試合記錄は次の通り

百米　一着、馬場(三)　十一秒八　二着、忠田(三)　三着、岩佐(一)

砲丸投　一等、星名(三)　十一米八十九　二等、岡松(一)　十一米三十一半　三等、石原(一)　十一米十九四分の三

八百米　一着、多賀(一)　二分十二秒二　二着、成田(一)　三着、上林(三)

低障碍　一着、澤田(一)　二十八秒二　二着、堤(一)　三着、恩田(一)

〔星名(三)二着に入つたがハードル三個倒してオミツトされた〕

走高跳　一等、遠藤(一)　一米七十二　二等、島津(一)　一米六十六　三等、加藤(三)　神山(三)　一米六十

八百米リレー　一着、三高チーム　一分四十秒　忠田、佐島、星名、馬場

二着、一高チーム　岩佐、河野、小池、岡松

（休憩）

午後二時より再開

走幅跳　一等、島津(一)　六米四十一　二等、中島(一)　六米三十七　三等、渡部(一)　六米二十一

高障碍　一着、澤田(一)　十七秒六　二着、渡部(一)　三着、遠藤(一)

二百米　一着、馬場(三)　二十四秒　二着、忠田(三)　三着、岩佐(一)

五千米　一着、齋藤(三)　十九分三十六秒五　二着、寺尾(一)　三着、吉田(三)

圓盤投　一等、磯田(三)　二十七米九七　二等、蛭川(一)　二十七米四三　三等、神山(三)　二十七米四十

四百米　一着、馬場(三)　五十七秒四　二着、忠田(三)　三着、佐島(三)

槍　投　一等、神山(三)　五十米十五　二等、畠村(一)　四十二米三十五　三等、松田(一)　四十米七十四

千五百米　一着、多賀(一)　四分四十四秒六　二着、片岡(一)　三着、岡田(一)

千六百米リレー　一着、一高チーム　三分四十九秒四　恩田、岡松、小池、成田

二着、三高チーム　佐島、和田、星名、馬場

總得點

一高　四十九點

三高　三十五點

これより先一高は多くの人が意外なる故障によつて非常な變動を受けた。それは試合前一ヶ月長い間ハードルを練習して居た梶浦が足を傷け出場不可能となり、十日程前に至つて主將岡松が又も脚氣起つて殆んど練習不能となり、これには流石に一同も心配となつた。しかも憂はこれのみに止らず十一日の對帝大の試合には前二年間走高跳に優勝した與謝野傷き試合に出場し得るや否や疑はしくなつて居た。今年はいかなることがあつても必ずや勝つて見せると自ら信じて居た部員もかゝる不慮の事件に遭遇しては流石に心配となつて來た。しかし部員一同氣を落すこともなく三高軍を迎へて試合に對した。

常に一高軍に幸せざる百米はこの年もスタートの具合悪く一二着を占められてこゝに四點を勝ち越された。次の砲丸投

も岡松病の爲めに振はず星名をして名を成さしめたが石原三等となつて同點であつたが百米の敗はとりかへせなかつた。次の八百米は常に一高の勝つ所の競技であつたので多賀は風邪氣味であつたのによく一着を占め成田二着となつて奇麗に百米の負け越しを消した。次のローハードルは澤田見事に一着を占め、二着は星名であつたがハードル三個倒して除外され堤二着となり恩田よく走つて三着となり一高はこの競技に非常に勝つとは思ひつゝも、全勝しやうとは思つても居なかつたので一高軍の元氣は非常にあがつた。次の走高跳には一高全勝を期して居た競技であつたが旬日前に負傷した與謝野は遂に出場出來ないことになつたが遠藤、島津よく飛んで一二等を得てこゝに低障碍及走高跳の得點の結果その差は十點となつた。次の八百リレーは一高側バトンの受け渡しを失敗して破れたがまだ得點の差は七點あつた。

午後の最初の二つの競技は一高の共に全勝を期して居たものであつたので記錄は共に思はしいものではなかつたけれど共に全勝して、完全に三高を壓し、こゝに於て一高は三十二點三高は十三點となつてしまつた。しかしこれまでは一高得意のものも多かつたが、これから先のものは三高に殆んど皆な有利なものであつたので一高として決して氣をゆるめることの出來ぬもので、そして事實千五百米に至るまで勝敗は決せぬことになつたのである。二百米に於てはナムバーワンの岡松到底走り得ず途中で走り止めしため、岩佐、忠田と接戰したが惜しくも破れて三着となり四點を取り返された。次の五千米も意外な結果となつたのである。百度に近い炎暑の中を五千米も互に緊張しつゝ走るといふことは實際如何なる不意の出來事も起らないとはいへない。角田も試合前足を挫いて居た爲めか遂に落伍し、三高の齋藤をして名を成さしめ、河部は三高の他の二者より遙かに先にあつたが炎暑の爲め一周前に倒れ、一高は寺尾一人殘すのみであつた。そして寺尾はよく走つて二着となつたがこの結果二點を取り返され、次の圓盤投は蛭川の奮戰にもかゝはらず、一三等を敵に讓り更にその差は少くなつて、次の四百に全敗したために差は僅かに五點となつてしまつた。この敗は一高としては非常に意外なものであつたけれどもこれは恐らくナムバーワンであつた岡松が不幸脚氣になつたために出場出來なくなりその結果今まで

岡松、成田、小池三人が巧みにレースをして居たのであつたため全く策戦が齟齬したためといふべきであらう。殊に一高のトラックでは四百米は策戦の如何によつて勝敗が定まるといつてよいのであるからして、岡松一人の拔けたことは意外にも甚だしい影響を及ぼし遂にこの競技に敗れた。一人の缺けたことがかゝる大きな結果を齎すとは思ひも掛けなかつたがしかしこれは明かに如何に四百米が策戦によつて左右せられるかを裏書して居るといつてよいであらう。かくて試合は槍投となり、神山は他より擢んでて、一等となつたが他の一高三人、三高一人は伯仲して、ベストフオアの爭となり、一高は島村、松田三高は山本と神山を加へて二人づゝとなつた。しかも勝敗の數はかゝつてこの競技にあるを思ひ、互に緊張し一投げごとに非常に聲援は盛んに、興奮し切つて結果如何と見て居たが遂に島村他より徐々に伸び松田、山本は殆んど同じ位であつたが計測の結果松田少しく長く、こゝに三對三となり一高も漸く安心することが出來た。しかし次の千五百米に於て一二着を占められたならば一高は破れることになるので互に必死となつて走つたが一高軍は元氣を以て全勝しこゝに見事に死命を制して一高の勝利となつた。しかも千六百米に於ては三高已に敗れて元氣なく、一高よく走つて優勝し、結局一高は十四點の差を以て勝利の榮冠を得た。時に午後六時半、夕闇漸く籠めて來た。四勝し得た部員の喜びは譬へがたかつたが、已に三敗して、復讐の氣すさまじく都に攻め上り、しかも武運拙く敗れた三高軍の涙を思へば流石に同情に堪えないものがあつた。閉場式終つて會議室に於てコムパを行ふ。初めての試みであつたが喜ばしいことであつた。

次いで夜は燕樂軒で祝勝會を行ふ、勝利を喜ぶ毎にコーチとして親しく指導せられし松本、北村、前田、佐川、清野、土井諸氏の功を思はざるを得なかつた。顧れば此の年は試合前數人の闘將が病にかゝり或は負傷したりしてその結果後半非常に苦戦に陷つた。試合前に病人さへ出なかつたならば確かにより樂々と勝つて居たに違ひなかつた。しかしこの苦戦も部員の印象をいかに深からしめたであらうか。嬉しき思ひ出としてとことはに忘れられないものとなるであらう。

七　月　二十七日　快晴　リレーミーティング　於帝大

三高戦を終つて一週間帝大主催のリレーミーティングがあつた。四百米リレーには白川、中川、小池、岩佐出場し、三着となり、三千二百米リレーには岡松、片岡、成田、多賀の順にて出場し必ずや優勝せんとの意氣込であつたが、不幸岡松の脚氣未だ癒えず多賀も病を押して三高戦に出場したため疲勞未だ恢復せず遂に敗れて二着となつてしまつた。此年は止むを得なかつた。たゞ來るべき年の月桂冠は一高の手にせずば止まじと來ん年を思つた。

九　月　二十七日

對三高優勝記念大運動會を行つた。前夜來の雨は十時頃に到つて止んだが黑雲は去りも止まず、トラックも隨分柔く殊にフイールドは甚だしかつたがそれでも運動會記錄を五つも破りオール一高レコードが一つ出來た。殊にリレーの如きは近年稀に見る面白いレースであつた。校友會對部リレーは又も野球部優勝し小學校六百米リレーは本郷小學校のものとなり、中等學校千米リレーは大接戦の結果埼玉師範優勝旗を得、專門學校千六百米リレーには明大が勝つた。組選リレーは理三、文五互に初めから終りまで爭つたが遂に理三は胸一つで文五を破つて再び優勝旗を得た。しかも記錄は對部、中等學校、組選皆な在來の記錄を破つて居た。

十　月　四、五日　東京市民陸上競技會　於駒場

與謝野、島津、中島等出場し、可成りよい成績を得た。これより先インターカレッヂ分裂し、遂にカレッヂ競技會は中止せられ、明治神宮競技會にも十三校は出場しないことになつたが一高は帝大等と行動を共にし、明治神宮競技會には出場することになつた。

十　七　日

學習院運動會に於ける千六百米リレーに小池、多賀、成田、岡松出場して一着となつた。

十八、十九兩日

陸上動運部部史

向　陵　誌

駒場に於ける明治神宮東京豫選に澤田、堤、中島、島津通過し同日水戸豫選に於て興謝野、多賀、吉村がパスした。

十月三十日

對寮競技を行ひ南北寮優勝

十一月　三　日

明治神宮競技會に島津走幅跳に三等となつた。

十六日　快晴

第三回對浦和高校一年對抗試合を本校トラックに於て行ふ。一高は選手に故障のあつたものなどあり、四十四對三十一で破れた。

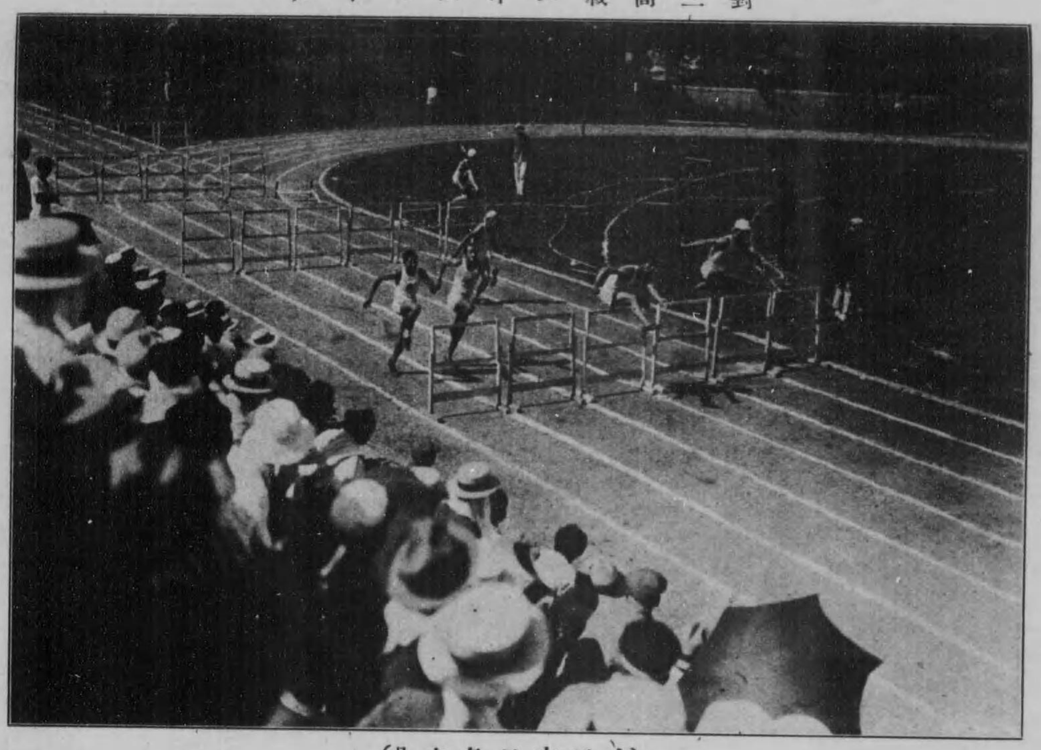
（以上中島記）

大正拾四年三月現在各競技記錄

	アマチニア標準レコード		オール一高レコード			運動會レコード		
100米	秒 12.4	秒 11.6	加藤重一	1921	秋運動會	秒 11.6	加藤重一	1921 秋
200米	秒 26.2	秒 24	島村鐵也	1920	秋インターカレッヂ	秒 24.2	加藤重一	1921 秋
400米	分 1.00	秒 53.6	島村鐵也	1920	秋體育協會	秒 54.8	加藤重一	1921 秋
800米	分秒 2.23	分秒 2.7.6	島村鐵也	1920	秋駒場	分秒 2.11.4	加藤重一	1921 秋
1500米	分秒 5.3	分秒 4.41.4	多賀芳光	1924	夏對早高	分秒 4.44.2	木村正彦	1922 春
5000米	分 19	分秒 18.4.2	汐見一郎	1921	秋運動會	分秒 18.4.2	汐見一郎	1921 秋
110米高障碍	秒 21	秒 17.2	澤田敵一	1924	夏對帝大一年	秒 20	石田啓次郎	1921 春
200米低障碍	秒 31	秒 26.8	小部計志男	1923	夏對三高	秒 27.4	小部計志男	1923 春
走高跳	米 1.53	米 1.72	興謝野秀 遠藤吉彦	1924 1924	夏對早高 夏對三高	米 1.64	興謝野秀	1924 春
立高跳	米 1.24	米 1.29	白川　元	1924	秋運動會	米 1.29	白川　元	1924 秋
走巾跳	米 5.60	米 6.47	中島正樹	1924	夏對早高	米 6.14	島津久大	1924 秋
立巾跳	米 2.79	米 2.79	杉山　嘉	1921	秋運動會	米 2.79	杉山　嘉	1621 秋
棒高跳	米 2.70	米 3.20	澤田敵一	1924	秋神宮豫選	米 2.91	澤田敵一	1922 秋
砲丸投(12封度)	米 10.30	米 12.265	北村岩介	1923	夏對三高	米 11.28	北村岩介	1922 秋
圓盤投	米 26	米 30.13	北村岩介	1922	夏對三高	米 29.80	杉山　嘉	1922 秋
槍　投	米 36.50	米 44.40	古在由直	1921	春一二年對三年	米 42.90	古在由直	1920 秋
ホ・ス・ジヤムプ	米 11.80	米 12.54	島津久大	1924	秋神宮豫選	米 12.49	島津久大	1924 秋

陸上運動部部史

對三高戰ハイハードル



(大正十三年七月)

藤遠　尾寺　村西　田岡　澤國　川伊　田佐　堤　川前　藤加　村北　野清　本松　浦梶　リヨ右列前　テツ向
田岡　澤川　川伊　堤　岡片　島中　佐岩　池小　野河　水清　列二第
澤　田成　津島　田角　原石　田熊　野嶋　田恩　村益　村吉　列三第
＝外　川經　川中　田澤　殿森
列四第

端艇部史

端艇部部史

飯沼一省

端艇部優勝旗（表）

春江の潮水宛轉として芳甸を遶る時、落花萬朶把撓に飜り、流水去帆の影を送りて白蘋紅蓼荻花雪と亂るゝ鏡淵浦上、秋江舷歌して流れを下るは吾人の夢寐尚忘る可からざるの快事たり。亭々たる碧流、細柳新蒲の影を浮べて暗き綾瀬江邊の風物、或は北風萬里白雲を吹いて渡頭蕭條、扁舟を水天の際に放ちて餘清を樂みし利根江畔の冬夜に至りては、想到して轉た骨鳴り肉躍るを覺えずんばあらず、然れども事成るの日に成るに非ず、吾が端艇部の沿革亦閲し來りて、吾先人の努力と苦楚との甚だ鮮少ならざるを思ひ、一班を記して方今の萎微と踏襲の醜とを打破せざる可からざるを思ふや切なり。（唯一の史料たる校友會雜誌に載する所甚だ詳ならず。且其發行以前に於ける狀態に至りては忽卒の間、只僅かに二三先輩を訪問したるに止まり、多く吾構想行文に成るものなり。特記して以て、責任のある所を明にす。）

○草創—明治十七年

抑も吾部の草創は、本校がなほ一ツ橋に在りて東京大學豫備門と稱し、東京大學の管理に屬したりし當時にあり。即明治十七年、當時の講師ストレンヂ氏の指導と、武田千代三郎・岸清一氏等の斡旋奔走によりて九艘の端艇を新造するを得て、其保管を現今の明治病院附近、及淺草橋際船宿野田屋に依托したるは、實に吾校端艇部の前身にして、また同時に本邦端艇界に燦然たる曙光を放ちたるものといふ可く、當時走舸組と稱へしもの即之なり。

○明治十八年

現今醫科大學敷地内にありし大學東校(醫學部)豫科は、新たに一ツ橋なる三學部豫科たる豫備門に合併せられ從來の豫備門が本校と稱するに對して分校と稱せられしが、端艇競漕を以て本校と對立せんとし各約金貳圓を據出し芝浦緒明造船所に新艇四艘の建造を命じて、練習怠りなかりしが、此年四月十二日本校分校間にクロスコムペティション生じたるより爾來端艇競漕に對する興味と熱心とは、茲に俄然として校の内外に起り、他日の發達に多大の貢獻を爲したるは論を俟たず。

○明治十九年

中學校令公布せらる。是に於て東京大學豫備門を更めて、第一高等中學校となす。從つてまた從來大學の管理下に在りし吾走舸組亦大學より分離して、ボート會なるもの設立せらる。

○明治二十年

四月帝國大學春期競漕會に於て專門學校來賓競漕に招かれ、高等商業學校及高等師範學校と兵を合せしも彼等の角逐を許さず。後へに瞠若たらしめしを以て實に吾對高商競漕の第一回となす。

○明治二十一年

十二月經費の多端に堪へざりしもなほ借財の方法を以て、築地明石町の造船所に命じて新艇四艘の工を起さしむ。二十三年三月悉く竣工を告ぐ。命名して綾瀬、梅若、待乳、吾妻といふ。久米先生の撰ばるゝ所なりとす。

○明治二十二年

四月帝國大學春季水上運動會に招かれて、對高等商業學校の第二回競漕を爲す。此年は從來に反し、赤軍の猛將勇士雲の如くなりしも、我はまた容易に勝利を制し得る事を豫期し競漕艇たる大學所屬の端艇にて練習したるは僅かに三四回に過ぎず。而して當日のコース、高商一、本校三。スタートより我は四十に近き急調を引きて一擧敵を拔かんとし、彼は悠然三十一二のピッチを以てせしかば、忽ち二三艘を拔きしも、渡場に至りて吾が餘勢盡きたるに乘じ、赤の勢益々加はりて、兩艇の角逐愈劇しく、觀者をして手に汗を握らしめしも、惡戰苦鬪僅かに勝つ事を得たり。吾校選手の芳名を擧ぐれば、池田賢太郎(舵手)中村是公(整調)志田鉀太郎(五番)草壁三九郎(四番)仁保龜松(三番)吾妻勝剛(二番)枝國安太郎(艇舳)の七氏なり。

○明治二十三年

四月昨春對高等商業學校競漕に於て、苦戰僅かに勝を制したれば、今回更に帝國大學より招かれて其技を角せんとする

や、兩校の激昂一方ならず、彼は再擧して終に我を粉碎せん事を思ひ、我は吾校有終の美を收めんと欲して止まず。即彼の端艇部歌たる『花は櫻木、人は武士』は赤沼金三郎氏が、競漕前日我等が、勝利を豫測して作歌し、當日蒟蒻版を以て印刷して聲援隊に配布し、之を盛にしたるものなり。又高等商業學校側にても亦豫め必勝を期し、當日は狼煙を携へて其勝利を待ちしといふ。以て其の如何に猛烈なりしかを察すべく、吾選手並びに應援者の苦衷實に追憶するに堪へたり、吾校選手は池田賢太郎（舵手）中村是公（整調）志田鉀太郎（五番）矢崎茂（四番）仁保龜松（三番）草壁三九郎（二番）木村平三郎（艇舳）の七氏にして、先年の失策に鑑み言問に合宿し、大に大學の端艇を借用して練習に充てたり。又高商方は練習を秘せんが爲めに殊更に川下に於て、自校の艇を用ひて外人サラベルのコーチを受く。此日吾コースは淺草側なり。スタートに於て、高商の爲めに約半艇身を先んぜらる。水門より此を追ひ渡場にて半艇身を拔く而して石碑邊にて約一艇身を先んず。此時高商のヘビー着々效を奏して吾を追ふ事急なりしも、なは悠々半艇身の雄を以て決勝線に入る。吾校聲援隊狂喜して勝利を祝ふ。

當時の熱狂斯くの如くなれば、當路の有司萬一の衝突あらん事を恐れ、大學競漕會に於て二校をして競漕せしむる事を中絶せしむ。

十月二十四日第一高等中學校々友會成る。吾ボート會亦之に加入して校友會ボート部となる。舍監松田爲常先生本部々長たり。

第一回秋期競漕會に於ける優勝選手氏名、三谷敬次（舵手）野元龍太郎（整調）福島金馬（五番）伴宜（四番）高壯吉（三番）松野千勝（二番）大村鎭太郎（艇舳）。

十二月十二日ボート部委員として中西登喜次、志田鉀太郎、羽鳥精三氏任命せらる。此當時校友會委員總會に於て定められたる本部經費としての配當金は金七十圓なり。

○明治二十四年

優勝旗新調

此年初めて彼の柏葉に一中と打拔きて刺繍鮮やかなるチヤムピオン・フラッグを新調し、赤（二年）白（一年）綠（豫科一級）紫（豫科二三級）の四艇輪贏を爭ひ、優勝旗を爭ふ事となる。

四月十二日第二回春期競漕大會を擧行す、紫（一部）赤（二部）白（三部）綠（豫科一級）の分科競漕あり。終りて愈選手競漕あり、赤（二年）白（一年）綠（豫科一級）紫（豫科二三級）相競ひて紫遂に一着となり。優勝旗初頭先づ紫に歸す。三谷敬次（舵手）伴宜（整調）江連俊彦（五番）須永憲（四番）伊木常誠（三番）大築千里（二番）江崎誠（艇舳）。

十一月十五日第三回秋期競漕會を催す。赤（豫科）白（本科）に勝つ。

○明治二十五年

二月端艇部委員として原田七太、赤谷達郎、梶原仲次の三氏新たに任に就く。校友會委員會決議の結果、吾端艇部費七十圓は六十二圓七十錢に減額せらる。

此頃破浪會、日曜會、白鷗會等皆各級の組織する所にして、大いに振ふ。

四月二十四日第四回春季競漕大會。勝利は赤（二年）に歸し。優勝旗は豫科二三級より二年の掌中に入る。伊吹山德司（舵手）矢崎茂（整調）大原貞馬（五番）久保田勝美（四番）持田巽（三番）高城規一郎（二番）田中清次郎（艇舳）。

艇庫新設の件

艇庫が端艇保存上必要缺くべからざるは論を俟たず。然るに本校端艇部に於ては從來此設備なく、艇は纔かに現今の明治病院附近若しくは淺草橋際野田屋に依托したるに過ぎざれば、風打雨淋、當時の舊艇の如きは、建造以來未だ三年に滿

たざるに、損傷甚だしかりき。端艇部員艇庫建設の希望、多年抑へ難きものありしも、部費の不足は新艇の建造をさへ容易ならしめざりし有様なれば、如何とも爲し難かりしが、此時校友會々員の義氣ある補助を以て（寄附額各參拾錢、月賦一ヶ月參錢宛）幸に舊厩橋下に良地位を卜するを得共新設工事に着手するを得たり。

四月在來の舊艇既に用に堪へざらんとして、而かも部費の充分ならざるが爲め、苦辛經營、會長共他の許可を得て借財を以て、東京石川島造船所に新艇四艘の建造を命ず。

九月新學期より豫科三級廢止の制出づ、茲に於て墨堤の上、紫の歡呼の聲又遂に聞く可からざるに至る。

十一月七日第五回秋期競漕會擧行。赤（豫科）白（本科）に勝つ事昨秋の如し。

○明治二十六年

一月二年に墨水會、一年に日曜會、一級に白鷗會、二級に潜龍會起る。皆大に隅田河上に活動す。

二月三十一日校友會委員總會を本校會議室に開く。本年度は入學者少數の故を以て收入金減少し、前年度の豫算を以てしては到底收支償はざるが故なり。吾部亦部費額を修正して、六拾貳圓七拾錢なりしものを五拾九圓七拾錢に縮少す。

四月第六回春季競漕會擧行。選手競漕一着綠（一級）、小林錦四郎（舵手）伴宜（整調）渡邊信之助（五番）太田政弘（四番）横田成年（三番）山内確三郎（二番）桝元宇平（艇舳）。

此年秋期競漕會を擧行せず。

○明治二十七年

二月新委員として大野新一、朝倉傳次郎、内藤游の三氏任に就く。

四月第七回春期競漕會擧行、選手競漕は赤（二年）勝を制す。伊藤恭三（舵手）岩田一（整調）高壯吉（五番）伊木常誠（四番）村山知二郎（三番）西川一男（二番）齋藤譲（艇舳）。本部創立當時豫備校校長として、少なからず盡力せられたる杉浦重剛先生、此自堀部安兵衛が高田馬場仇討の際用ひたる大酒杯に、滿酌七杯を寄附して優勝選手に與へらる。二年の選手は昨年綠の名を成さしめたる仇を今日報ゐ得て、花散る蔭に此大杯を啣んで感慨無量なりしといふ。

對高等商業學校競漕不成立の件

想起す、明治二十三年春四月『花は櫻木』の凱歌、歡呼の聲を縫うて繚々待乳の空に亂れたりしより茲に數歳、吾部選手の鐵腕徒らに風を生じ、脾肉の歎に堪へざりしが、今春大學復た旨を兩校に通じて、此快擧を再興せんと協議す。吾部喜びて之を諾し、三谷敬次（舵手）杉本東造（整調）伴宜（五番）山内確三郎（四番）桝元宇平（三番）渡邊信之助（二番）森脇幾茂（艇舳）の七氏を選手に推薦して蛟龍昇天の機を待つ。而かも此大學の提案は高等商業學校の應ずる所とならず、事終に止む。空しく長蛇を逸して遺恨骨髓に徹す。全校亦深く之を恨みとす。

九月本年六月發布せられし高等學校令愈々實施せらる。十一月二十二日第八回秋季競漕會擧行。分科競漕に於て綠（一部）選手勝つ。大野新一（舵手）山内確三郎（整調）渡邊信之助（五番）尾崎勇次郎（四番）佐野會輔（三番）手塚敏郎（二番）仲野秀治（艇舳）。

艇庫落成式

明治二十五年新設に着手したる吾艇庫は、茲に全く工事完成す。即第八回競漕會當日競漕終了後一同艇庫に參集し、清夜遣酒、以て艇庫落成の式を擧ぐ。午後六時委員開會の辭を述べ、大學運動會有志總代として伊吹山德司氏大いに艇庫の必要を論じ、今日之を得たるを祝ふ。終りて野宴献酬祝賀の意を致す。艇庫は舊厩橋の下、舊高等商業學校艇庫と相隣し、嚴然隅田の流れに臨んで立つ。設計多く原先生の考案に成り、亦往時風雨泥土に委するの汚態を見る事無きに至りぬ。

○明治二十八年

二月大野新一（再選）、杉本東造、仲野秀治の三氏新委員として推薦せらる。

一月三十一日校友會委員會決議の結果、端艇部費五百七拾九圓七拾錢は五百四拾九圓七拾錢に減ぜらる。

四月十日第九回春期競漕會あり。青（一年獨專及獨豫）覇を制す。森保斐（舵手）杉本東造（整調）佐野會輔（五番）母里三橋（四番）御供昇陽（三番）手塚敏郎（二番）仲野秀治（艇舳）。

琵琶湖全國聯合競漕會次第——七月十四日

吾對高等商業學校競漕の故無くして杜絶せらるゝ玆に幾年、墨江の寒風、品海の怒濤に鍛へたる吾徒の双腕徒らに鳴る所無くして熄まんや。是に於てか伴、加藤、塚本の諸氏を初めとして、吾校の有志數輩相謀り、檄を傳へて全國諸學校及銀行の奮起を促し、此日大津打出濱に於て一大聯合競漕會を催す。研究資料を呈したるもの尠少ならざりしといふ。此日杉浦重剛先生遙かに激勵の歌を寄せらる。曰く『西北の風によせくる仇浪を、心して漕げ秋津島人』と。

十一月二十一日第十回秋期競漕會擧行。分科レースに於ては三部勝つ。永島具（舵手）小林幹（整調）南部孝一（五番）西村安太郎（四番）豐山靜邇（三番）中村勉造（二番）加納一造（艇舳）。

選手競漕たる年別レースに於ては白（一二年）赤（三年）を凌駕す。森保斐（舵手）杉本東造（整調）佐野會輔（五番）母里三橋（四番）御供昇陽（三番）手塚敏郎（二番）仲野秀治（艇舳）。夜上野松田に端艇部懇親會を開く。

○明治二十九年

競漕方法變更

學制改革は端艇部に最も大なる影響を及ぼす。三年の短日月は到底在來の如き競漕法を許さず。故に此年より在來の慣

例を破り、一部（青）二部（白）三部（赤）各第一選手及第二選手を選びて各々相爭ひ、以て彼の名譽ある優勝旗を獲んとす。現今行はるゝ各部競漕會は此結果として、當時より起りたるものなり。

二月本年度委員として杉本東造（再選）、仲野秀治（再選）、手塚敏郎の三氏新たに推薦せらる。

四月八日第十一回春期競漕會を催し、一部二部三部各輸贏を爭ふ。第二選手一着二部、時間五分五十六秒第一選手一着三部、時間五分四十八秒。永島具（舵手）森保斐（整調）南部孝一（五番）加納一造（四番）中村勉造（三番）小林幹（二番）豐山靜邇（艇舳）。

第四回對高等商業學校競漕始末

吾部員袖手して墨江の春風に歎ずるもの玆に年あり。而して遂に盤根の利器を試むるに足るもの無きを憾む。然るに今年三月初旬高等商業學校の選手は遺恨七年の劍を磨き、以て江上の覇を奪はんとして我に通諜する所あり。吾校亦是に於てか快諾の回答を與へ、帝國大學水上運動會に於て旗鼓の間に見えんとす。

三月六日大野新一（舵手）杉本東造（整調）佐野會輔（五番）村田素一郎（四番）御供昇陽（三番）手塚敏郎（二番）井上匡四郎（艇舳）の七氏を選手に推す。

三月十五日選手一同喬居を向島に移して練習に日も維足らず、仲野秀治、森保斐兩氏はマネーヂャーとして奔走盡力至らざる無し。越えて第二學期試驗終了するや、吾端艇部員の墨堤に集るもの日々數百。時期切迫して選手の練習益々猛烈を極め、校友の應援斡旋愈々其度を加へんとす。而して此の二校を招待せる大學運動部は實に一千枚以上の招待券を增刷せりといふ。世上の期待熱狂亦以て想ふべきなり。

四月十一日帝國大學水上運動會の當日は來りぬ。待乳の森の此方、紅旗四五流るゝは敵の物見と思しく、時未だ至らざるに殺氣既に江邊に滿つ。紅軍應援隊は隨踵して堤上にあり。八百松より言問に至る間、赤の袖印したる船頭、大傳馬小

傳馬を繰りて上下來往し、赤旗赤帽春風春水に輝く。忽ち見る吾妻橋の此方八百松近く、一旒の白旗颯とばかり靡くよと見る間に、小蒸汽の上より打ち振る令旗に從ひ、柏葉旗押し立て番號打つたる小旗の順序に、二十五隻の輕舸。堂々墨江を壓して溯る。やがて此水上聲援隊は東西南北の四寮艇隊に分れ、待乳吾妻綾瀬梅若之が旗艇となり、石碑、渡場、柳邊に遊戈して部署を固む。時刻移りて四時四十分、紅白二艇は各艇に牽かれてスタートに就く。用意——轟然一發、オールの唸りに戰は開始せらる。白艇の勢群鯨を追ふ巨鯨の如く、漕々漕、未だ二十本ならざるに赤艇を拔く事半艇身餘、續け續けの旗艦の合圖に艇隊は歡聲に隅田の水を湧かせつゝ揉みに揉んで決勝線へと漕ぎ上る。渡場に於て、流石赤艇勇士の力漕も效を奏せず、彼我相離るゝ一艇身。叱咤、吶喊、砂烟のうちに洗場も過ぎぬ、石碑も過ぎぬ。ラストへビーに六丁の强櫓電光のごとく、艇首に水烟をあげつゝ瞬く間に決勝線に突入して號砲一發、白旗高く空に飜る、嗚呼三艇身、三艇身。旗艦を初め艇隊は、三重四重に競艇に漕ぎ寄せて、舷を敲して歡呼狂喜措く所を知らず。此日北五城樓下同學の健兒亦來りて應援隊中に在るもの數名、遙かに此の空前の勝報を齎して北に歸らんとして、雀躍涕泣禁ずる能はざるものありしといふ。此夕校の後庭篝火幾所、別に燭數十を列ね、置酒咬菜、氣焰萬丈、蒼空を屋とし大地を席として、淋漓痛飲すれば草露冷やかに、北斗の影高し。學習院より芳醇正宗の寄贈あり。大學教師ウード氏亦麥酒一ダースを贈らる。之皆後日吾選手が、當日の敵手を招きて某所に傾くる所也。

五月十日道灌山麓妙隆寺に戰勝選手及監督者慰勞會を開く。

七月十九、二十兩日琵琶湖聯合競漕會學行、吾校より尾崎南部加納竹山守隨塚本中西諸氏を初め、數十名の出席者ありし由。

十月十一日一部有志競漕會當日福岡樓火を失し、言問亭、長命寺を燒くといふ。

十一月十四日第十二回秋期競漕會あり。年別レースに於て第二選手一着三年、第二選手一着一二年、若林幸次郎（舵手）森保斐（整調）仲野秀治（五番）鶴見鎭（四番）御供昇陽（三番）志田義三（二番）豐山靜邇（艇舳）。

○明治三十年

二月新委員として森脇幾茂、若林幸次郎、森保斐三氏の推薦あり。

四月十二日第十三回春期競漕會學行、第二選手一着一部、第一選手一着一部、若林幸次郎（舵手）手塚敏郎（整調）仲野秀治（五番）山口正治（四番）佐野會輔（三番）市村富久（二番）松本烝治（艇舳）。

四月十五日吾校選手横濱港に於て、横濱外人の組織せる「アマチュア・ローイング・クラブ」と競漕す。

初め該倶樂部より吾校に向つて挑戰の飛檄至るや、吾徒墨江の覇を提げて、起つて南濱に碧眼の輩を一蹴し去り、以て連年琢磨の鐵腕を試さん事を願ふや切也。即快諾の旨を答ふ。越えて競漕條件の交渉に至るや彼は最初より競漕艇としては、「スライヂング・シート」の端艇たる可き事を主張し、吾が要求する所は頑として肯かず。嗚呼競漕廢すべき乎。敢行すべき乎。今に至りて敵に後ろを見せんも口惜しき限りなり。さらばいざ、美しき戰に武士の精華をあらはさんと、其他の條件亦皆彼等の云ふ所に委す。而して是に推薦せられたる吾等が選手森保斐（舵手）、杉本東造（整調）、佐野會輔（三番）、市村富久（二番）、仲野秀治（艇舳）、の五氏は、從來隅田河上に於て其影を見る事極めて稀なりし滑座艇の研究をなさんが爲め、奔走盡力纔に某々會社所有艇を借用せしも、時日切迫して數回の練習をなせしに過ぎず。而して競漕前に至りては授業後京濱間を往復して練習に努む。舵手森氏一日人に語りて曰く、當日風浪の災無くんば、決して外人に讓らずと。

禍なる哉。此日風强く浪高し。校友は汽車を以て横濱港内に集まる者數百、加之二部三部選手は舊艇を浮べて、途上大森羽田の難所に風浪と鬪ひつゝ、遠漕して之を應援す。午後二時三十分號砲一發。一朶の白煙空に立ち昇るや競漕は開かる。外側のコースを取りて善漕實に一理、而かも直接に外側コースの受くる風と浪との防害は、吾軍をして幸あらしめず、

遂に二艇身餘の差を以て破る。嗚呼天乎、命乎、當日のコース決定及び發艇の發砲等皆、勝利を唯一の目的とせる外人の專斷に出でざるもの無かりしと云ふに至りては、豈天ならんや、命ならんや。埠頭校友聲を呑んで相擁して哭し、憤懣遣る方無し。然りと雖云ふ勿れ、氣運の消長免れ難きは自然の理法、況んや此一戰、以て鼎の輕重を問ふ可きに非るをや。蚊龍靜かに潛勢力を持して、池中竊かに雲を待たん哉。野毛山颪春晩の愁を吹いて寒く、夕陽あえかなる横濱灣頃、落花一片潮に浮びぬ。

四月三十日校友會委員會召集。端艇界の進歩驂々として止まる所を知らず、本校端艇部亦他の先んずる所と爲らん事を恐れ、經費の增額を請ふ。即決議の結果、從來部費八拾參圓は六百五拾圓に增額せらる。

十一月二十二日金風葉葭を渡る好季を選みて第十四回秋期競漕會を催す。治に居て亂を忘れざる也。年別レースに於て三年は一二年聯合軍を破る。若林幸次郎（舵手）關口英吉（整調）瀨尾雄三（五番）鶴見鎭（四番）齋藤運次郎（三番）山口正治（二番）岡村象雄（艇舳）。

○明治三十一年

二月隅田河邊の風雲頻りに亂るゝ時、畑惣之助、北澤惇夫、木下東作の三氏重任を負ひて新たに委員たり。後三月北澤惇夫氏故ありて任を辭し、大塲信續氏代りて委員に推さる。

三月十七日校友會委員會を開く。當時端艇皆老朽して久しく用に堪ふ可からず、故に早晩端艇新造の工を起して吾部の發展を期せざる可からざるを以て、此日造船費の故に部費增加の止むべからざるを說き、諄々請ふ所あり。遂に決議の結果、八百圓に增額を許可せらる。

四月十一日第十五回春期競漕大會擧行、江花江水春悠々たれども、或は曰ふ、敵ありて吾城門を窺ふと。兜の緒引締めて、此日健兒皆よく振ふ。第二選手一着一部、選手競漕は闇夜、提灯を舷頭に揭げて行ふに至りしと云ふ。一着二部、森脇幾茂（舵手）大塲信續（整調）齋藤運次郎（五番）山田治平（四番）河原一郎（三番）漆野佐一郎（二番）岡村象雄（艇舳）。其外海軍省來賓レースあり。猛烈なる强漕以て吾等が範を仰ぐべかりしといふ。

九月本部部長松田爲常先生任を辭し、谷山初七郎先生之に代りて新たに部長たり。

十一月二十二日第十六回秋期競漕會開催。聞道、一橋城頭紅旋頻りに搖ぐと。嗚呼將軍は誰ぞ、將軍は誰ぞ。吾等亦備ふる所無かる可からず、年別レースに於て第二選手一着三年、選手競漕亦一着三年、佐分利貞男（舵手）志田義三（整調）小出塲（五番）木下東作（四番）宮田達三（三番）漆野佐一郎（二番）土倉四郎（艇舳）。

己亥聯合競漕會（第六回對高等商業學校競漕）　成立——

曩に高等商業學校と隅田川上に兵を合す事五回、角逐の劇烈なる實に天下の偉觀とすべきもの、而して二十九年以後中絶して此の壯此の雄見るべからず。兩校學生深く之を憾みとし、遂に兩校の交渉となる。即ち十一月對校競漕の約成り、來春四月を期して己亥聯合競漕會を擧行し、維新海軍々制の先覺者たる榎本子爵を會長に推し、狩野本校々長、駒井高商校長を副會長とし、士道の上に立ちて兩校技を鬪はさん事を議定す。

○明治三十二年

對高商競漕の約既に定まり、天下多端のうちに新らしき年を迎ふ。人選最も意を用ひたる本校選手は佐分利貞男（舵手）を一部より、大塲信續（整調）小出塲（五番）漆野佐一郎（四番）の三氏を二部より、又富田達三（三番）神谷正治（二番）三田村逸喜（艇舳）の三氏を三部より推薦す。一月選手は魁號を坂東太郎に浮べ、遠く銚子河口を望みて歸る。重任肩に在り、思胸に滿つ。野末に遶き富士筑波の姿、水鄕白帆蘆荻の眺め、七氏の感懷夫れ果して如何なりしぞ。

二月新委員改選の結果、畑惣之助(再選)、大場信續(再選)、神谷正治の三氏任に就く。此月下旬對高商選手は居を向島に移す。畑惣之助氏志田義三氏、之が監督たり。

三月十一日校友一同大教場に集まり選手推薦式を行ふ。選手一同登壇、村山氏一人宛其名を呼ぶや、柏手の音雷の如し聲を呑んで校友の熱誠に酬ひざるべからざるを誓ふ。此時また北青葉城下に殺到して敵手を鏖殺せんとする、野球部柔道部の兩選手を同じ思に送る。

四月一日野口造船所に建造を命じたる新艇四艘及特に選手練習用として建造せしめたる魁號の進水式を行ふ。對高商の大選手は魁號にチヤムピオン・フラグを押し立てゝ先頭に漕ぎ上るや、各部選手は七隻の新舊艇を以て之に次ぎ、勢威堂々落日大旗を照し、撓架轢音鏗々墨江を壓す。

四月十三日第十七回春季競漕會擧行。今年より第三選手の競漕をも行ふ事としたれば、競漕の趣味、範圍益々擴大せらるゝに至る。第三選手一着三部、四分三十六秒。第二選手一着三部、四分二十一秒。第一選手一着三部、四分十四秒。高波興策(舵手)志田義三(整調)飯田貫一(五番)木下東作(四番)野岐藤三郎(三番)豐山靜邇(二番)八代豐雄(艇舳)。

茲に本校競漕會既に終りて、對高商競漕愈々切迫す。仲野秀治、森脇幾茂兩氏は監督周旋に力め、又村山鄕太郎、鹽谷溫、大久保利賢、柳悅耳、佃土用男の諸氏、及各部選手より選出したる安藤又三郎、小山朝佐、高波興策の八名を以て一般の事を定むるに決す。青葉城下の敗報勝報交々至りて選手の責任は益々重きを加ふ。校友の堤上を馳騖し、汗に濕ひ塵に塗れて選手を叱咤鞭撻する者、日に幾十幾百。吾選手亦眼勉奮力至らざるなしと雖も、時に士氣沮喪する事無きに非ず。合宿の一夜深更、選手皆晝間の練習に疲れ果てゝ前後も知らざる時、闥を排して入り來れる壯漢一人。放歌鞭笞以て一同を醒めしむ。驚いて凝視すれば、之實に整調大場氏なりきといふ。『ストームで皆の元氣を出して遣る』の一語、之を聞く毎に吾人は涙の胸を濕すを禁ずる能はざるなり。

四月二十七日狩野校長は生徒を一大教場に集めて、聲援に對する注意を述べられ、終りて委員安藤又三郎氏の聲援方針の報告あり。即聲援隊は之を水陸の二隊に分ち、總指揮官三名は東西南北各寮の四艇隊及一部二部三部の三艇隊を合せて七艇隊より成る水援隊を率ゐ、各艇隊に司令官一名、各艇に艇長一名ありて萬般の指揮をなし、八百松決勝線間の各部署を守り、陸援隊亦東西南北の四寮隊に分れ同じく八百松決勝線間の部署に就くべきものとし、別に注意書十ケ條を定めて、帽子に白布を覆ふ事、午前十時迄に大連灣に集合すべき事等を規定す。

四月三十日散りかゝる花分けて双龍相搏つの壯觀を現出すべき己亥聯合競漕會は、午後一時十五分本校及高商兩校の混合レースを以て開始せらる。午下三點、互に秘術を盡せる四番の混合競漕も終りぬ。墨陀の堤綾瀨の東、白影簇々として動く。大連灣頭に至れば、大艦三隻小艇六十隻舳艫相咖んで令を待てり。既にして三艦纜を解いて中流に放てば、小艦亦各所屬の艦に結んで蜿蜒長蛇の如し。四時十分三艦六十艇颾煙鳴笛綾瀨を發し、流を亂して南に下る。歡呼の聲次第に高く氣悽殺を極む。午後五時日は金龍山下の塔上に懸り、微風冷かに鬚邊を拂ふ。茲に艇隊は鎖を斷ちて四散し、各部署に就く。一小艇縱横汽走して、競艇は大學の華嚴號、コースは第二と定まりたる旨を報ず。既にして選手艇に上るや、白艦々上汽笛連鳴長く堤上堤下校友連呼熄まず。六時三十分兩艇汽艇に牽かれてスタートに向ひ、浮標を把りて待つ事暫時、日沒し風死して暮靄江を度る。忽ちにして轟然號砲は響きぬ。嗚呼赤か白か、輸贏夫れ何れぞ。すでに八百松に於て、稍優勢なりし吾が白艇は、整々半艇身餘の雄を以て渡場も過ぎぬ。石碑すでに過ぎて赤の白を追ふ事急に、一高棧橋に至りて兩艇殆ど相並びしも、吾力漕遂に効を奏し、驀然一抹の白煙に、白旒一流空に躍る、嗚呼吾勝てり吾勝てり。

是に於てか艇庫樓上篝火二點を照し兩校選手相對し、兩校學生之を圍みて己亥聯合競漕會閉會式を擧ぐ。

午後十時築地送艇隊は各借用艇を送還して歸來す。曩に旗艦々頭に翳したりし柏葉の大旆を先頭に、校友一千『花は櫻木人は武士』の凱歌勇ましく選手を擁して悠然南に武陵に歸る。星影地に落ちて夜將に三更ならんとする時、武香陵頭選

手慰勞式を擧ぐ。狩野校長慰勞の辭、選手總代佐分利氏の謝辭あり、鹽谷溫氏の發聲を以て選手の萬歳を三唱し式終る、乃ち柔道道場陰の阜上に辨當を喫し、醇酒二樽を拔いて痛飲す。向ふ處に敵影無く、六度の戰に六度ながらの勝を占めぬ、偉なる哉其强、欽すべき哉其意氣、懦夫輩をして其の想像をも許さゞる奮力練磨は、吾部史上實に不朽の薫化を殘さずんばあらざるなり。當日船を擧げ人を派して應援の好意を採られし諸校下の如し。帝國大學、高等學校千葉醫學部、海軍豫備校、攻玉社、日本中學、開成學校、郁文館、東京府中學、錦城學校及獨逸協會。

五月九日校友錦輝館に選手慰勞會を開く。

五月十四日祝捷レースを擧行して、祝捷メタルを頒つ。

○明治三十三年

二月新委員として細井正治、三田村逸喜、石原忍の三氏推薦せらる。

四月十一日第十九回春季競漕會擧行。第三選手一着三部。第二選手一着三部。第一選手一着三部。高波興策（舵手）神谷正治（整調）飯島貫一（五番）石原忍（四番）野崎藤三郎（三番）豐山靜邇（二番）八代豐雄（艇舳）。三部が全勝を續くる事茲に二歳、誠に偉なりとすべし。少數なりと雖も其の全員を擧げて端艇部の爲めに盡したる態度に至りては、他の能く企及し得る所に非ず、昨年の榮譽今年の光榮誠に偶然にあらざるなり。

十一月二十二日第二十回秋期競漕會あり。混合レースを終りて年別レースに移る。第二選手一着三年。第一選手一着二年、田口文太（舵手）秦日愛（整調）黑澤次久（五番）菊池眼（四番）根岸和一郎（三番）高橋新一郎（二番）豐山靜邇（艇舳）。

○明治三十四年

二月新委員改選の結果黑澤次久、三田村逸喜、秦日愛の三氏選に當る。

四月十日第二十一回春季大競漕會擧行。第三選手一着三部。第二選手一着三部。第一選手一着一部。加藤恭平（舵手）佐竹三吾（整調）黑澤次久（五番）松村眞一郎（四番）根岸和一郎（三番）矢崎惣治（二番）高頭正太郎（艇舳）斯くして優勝旗は三部より一部の手に移りぬ。

九月委員三田村氏都合によりて任を辭し、田口文太氏代りて任に就く。

十一月二十二日二十二回秋季大會を開き、例により最後に年別競漕を行ふ。第三選手は一着二年。第一選手は一着三年元良信太郎（舵手）秦日愛（整調）黑澤次久（五番）富田達三郎（四番）根岸和一郎（三番）高橋新一郎（二番）豐山靜邇（艇舳）。

○明治三十五年

二月松野松太郎、長田一郎、原來復の三氏新に委員たり。

四月第二十三回春季大會擧行、選手競漕に於ては三部勝つ。

此年校友會雜誌六月號に『無條件端艇競漕を排し、切に端艇部員諸氏の猛省を請ふ（齋藤良衛氏）』なる一文あらはる。其要點を抄出すれば『我嘗て端艇部先輩に無條件の眞意を問ふ。答へて曰く、豈夫獨り字義にのみ從はんや。人各々正義に依遵し苟も其域を出でず。只條件の繫を厭うて心の直に就きしのみ。されば秩序整然一絲の亂無く、各々其分を守りて疑懼する所なく、世を擧げて我淡正無利なるを稱せりと。今の競漕は即然らず、愾氣物に接して一度動けば、一校の親一舍の寧忽にして腦蓋を脫し、他者の航路を横奪して自ら高うす。甚だしきは未だ程を發せざるに、早く既に抑止を思ふ、勝者必ずしも先んぜず、敗者亦自ら悲します。

競漕の眞義と無條件の德と今將た何處にか在る。飾表以て世を疑ひ、徒らに信を天下に失す……我校の艇漕は不善

を極め、不徳義を盡す……無條件競漕は無秩序競漕なり、不公平の競漕なり……然らば之が回正匡救の道如何。曰く漕手が無言の規約に委するは一なり。競漕の條文を成立するは二なり、吾人夫れ第一者を謳歌せんかな』と。然りと雖も、なほ條文の據るべきものなく、而かも呪はれたる無條件競漕は無言の規約を實行するに至らず。校友會雜誌批評欄に『無條件競漕排すべきに非ず。只問ふべきものは競漕者の悖德行爲のみ』との冷やかなる反響を起したるのみにて、時は更に逸し去りぬ。

十一月七日第二十四回端艇競漕會擧行、年別レースに於て第二選手一着二年、第一選手一着二年、菊池昶(舵手)鶴田龜二(整調)田口文吉(五番)増田淳(四番)坂本修作(三番)江守護(二番)渡邊得男(艇舳)。

○明治三十六年

二月高頭熊太郎、鶴田龜二、菊池昶の三氏新に委員たり。

四月第二十五回春季競漕大會擧行。第三選手一着一部、第二選手一着一部、第一選手一着一部、松野松太郎(舵手)矢崎總治(整調)八卷運三(五番)阿部彦郎(四番)佐々木保藏(三番)江守護(二番)石渡又八(艇舳)、一部全勝の年なり。

十一月十七日第二十六回秋期競漕會擧行、年別レースに於て、第二選手一着三年、第一選手一着二年、佐野良雄(舵手)江守護(整調)佐々木保藏(五番)玉井喬介(四番)百崎得太郎(三番)高橋明(二番)飛山昇二(艇舳)。

秋九月經費千貳百圓を投じて野口造船所に命じ端艇新造の功を起してより玆に三閲月。十一月初旬功竣る。命名して吾妻、綾瀬、梅若といふ、一般使用艇として、アウト・クラッチの艇を得たるは、實に今日を以て嚆矢となす。特筆すべき變遷といふを得べし。秋期競漕會當日一同大學艇庫下の堤上に集會し、兼ぬて進水の式を擧ぐ、菊池委員の報告、谷山部長の祝辭あり、終りて各部選手は三隻の新艇に分乘し、一部二部三部の次を以て渡場より漕ぎ上る、優勝旗は先頭一部の艇にあり、光彩陸離、秋日爍として眼を射る。偉觀清容言語に絶し、堤上の部員皆凝視して聲を呑む。櫓音餘韻長く、晩雲微茫の間を縫うて大學艇庫上流に至りて歸る。夜上野韻松亭に端艇部懇親會を開くといふ。

十二月高等商業學校より對校レースに關して挑戰狀來る。然れども三十二年以來他校と特に行ふ所の試合を禁止するは本校の守る所なれば遺憾ながら之を拒絶す、高商方に於ては新聞紙上に讒謗の言を弄して、我を怯なりとなす。部員皆牌肉の嘆に嘆へず。

○明治三十七年

二月新委員として佐々木保藏、玉井喬介、高橋明の三氏任に當る。

四月七日第二十七回春期競漕會擧行。時正に吾蜻蛉洲の虀鉢艦隊が、朔北の荒野大海に兵を蠻族と交ふるの時なれば、特に諸般の經費を節約して以て軍費の一端に資せんとし、番組印刷の事なく、賓客招待の禮を廢し、大學艇庫審判船上共に彩旗の閃くを見ず。銅製の賞牌刻して『干戈之春』と云ふ。第二選手一着一部。第一選手一着一部。高頭熊二郎(舵手)納富清篤(整調)佐々木保藏(五番)内山正也(四番)杉村陽太郎(三番)小泉良助(二番)猪股松之助(艇舳)。

十一月十日第二十八回競漕會擧行。年別レースに於て第二選手一着一年。第一選手一着二年。花木實(舵手)古市六三(整調)桐淵廣一(五番)細見仁(四番)宮崎尚(三番)海老名一雄(二番)山上岩二(艇舳)。

○明治三十八年

二月新委員として玉井喬介(再選)、高橋明(再選)、碓居郁三の三氏推薦せらる。

四月一日「東郷」「乃木」と命名せられたる和船二艘の進水式を擧ぐ。輕快なる二挺櫓、爾今隅田の波を縫つて大いに飛

躍する所あらんとす。

四月十一日第二十九回春季競漕會を催す。前には赳々たる柔道部選手が大塚の一戰より高商軍を鏖殺して又立つ能はざらしめ、今や更に我撃劍部の有志一鞭遠く五城々下に凱歌を奏して歸る、此時に當り往時を追懐して感特に深きもの我等のみならんや。此日朝來少しく曇りしも午後は快晴となる。「干戈第二の春」として概ね昨春の例に倣ひ、大學艇庫審判船上の裝飾を缺き、賓客招待の禮を止む。本會最初の和船競漕を催し「東鄕」「乃木」の二船大に振ふ。第三選手一着二部。時間五分五十五秒。第二選手一着二部、時間五分三秒。第一選手一着一部時間四分五十秒、碓居郁三(舵手)納富清篤(整調)猪股松之助(五番)海老名一雄(四番)百崎保太郎(三番)新井源水(二番)山上岩二(艇舳)。

九月委員の更迭あり。納富清篤、古市六三、和田彰司の三氏新に委員たり。

十一月二十二日楓葉荻花風冷に、疑乃悠揚として遠く秋雲に入る。即第三十回秋季競漕會を催し、兼ねて和船大山丸の進水式を擧ぐ。年別レース第二選手一着一年、第一選手一着三年古市六三(舵手)納富清篤(整調)山上岩二(五番)海老名一雄(四番)宮崎尙(三番)細見仁(二番)八木六郎(艇舳)。

○明治三十九年

二月新委員土屋隆三、湯山常五郎、大庭士朗の三氏推薦せらる。

四月十一日第三十回春季競漕會擧行、第三選手一着三部、時間四分二十五秒、第二選手一着三部、時間三分三十五秒。第一選手一着二部、時間三分二十八秒、關口鯉吉(舵手)古市六三(整調)湯山常五郎(五番)林靜馬(四番)宮崎尙(三番)牛尾馨次(二番)高島三郎(艇舳)。

棧橋交換の件

吾校の隅田川上流言問に於ける棧橋は、從來汽船發著所の上、現今高棧橋の位置にありたるものなるが、高商は其の艇庫設置の關係上此の交換を歎願する事再三に止まらず。即請を容れて吾棧橋は之より上流數十間、現在の地に移すに至る。

艇庫新設費收集の件

端艇界の進歩發達は實に頃刻も止まず。吾廐橋艇庫亦新設以來既に十數年。事多く舊式に屬し不便云ふべからず。然も部費の到底如何ともすべからざる即校友の義捐に賴りて以て新艇庫を建設せんとしゝ校長の許可を得て爾後校友の寄附金を募るに決す。是三十九年九月の事なり。後校友會規則の改正となり、右艇庫新設費は入學金として之を收集するに至る。

○明治四十年

二月阿部八郎、西原民平、奥野幸左衞門の三氏新に委員の任に就く。

四月第三十二回春季競漕會を催す。第一選手競漕一着三部、柏原長弘(舵手)神座李蹊(整調)星野健太郎(五番)越川彰(四番)大庭士朗(三番)鶴岡正一(二番)桐淵廣一(艇舳)。

曩に野口造船所に命じて新艇を建造せしめが、玆に其竣工を告げ進水の式を擧ぐるに至る。谷山部長命名して彌生、青葉、紅葉、吹雪といふ。幅四尺長サ四十尺。瀟洒たる姿水に浮んで萬人の膽仰を集む。是即現時の新艇四隻なり。

○明治四十一年

二月渡邊伍、岡村貞二、遠山衡平の三氏新に委員となる。

四月九日競漕會定日と豫て定められしも、此日大に雨降る、止むを得ず競漕會を延期す。

四月十日昨雨全く齎る、即第三十三回競漕會を擧行す。然れども此日實に有栖川若宮殿下の御葬儀の日に當る。深く弔

意を表し奉り、急遽豫定を變更して音樂隊を廢し、一切の裝飾を用ひず、誠に靜寂の春なり。第二選手一着二部、時間六分四十五秒、第一選手一着三部、時間六分二十秒、額田晋(舵手)奥野幸左衞門(整調)恒次博四郎(五番)前田友助(四番)遠山衡平(三番)南澤遊龜治(二番)長尾優(艇舳)。

十月十七日第三十四回秋季競漕會(第一回全國中學校優勝競漕)擧行。江水昔ながらに荒川の清流秋愈々深し。江上の覇、凱歌の響今や空しく昔の夢に入らんとす。時は來りぬ、こゝ洛陽の秋を飾らんと、檄を全國中學に傳へて墨江に優勝旗を爭はしめんとするや、雁信東に飛んで松島灣頭東北中學の奮起となり、北裏日本の潮の香に新發田中學の唾手となる。都下中學の應ずるもの、慶應普通部、明治學院、獨逸協會中學、附屬中學、學習院中等科、開成中學、早稲田中學の七校、此日午前先づ新發田、慶應、明治。及獨協、附屬、學習院。及東北、開成早稲田の三番の豫選レースを行ひ、新發田、東北、獨協勝つ、午後年別レース及右三校の爭覇戰あり、年別レースは第二選手一着一年、第一選手一着二年、關口泰(舵手)清宮外記(整調)石丸惣藏(五番)初見金三郎(四番)大河原泰二郎(三番)細井俊雄(二番)西川誠(艇舳)、また中學優勝レースは新發田、東北、獨協のコース順にて潮は上げ、新發田五分二秒を以て先づスリットに入る、艇庫樓上優勝旗を授與し夜嚶鳴裡堂半宵の快談に遠來の士を犒ふ。

明治四十二年

二月新委員就任、石丸惣藏、大河原泰二郎、御手洗文雄の三氏なり、石丸惣藏氏後都合に依り任を辭し、末松菊之助氏之に代る。

四月第三十五回春季競漕會擧行。第三選手一着三部、時間六分十一秒、第二選手一着二部、時間五分二十一秒、第一選手一着二部、岡村貞二(舵手)清宮外記(整調)大河原泰二郎(五番)阿久津國造(四番)石原供三(三番)須賀善一(二番)室田半之助(艇舳)

九月第三十六回秋期競漕會を擧行し、併せて全國中學を招きて優勝旗を爭はしむ。應ずるもの開成中學、東北中學、愛知一中、新發田中學、慶應普通部の五校、開成愛知。及東北新發田慶應の二番の豫選レースを行ひ更に優勝者たる愛知新發田を爭はしむ。新發田再び勝利を得て歸る。

明治四十三年

二月前田孝義、石原供三、川越明房の三氏新に委員たり。

四月十二日第三十七回春季競漕會擧行。第三選手一着一部、第二選手一着二部、第一選手一着二部、村瀨花之丞(舵手)大河原泰二郎(整調)佐々木救(五番)市河三祿(四番)飯田光太郎(三番)福岡伍一(二番)藤村蓋(艇舳)

九月二十四日第三十八回秋期競漕會擧行、全國中學來賓優勝レースを催す。初め檄を傳ふるや之に應ずるもの開成中學東北中學、愛知一中、早稲田中學、慶應普通部の五校、此日午前先づ開成東北愛知。及早中慶應の二番の豫選レースあり て、東北勝ち、慶應勝つ。午後更に此東北中學、慶應普通部の二校相競ひて東北中學遂に勝ちぬ。從來新發田中學にありし優勝旗は、こゝに東北中學の掌中に歸し、翻飜として鐵路北に去る。

○明治四十四年

二月新委員推薦、宮野容吉、飯田光太郎、長谷川松太郎。

四月十日第三十九回春季競漕大會擧行。第三選手一着、一部、時間四分四十七秒。第二選手一着一部、時間五分四十秒、第一選手一着二部、時間五分五十秒、清宮外記(舵手)市河三祿(整調)藤村蓋(五番)石原供三(四番)飯田光太郎(三番)細谷

玲一郎(二番)岡本久吉(艇舳)。

九月二十四日第四十四回秋季競漕會擧行、混合レース及中學來賓優勝競漕を行ふ。午前中は混合レース。午後檄に應じて立てる東北中學、愛知一中、早稲田中學三校の競漕あり。コース順東北一、愛知二、早中三、潮上げ、愛知一中遂に悠悠一着を占む。年來の奮闘遂に今日の光榮を霽す。優勝旗は東北中學より移りて愛知一中の手に入る。待乳の森の彼方夕陽美はしく、水の流れ靜かなり。

○明治四十五年—大正元年

二月新委員推薦、飯沼一省、高橋七之助、東龍太郎。

四月十一日第四十一回春季競漕會擧行。第三選手一着一部。第二選手一着二部。第一選手一着一部。田誠(舵手)宮野容吉(整調)久保勘三郎(五番)北條懿督(四番)鈴木衛(三番)小倉源次郎(二番)加藤正義(艇舳)。

九月二十四日既に檄を全國中學に傳へ、中學來賓レースを催さん豫定なりしも、休暇中突如　明治天皇登遐の悲に遇ひ奉り、此の月十三日二重橋畔悲しき御幸を拜し奉りたる事なれば、謹みて御遠慮申上げ競漕會を中止す。

○大正二年

二月新委員推薦、五十嵐小太郎、永島忠道、三澤憲。

四月八日春季競漕會定日なりしも、朝來の豪雨熄まず、即之を延期す。

四月九日「諒闇の春」花香轉た愁色あり、一切の裝飾を廢し、音樂隊を用ひず。第三選手一着一部。第二選手一着三部第一選手一着三部。輕部久喜(舵手)本山仲久(整調)東龍太郎(五番)萩原省三(四番)新井巳千雄(三番)内山桂梧(二番)佐藤厚一(艇舳)。

○大正三年

二月新委員推薦　高木貞二　小倉三郎　木村次郎三君就任、事故ありて高木君辭し安藤正臣君交代す。

四月十二日春季大會定日なりしも、十一日照憲皇太后崩御あり謹みて哀悼の意を表し奉り競漕を中止す。

○大正四年

二月新委員推薦　土肥顗、五百藏熊太郎、石光董。

四月十二日春季競漕大會擧行、新艇庫落成式を擧ぐ。第三選手一着三部。第二選手一着三部。第一選手一着三部。中村省吾(舵手)内山桂梧(整調)木村次郎(五番)郷隆(四番)日野誠(三番)萩原省三(二番)石光董(舳手)。

十月十五日秋季大會擧行。都下中學招待競漕。慶應普通部、開成中學參加、フアウルによりてドローン・レースとなれるは遺憾なりき。

○大正五年

二月新委員推薦　長崎惣之助、蘆葉榮、阿部恭一。

四月十二日春季大會擧行。第三選手一部。第二選手一着三部、第一選手一着三部。佐藤毅(舵手)直江六三郎、(整調)石光董(五番)郷隆(四番)北原早苗(三番)太田忍(二番)阿部恭一(舳手)。

○大正六年

二月新委員推薦　中島千鹿男、大石武夫、東陽一。

四月十日春季競漕大會擧行。朝來の曇天午後に至り雨となりしも遂行。第三選手一着一部。第二選手一着一部。第一選手、青白フアウルしてオミツトを宣せられ、三部優勝旗を得。濱綱三郎(舵手)直江六三郎(整調)阿部恭一(五番)北原早苗(四番)東陽一(三番)關口三郎(二番)瀬田修平(舳手)。

十月七日秋季大會擧行。中學優勝レースを行ふ。檄に應じて起てるもの愛知一中・横濱商業・早稲田實業・慶應普通部・豫選によつて横濱商業・早稲田實業勝ち、薄暮更に相競ひ白熱的クロスレースに横商優勝す。

○大正七年

二月新委員推薦　齋藤憲一、坂本義鑑、關口三郎。

四月八日春季大會擧行。第二選手一着三部。第一選手一着二部、松島孝二郎(舵手)大石武夫(整調)尾形正作(五番)坂本義鑑(四番)島川光雄(三番)藤本達次郎(二番)千葉四郎(舳手)。

十月十一日秋季大會擧行。中學招待レースに愛知一中、慶應普通部參加。堂々五艇身の差を以て遠征軍優勝す。

此の年對高商レースの復活殆んど實現せんとしてならず。部員脾肉の歎に堪へず。

○大正十年

二月新委員推薦　不破武夫、大串長成、山田治郎。

四月十日春季競漕大會を擧行す。第二選手一着一部。第一選手、青赤大接戰の後一部勝つ。伊東隆治(舵手)齋藤憲一(整調)中村榮治(五番)石岡武(四番)中島千鹿男(三番)千葉雄次郎(二番)佐野茂(舳手)。

十月十三日秋季大會。中學招待レースに參加するもの愛知一中・慶應普通部、再び名古屋軍優勝す。

此の年十一月、帝大對早大、高工對外語の二大對校レースあり。都下の端艇界漸く復活せんとするをみる。超えて十二月帝大委員會は來春四月六日を期して全國高等學校招待競漕を擧行するを決議し、即ち檄を吾に傳ふ。

時期到る、蛟龍終に雲を得たり、默々空しく劍を撫して麝勃たる雄心を制すること星霜正に二十。何ぞ躊躇する所かあらん。乃ち之に應じて、各部選手のうちよりその粹を拔き、大利根に冬氷を破つて大遠漕を試み、猛練習を開始す。そのメンバーは、舵手小倉俊夫(一部)整調坂本義鑑(二部)五番山田治郎(三部)四番藤永榮(三部)三番大串長成(二部)二番松田佳介(一部)舳手村林一郎(一部)なり。

コーチは久保勘三郎氏直江六三郎氏平石氏佐野氏等主として之に當らるゝことゝなれり。大利根遠漕は冬期休暇中に行はれ、寒風雨雪を厭はずタンク、バツク臺に、日一日と練習を積めり。一方直ちに帝大の招待に應ぜしは二高と三高となり。一は東北の雄堅忍不撓の意氣を以て我を破らんとし、一は洛陽の重鎭、精巧なる漕法を以て、天下に覇を唱へんとす。共に冬期休暇を利して上京し、向島に合宿して隅田川に練習を開始せり。(大正三年以降不破武夫記)

○大正九年

一月四日、各校選手懇親會、長命寺に於て開かれ、我が校選手は、佐原より歸京して、之に出席す。これより先各高校先輩及び大學當局者との間に協定を設け、平日は出艇は禁止さるゝ事となれり。一月十日、選手は拾餘日の猛烈なる練習を終へて歸京し、第一回のレースコースを引く。あゝ三ケ月の後、墨江櫻花の下に校友一千の輿望を負ひて戰に臨まんとする七人が胸中果して如何にぞ。

かくて大遠漕も無事に終りぬ。即ち南寮二番に合宿し、協定に從ひて、猛烈なる練習を開始せり。尙渡邊正雄(一部)藤本達次郎(二部)窪田誠三郎(三部)の三名は、マネージャーとして競漕に關する萬端を處理することゝなれり。陣容すでに整ひぬ。新鋭の意氣猛くして、戰雲南寮二番を蔽へり。平日は放課後すぐに、工學部タンクに行きて技を練り、歸寮するや直ちに、ランニングを行ひ、夜は九時半よりバック臺を引く。先輩校友常に來りて激勵されたり。土曜日は放課後、日曜日は早朝より出艇練習す。雨雪烈風も、ものかは猛烈なる練習は漸次にその度を加へたり。二月十一日紀元節の佳節をトして、倫理講堂に於て、對校選手推薦式擧行さる。先生先輩の出席頗る多く、校長の訓辭、部長、先輩の式辭あり。熱誠を以て選手を激勵されたり。選手總代小倉起ちて曰く、「生等誓つて墨江上の覇權を死守せん」と。何等の悲痛の言ぞ。選手の胸は固き誓に戰のけり。「死すとも敗れず」と、一千校友の前に誓ひし七雄の眉宇は固き決心に輝けり。

二月に入りて、四高六高も新たに參加することゝなれり。好敵何ぞ拒まん。選手の意氣はいやが上にも天を衝けり。而して、寄宿寮が三十年の紀念祭を盛大に祝はんとするの時に至るも、我部選手は、敢て、美酒に醉はず。二月二十九日。夜來の降雪名殘なく霽れし日に、歡樂の丘を去りて、四日間の江戸川遠漕を行へり。選手河上に技を練るとき、三月一日の晩餐會、二日の茶話會にては、熱誠なる諸先輩は交々立ちて、我が部選手の勞を犒ひ併せて、激勵されたり。紀念祭終るや寮内はとみに緊張す。遠漕を終へて歸寮せる選手の技、益々進み、敵の情報また屢々至り、戰機漸次に熟し來る。三月十七日第二學期全寮晩餐會催され、席上、更に熱誠なる激勵の辭をうく。我が部は斷じて、腹背の敵を擊破せざるべからず。對高商レースに於ける先人奮鬪の跡　今も歴々たる光を放つ。當時の戰況を語る谷山部長の言々句々熱烈にして、言ふべからざる緊張は選手が胸を壓したりき。レースは既に十九日の後なり。腹背の敵を一蹴して、光榮の歴史を固守せずんば、何の顏あつてか中外に對せん、かくて試驗も近づきしが、選手の練習は寸毫も弛緩せず。先輩校友の指導激勵のもとに或はタンクに或はバック臺に或は川上に奮勵努力至らざるなし。三月二十一日午前第二學期最後のレースコースを引く。帝大の先輩之を見る。一高の實力は充分に認められたり。此の日重大問題あり。前日の帝大に於ける各高校代表者の決議により、三月中は試驗終了後も出艇を許さずと。吾人は事の俄かなるに驚けり。抑吾人は以前より一定のプランの下に練習せし者、今急に之を變更せんは誠に堪へ得ざる所なり。しかも過去に於て地方にて協定の破られしことさへありたり。この協定決議の行はるゝや否や大いに疑はし。されど事既に玆に至る。吾人は涙をのんで協定に從ふ決心をなせり。即ちタンクは一層猛烈となり互ひに勵まし、以て出艇に償はんとせり。三月二十七日試驗終る。天氣晴朗なれども協定により出艇する能はず。空しく天を仰いで長嘆す、タンクによりて、わづかに悶々の思ひをやりぬ。三月中はかくの如くにして、一回も出艇する能はず。而して幸か不幸か、三月中は雨天多かりき、三月も最終日となりレースは、一週の後に迫りぬ。刀水に寒風を受けて、練習の苦心幾日なりしぞ。年改まると共に南寮二番に合宿して、渾身の熱血努力を以て鍛えし壯腕今ぞ鳴る。而して一週の後に墨江上に、我が向陵の意氣を發揮せんとす。三ケ月の苦心努力、先輩校友の熱誠なる指導激勵、彼を思ひ此を偲びて、感慨無量なるものあり。戰はん哉。時機は至りぬ。

此の日四時より、向陵に於ける最後のバック臺を引く。わづかに十分間のバラック臺なりしも、正氣溢れ悲壯を極めたり。今向陵を去つて戰地に臨まんとす。時に春雨尙霽れず。戰士の衣袂を霑ほす。六時寮生に送られて校門を出づ。あゝ男子雄志を抱いて向陵を去る。我等勝たずして、如何で一千健兒に相見ゆるを得んや。即ち根津權現に參りて必勝を祈り雨中向島合宿に向ふ。

明くれば四月一日春雨甫めて霽れ陽光暖かなり。既に他校も合宿し、墨堤戰雲滿ちたり。新聞紙傳へて曰く「技量伯仲し勝敗逆堵し難し」と。正午より練習は一齊に開始されぬ。音に聞きし二高も三高も見えぬ。五校の選手或は競漕艇なる外國語學校のアウトリガー艇にて、或は一高の新艇にて川の上下を往復し壯觀を極む。四月一日夜、各校選手關係者一同今半に會して大懇親會を催したり。合宿に入りてよりは、快晴の日とては、一日もなく殆ど春雨降りしきりぬ。雨を犯し

て練習する、戰士の苦痛察すべきなり。斯聞紙は連日豫想土手評を載せ、二高の頑健三高の精巧を賞讃して、一高と伯仲の間にありとなす。五日午後雨を冒して最後のレースコースを引く。成績良好にして、大なる確信を得たり。されど斷じて樂觀は許されず。

四月六日第一回全國高等學校對校競漕の日は來りぬ。此の日夜來の雨霽れたれども落水あり、流稍急なり。墨堤無數の應援隊觀衆の注視の下に午前十時四十二分、第一豫選のスタートは切られぬ。六、四、二、の三校にて爭ひしが、二高の底力他の追從を許さず。十艇身の差にて大勝す。時間七分四十六秒なり。六高第二着四高は六高に後るゝこと更に三艇身。關西の二校顏色なし。因みに本大會の競漕距離は枕橋下より一高艇庫に至る千三百米なり。

正午第二回豫選行はる。これぞ我が一高と三高との大競漕なり。すでに我が校友は應援隊を組織し手に手に白旗を持ちて、水門渡の間を占領す、三高亦前日の陸上戰の勝利の餘威を驅つて、今日も再び名を成さむと赤旗を振りかざして應援盛なり。既にして二艇は汽船に引かれてスタートに向ふ。紅白の旗亂れ、歡呼の聲江上に響き凄壯の氣漲る。我は三コース敵は二コースなり、零時三十五分一發の號砲の音と共にスタートを切る。我は三十二のピッチ敵は三十一。八百松に於て既に我は半艇身を先んず。悠々迫らず我が應援隊の前に於ては力漕又力漕、一艇身餘の艇差を生じたり、されど敵もさる者渡場をすぎてよりピッチを三十三に上げて、力漕、我を追ひ艇差稍減小す。一高負けじと更に力漕をつゞくれば艇足益加はり、敵の追隨を許さず三高力漕を續くれども及ばず。竹屋にて三艇身の差を生ず。三高力盡きてオールに、生氣なし。我は三十五のピッチにて、ラストの力漕見事にして、悠々ゴールに入る。艇差四艇身時間七分二十六秒。洛陽の健兒我が軍刄に倒れぬ。前日の恨を晴して應援團亦狂喜す。あゝ悠々四艇身なる哉。

合宿に歸りし選手は中食の後、休養を取りて來るべき決勝戰の準備をなせり。我が敵は東北の健豪なり。その堅忍不撓の意氣を以て、我が牙城に迫らんとす。曇りたる空は時々細雨を降らす。風全く死して暗雲四方をこめ、悽慘の氣に滿ち

たり。白線の應援隊は最後の奮闘に榮冠を背負はむと應援歌を高唱し喚聲は天地を動かさん許りなり。四時七人の戰士は必勝の決心を眉宇に秘めて戰に臨みぬ。潮は次第に上げんとすれど落水尙ほ强し。コースは我三、敵二と決定し、我が艇はその名も快きジュピターなり。四時を過ぎて二艇は觀衆の拍手と應援隊の喚呼に送られて汽艇に牽かれてスタートに向ふ。三ケ月の苦心は將にこの數分時間に定まらんとす。白か綠か、江上寂として聲なし。四時二十七分、スタートは切られぬ。二艇相角逐して進む。我は三十三のピッチ。敵は三十一半なり。八百松に至れば敵力漕して一シートを先んず。我追へども如何にせん艇差は益々增大し我が應援隊の前に於ては一艇身弱の差を生じたり。我が應援隊はこゝぞと許り激勵すれば、その意氣や敵艇を壓したりけん、我艇は見る見る恢復し始めたり。敵は心を許して、ピッチを二十九に落したるに我はピッチを三十三に上げ、力漕敵に迫り水門にて兩艇並行せり。我は勢に乘じて敵を追拔き渾身の意氣を一本一本のオールに注ぎ寸一寸と敵をぬく。壯快何者か是に比せん。竹屋渡前にては我二シートを先んじたり。二高かくてはならじと急にピッチを上げしが。我は驚かず。漸次にピッチを上げて進む。二高應援隊の前面にては我が艇足もの凄く言問に近づく頃は既に半艇身をぬけり。敵は死力を盡して玆を先途と奮張りしが僅かにスラトヘビー三十四に上りしのみ。我は勢に乘じて益々艇足を速めラスト三十七半にて、遂に一艇身の差を以て優勝せり。時間五分三十六秒五分の一なり。堅忍の意氣を誇りし東北の雄も我等の敵にはあらざりき。かくて、第一回全國高等學校對抗競漕は終りぬ。搖ぎなき墨江の覇權は玆に一段の光彩を加へたる也。選手應援團相擁して歡喜し、「嗚呼向陵に正氣あり」の歌は墨江の天地を動かしたりき。

事こゝに至る迄には誠に血涙の奮闘ありしなり。降雪肌を凍らしむる冬の朝まだき整調阪本が工學部タンクに行きて人知れず技を練りしは知る人の涙をそゝりたりき。舵手小倉の苦心、五番山田、中堅藤永、大串、二番松田舳手村林が奮闘等數へ來つて何れも涙ならざるなし。二十年の雌伏隱忍も、まこと、あだにはあらざりき。向陵健兒が意氣は、斷じて他の追從を許さず。第一回全國高校試合に於ける我が端艇部の大勝はげにや無比の壯快事なり。

是より先二月新委員白畠正雄西垣喜代次伊藤二榮の三氏就任す。

四月十一日第五十三回校友會競漕大會擧行さる。對科レースは、第三選手は理科、第二選手は文科優勝せり。文科第二選手舵手松本重治。整調龜山孝一、五番宮田爲益。四番淵脇濟。三番木崎宏。二番牛場友彦。舳手本田忠男。第一選手亦文科の優勝する所となれり。舳手式村義雄。整調阿部邦一。五番白旗正雄。四番不破武夫。三番西村高兄。二番村山藤四郎。舳手人見周三。

此の年學制變更年度にして、二個學期となり、從つて每學期行はるゝ文理科組選競漕も亦二回なりき、文科組選にては第一學期第二學期共二ノ組優勝し理科は、三ノ組全勝せり。

對校選手、對科第一、第二、第三各選手、各組組選等。向陵漕界は、とみに活躍の時期に入り、晝夜バック台の音は寮內にひゞき隅田河上、又、一高艇に征服されたり、飜つて帝大主催全國高校對校競漕は學制變更の結果以後は每年一月に之を行ふこととなり、我が端艇部は是によりて、直ちに來るべき第二回競漕に對する備へを致すことゝなれり。即ち四月對科競漕終るや、すぐさま次回選手の選拔に着手し、文科（舊一部）端艇部より三年西村高兄（初め木崎宏六月交代）人見周三龜山孝一の三名、理科（舊二、三部）端艇部より三年西垣喜代次、伊東二榮、二年高橋益雄の三名を拔き、之に第一回大會には二番手として奮鬪せし舊一部三年松田佳介氏の再起を願ひて、之を加へ、次のメンバーを編成せり。

舵手　龜山孝一（整調）西垣喜代次（五番）西村高兄（四番）松田佳介（三番）高橋益雄（二番）伊東二榮（舳手）人見周三。

更に白畠正雄、片山準二の二名は、マネージヤーとして、競漕萬端の事務を執ることゝなり、六月初めより前回選手が奮鬪の跡南寮二番に合宿し前回もコーチとして盡力せられたる直江六三郎氏指導の下に猛練習を開始せり。

夏期休業の始まるや六月二十日より七月四日迄艇庫樓上に合宿し、日々の苦熱を冒して練習せり。先覆人業の跡斷じて死守せざるべからず。炎熱烈暑また吾人が厭ふ所に非ず。八月二十日より同樣艇庫樓上に合宿し更に艇を大利根に進めて

烈日の下二週日刀水の大遠漕を行へり。

九月十三日歸寮す。その後益々練習は、猛烈となり江戸川及び荒川に小遠漕を行ふこと二回、孜々として戰備を固くせり。十月初め校內タンクの完成するや連日茲に技を練りバック臺にトラックに、只管に奮鬪練技せり。十月三十一日天長節の佳辰を卜して、選手推薦式擧行せらる。校長部長、先輩の激勵の辭あり。舵手龜山起ちて斷じて覇權を保有せんことを誓へり。レースはすでに二ケ月の後なり。選手の胸中決死の氣漲る。十二月二十四日、授業終了するや直ちに荒川遠漕を行ひ、戰備益々强固となりてより、愈々墨堤最後の合宿練習をなして來る一月六日の競漕を待てり。此の度の戰には東北二高何の故あつてか來り戰はず。關西の二校かの六高四高も恐れて出でず。唯獨り京洛の重鎭のみ復讐の意氣もの凄く東上せり。第一回大會に四校を屠りて大勝せし我が光榮の歷史あり。敵わづかに一つ三高のみならずや。彼如何に決死の勇を示さんとも、我は飽く迄之を擊退せざるべからず。

かくして、二艇、江上に相並んで白熱的練習を開始せり。

大正九年は壯快なる大勝の歷史を殘して去りぬ。來るべき大正十年の活躍果して如何に、墨江上頭我が部對校選手は新年を祝ふ暇もなく、猛烈なる苦鬪の中に大正十年を迎へたり。

○大正十年

世は平和なる新春の壽に醉へども、墨堤十里風雲今し急なり。彼此兩軍の陣營緊張せる中に遂に一月六日第二回全國高等學校對校競漕は來る。此の日風全く死して絕好のレース日和なり。三高軍は去年の恨を晴さんとして。その精巧なる漕法益々冴えて侮り難き勢を持す。されど我は是れ向陵の健兒なり。遠征軍果してその復讐を成就するか。一高如何にしてその覇權を守らんとするか。兩岸觀衆の片唾を呑みて注視する中を午後三時四十五分、出發の號砲高く轟きぬ。我は二コ

ース、彼は三コースなり。我が艇スタート頗るよし、されど三高もさる者、忽ちその豫定の急調を出だして迫り、八百松にて我に一艇身を先んじたり。我悠々迫らず。之に續く、水門に至るや、艇差一艇身半なり何條猶豫すべき、我力漕又力漕之を追ひて肉迫し、艇差四分の三艇身にちゞめ、更に踴躍之を拔かんとせり。此のとき兩艇のオール觸れ審判艇の號砲にてレースは中止されたり。敵我がコースを犯せし故を以てオミツトされ、我が軍優勝を宣せられたり。

再レース說起りて痛く物議を釀せしも、對校試合は、元是れ眞劍勝負なり。我が端艇部が半歲の苦心又此の眞劍勝負にありしのみ。今將た輕々に再び矛を交ゆるを得べき。而かも審判はあくまで絕對神聖なり。吾人は審判長の宣言を守りて斷然再レースを拒みしなり。

されば半歲の苦心奮鬪何の爲めなりしぞ。堂々敵を破つて搖ぎなき覇業の保持をのみ希ひしに、何たる武運の拙さなりし。我が實力を充分に發揮し得ずして、競漕を終へざるべからざるに至りしは誠に千載の痛恨なり。唯わづかに我が勝利によりて先輩校友の後援に酬ひ自ら慰めんのみ。此の日西にありては我が野球部遠征軍は敵三高と矛を交ゆる十有一合而かも。四A對三にて、敗れたるなり。向陵健兒何の遺憾なりしぞ。我が端艇部せめても勝利によつて、此の恨を遺りぬ。されど最後迄戰ふを得ざりしは、返す〴〵も、痛恨の極なり。

世上稍もすれば、我が選手の實力を云爲し、我が勝利を喜ばざるの風あるは誠に、吾人が煩心事なり。されど俗論また我に何をか加へん、將た今吾人は何をか言はん。唯最後に一言すべきは、ファウル當時敵は我より二シート餘先んじたりと雖もスタートより敵のピッチ三十六七、我がピッチ三十二三なりしを考へ合すれば充分了解し得らるゝなり。之を前日來のレースコース等に徵するも敵は水門迄に力漕をつゞけそのまゝゴールに逃け込まん策戰なりしことは明かなり。されば、敵の急調に對して我は敢て驚かず、悠ゞ迫らず之を追ひしなり。而かも漸次に肉迫し殆ど平行し、更に進んで之を拔かんとするに至つてファウルせしなり。

勝敗固より時の運なり。我等今何をか喋々せん。唯一點の汚れだになき我が部の歷史に俗論是を云爲するを遺憾とするのみ。半歲の奮鬪に血涙を注ぎし七人の戰士の胸中を想うては轉た感慨に堪へざるものあり。

第二回競漕の終りて後、新委員淵脇濟。牛場友彥。高橋益雄。板井秀夫。の四氏就任す。

三月二十七日第五十四回校友會競漕大會擧行さる。

對科レースは第一、第三選手理科優勝。第二選手は文科優勝せり。理科第一選手舵手西村愼四郎。整調板井秀夫。五番加藤瑶。四番松澤一鶴。三番小林喜久男。二番長束憲。舳手羣川潤三。文科第二選手。舵手武井艮介。整調永山秉二郎。五番今富正平。四番日下部彥太。三番飼手武次。二番永野俊雄。舳手渡邊次郎。

組選競漕、また頗る盛にして文理科の各組、互に秘術を盡して相爭へり。文科にありては、第一學期は二ノ組、前年連勝の餘威を以て優勝せしも、第二第三學期は新興の獨法、新たに覇權を握れり。理科にては、各組伯仲して一學期は五ノ組、二學期は四ノ組、夫々優勝し三學期は二ノ組三ノ組同着優勝せり。一方第三回對校選手の奮鬪練習は寸刻の猶豫もなく行はれたり。

即ち三月對科レース終了するや直ちに第三回對校選手の選拔に着手し文科より三年武井艮介、菅波稱事、淵脇濟、二年日下部彥太を拔き、理科より三年加藤瑶、二年板井秀夫、小林喜久雄を入れ、左記の如きメンバーを編成せり。

（舵手）武井艮介（整調）板井秀夫（五番）加藤瑶（四番）日下部彥太（三番）菅波稱事（二番）小林喜久男（舳手）淵脇濟。

而して、マネージャーは牛場友彥、梅田俊雄の二名、その任に就き、五月末より南寮二番に合宿し、六月一日より鄕隆氏指導の下に猛烈なる練習を開始せり。第一學期の試驗終るや、七月一日より四日まで寮に合宿し、日々の苦熱を冒して出艇練習せり。後各自バツク臺を携へて歸鄕し、英氣を養ひ旁ゝ徐ろに、戰に備ふることゝせり。八月七日暑中休暇の第二期練習を始め、十日より二十三日迄十四日間炎々たる烈日の下に、大利根遠漕を敢行せり。燦爛たる全勝の歷史を汚さ

んは、吾人の斷じて採らざる所なり。苦鬪躍進光榮の歴史を固守せし我が部先輩に對して、吾人焉んぞ偷安を貪るべき。炎帝何する者ぞ、かくて我が選手の意氣は寸毫も假借せざりき。九月一日新學期と共に更に猛練習に移りぬ。平日は放課後タンク、ランニングをなし夜は九時半よりバツク臺を引く。土曜日曜には出艇練習す。かくて練習は一日一日と白熱化せり。參加校は、二高三高なり。積年の恨を一擧に晴さんとする三高。機を見て天下に呼號せんとする二高。何れも超人的努力をなして、我が覇權を窺ふ。されど東西の二豎子何者ぞ。吾人向陵男兒の意氣は、斷じて覇業を固守せん。

十月十四日。此の日倫理講堂にて、端艇部選手推薦式擧行せらる。校長の訓辭、生徒監及び先輩の式辭あり。熱誠の言句を以て、激勵せられたり。選手總代武井起ちて先輩校友の應援に報ゐ、死すとも覇權を讓らざらんことを誓へり。十月二十日選手はバツク臺一萬本を敢行せり。是、全國無比の壯擧にして固より言語に絶するの冒險、而かも敢て奇を好んで然るに非ざるなり。先人覇業の跡を死守せんず精神に出づ。如何に悲痛の決心ぞ、此の報一度び校友の耳に至るや、寮生の感激その極に達し南寮二番に應援する者黒山の如し。午後三時半に始めて八時十五分に終る。實に四時間四十五分にわたれり。選手決死の意氣はその眉宇に濃く凄愴の氣向陵を壓す。一萬本バツク臺敢行後練習は益ゝ猛烈となれり。行軍休暇を利用しては十月二十七日より三十一日迄、再び刀水に力を養ひ、その練習益ゝ緊張し來れり。十一月下旬三高不參加の風耳あり。第二學期試驗終了後三日間荒川に遠漕し、戰備いやが上にも固かりき。十二月上旬に至るや、猛練習は最極端に達す。此のとき三高より正式通知あり。選手不揃、財政困難の故を以て參加出來ざる旨を告ぐ。三高遂に來らず、然れども北に強雄二高の我が本城を窺ふあり、而かも敵幸に强しときく。選手が血は躍れり。

十二月二十二日我が選手送別のため全寮晩餐會開かる。校長諸先生先輩校友、熱烈の言を以て我部の大勝を祈られたり。一同感激言ふ所を知らず。唯、死力を盡して戰はんことを、相共に誓へり。此の夜三四日前より身體の具合惡くして臥床せし淵脇醫師診察の結果、肋膜炎を宣せられ、到底競漕に參加する能はざるに至る。皆驚愕し暫し茫然たり。選手一人を

欠く。況んや七人一體のクルーなり、六人の胸中察するに餘りあり。然れども徒に手を拱いて悲しむべき時に非ず。協議の結果早速新選手を入れて練習すべきに決す。二十三日一同打ち連れて根津權現に參詣し、必勝を祈りて歸寮、向陵に於ける最後のタンクをなす。寮生の應援盛なり。三時寮生の白旗に送られて校門を出で、向島合宿に向ふ。あゝ男兒壯圖を抱いて向陵を去らんとす。戰士の思ひ、如何にぞや。墨江の覇搖ぎあらば、何ぞ先人血涙の歴史に對するを得んや。將又一千の校友並びに先輩に何の顏ありや。實に七戰士の胸中は悲壯嚴肅の極なり。

而して、新選手は理科短艇部松澤一鶴に決し、二番小林、舵手となり松澤二番手となれり。二十四日より愈ゝ最後の合宿練習は開かれたり。二十四日夜、上野驛に二高軍を迎ふ。二高選手雪辱の意氣面上に溢れたり。あゝ戰機は熟したるなり。二高は大英斷をなし、二十六日より三十一日迄利根大遠漕を行へり。まことに侮り難き强剛なり。我は連日隅田川にて猛練習をなす。關東の二校互ひに戰備を固くする中に、大正十年も暮れぬ。

大正十一年

新春劈頭北風吹き荒び、戰士の苦鬪言語に絶せり。嚴寒の河上にて、兩軍選手は正月を祝ふこともなく日に日に練技せり。三日より愈レースコースを引く。彼も引けり。而かも我がタイム常に敵にまさる。我が選手必勝の意氣と自信とを以て、連日奮鬪努力せり。墨江戰雲深くこめ殺氣漲る。一月七日遂に第三回大競漕の日は來れり。絶好のレース日和にして、白綠の應援隊墨堤に陣し、幾多の觀衆また、勝負や如何にと注視せり。午前の腕ならしは我が軍調子頗る良好。戰はざるに既に敵を呑むの慨ありき。戰機次第に迫る。午後三時二艇は汽艇に牽かれて出發點に向ふ。白綠の旗、堤上江上に亂れ應援の聲ひゞき渡り、凄壯の氣墨堤を蔽へり。潮は引汐、東北の微風あり。三時二十六分、號砲と共にスタートを切る。敵一コース我は二コースなり。我がブリツツ、シユネル效を奏し二シートを先んず。直ちに三十本力漕をなし、約半艇身

を抜けり。更に水門附近にては、約三分の二艇身をぬけり。共に二十九のピッチなり。水門を過ぎてより敵士手に沿ひ舵を引きたるため兩艇の間離れたり。水門より洗場の間にては敵の艇足頗る良く、次第に我に迫れり。洗場下の石段にて兩艇並行せり。我力漕、拔かせじと努めたりしが如何にせん、敵三十一半のピッチにて却つて我をぬくこと四分の一艇身。我屈せず十本力漕を奮張りしが奏效せず。敵の調子益々良く洗場にては半艇身の差となりたり。言問にては我がピッチ三十四。敵三十三半。而かも一艇身餘先んぜらる。こゝを先途と追へども及ばず。帝大艇庫西端にて約二艇身拔かれたり。我が最後の力漕もあはれ效なく、敵三十三半のピッチにて、ゴールに入れり。敵のタイム六分五十七秒五分ノ四、二艇身の差を以て、我は敗れぬ。

嗚呼遂に成らず。戰前我の技、我の力、よく敵を壓したりしに、今や、二艇身の大差を以て、東北健兒の爲に敗北せり。氣の力足らざりしか、彼の力、事實我を凌駕したりしか、知らず。今將た何を喋々せんや。我が端艇部は覇權を奪取されたるなり。何の悲痛か之に如かん。三十年の歷史も、あはれ、一敗に汚れぬ。明治二十年以來對高商の五レース、對高校の二レース、何れも光榮ある勝利を占め、向陵健兒の意氣は、普く他を慴伏せしめしに。隅田の覇者と自他共に許したりしに、今此の慘敗。思へば、是れ、悲壯の至極なり。選手應援團相抱いて武運非なるを痛歎せり。一萬本のバック臺も、あはれや、何の効もあらざりしか烈日の下苦心慘憺幾日なりしぞ。七雄の胸中、想へば涙せざらんとするも能はざるなり。

さはれ勝敗固より兵家の常なり。敗北に泣きて、將來の大計を忘るゝは向陵男兒の眞骨頂に非ず。青葉城下の敵、いつ迄か我が覇權を奪ひ續け得べき。

因に競漕に於ける兩軍の漕調表左の如し。

	スタート	八百松	水門	竹屋	言問	帝大前	ゴール
一高	三五・五	二八・五	二九	三一・五	三四	三五・五	三六・五
二高	三五	二八・五	二九	三一・五	三三・五	三二・五	三三・五

對校競漕終了後新委員、日下部彦太。永野俊雄。小林喜久男。西川昌の四氏就任す。

一月十一日第五十五回校友會競漕大會擧行せらる。中等學校優勝競漕は横濱商業、五艇身の差にて早稲田實業を破れり。對科レースは、第三選手は非常なる接戰にて約一シートの差にて理科勝つ。第二選手また好個のレースにして文科遂に一艇身半勝てり。第一選手は初めより理科優勢にして四艇身半の差を以て大勝す。

大正十一年度選手

文科第二選手、舵手　手原久一郎。整調服部武雄。五番梯明秀。四番石坂寛一郎。三番大槻文平。二番日野原節三。舳手高岸憲治。

理科第一選手、舵手西村愼四郎。整調翠川潤三。五番吉田稔。四番長束憲。三番岸道三。二番寺田省二。舳手谷一郎。

此の年度、組選競漕また甚だ盛にして、各組の奮鬪見るべきものありき。文科にては獨法斷然優勢にして、三學期を通じて優勝せり。理科にては一ノ組、二ノ組、五ノ組夫々各學期に優勝したり。

校内レースは逐次盛となりしも新春劈頭の慘敗あり。我が端艇部は何とはなき重き氣分に閉ざされたり。起つて來春一月の大競漕に覇業を再成せずんば……。と茲に、對校選手の責任は益ゝ重大となり一千校友の重望を負ひて、向陵漕界の再興を成就すべき選手の選定は愼重に行はれたり。即ち一月の對科レースに鑑みて選手を選び理科より三年西村愼四郎、吉田稔、寺田省二。文科より二年大槻文平、高岸憲治を拔き、更に、第三回大會に整調として奮鬪せし板井秀夫氏の再起を望み、又新たに柔道部より、文乙二年、氏家賢二郎氏を求め陣容を新たにして、覇業の再成に突進することゝなりぬ。前回の四番手日下部彦太氏舵手小林喜久男氏再び起つて奮鬪すべかりしも病氣及び家庭の事情等の爲めに能はず。因つてメンバーを左の如く決定せり。

（舵手）西村愼四郎（整調）板井秀夫（五番）吉田稔（四番）氏家賢二郎（三番）大槻文平（二番）寺田省二（舵手）高岸憲治。

尙、マネージャーは飼手武次、新谷三郎、（初め河合悅三）の二名之に當ることゝなり、第一回對校選手の一人なりし村林一郎氏コーチのもとに練習することゝなりぬ。

六月初めより南蒼二番に合宿し、飽く迄仇敵二高を打ち破つて覇權を奪取せんことを目的とし、悲痛の氣常に選手の胸を蔽ひ、日一日と練習猛烈となれり。平日はタンク並びにバック臺にて技を練り、土曜日曜は出艇練習せり。

七月初旬學期試驗の終了後、五日間隅田川に合宿し、日日の炎熱を冒し只管に腕を鍛へぬ。更に、九日より三日間にわたつて選手一同は中野一九會道場に至り、美會岐修業を行ひたり。是の修業たるや、知る人ぞ知らん。誠に男兒が氣力心力の絶好の試練なり。三日間を通じて食は麥飯生味噌澤庵のみ。毎朝早朝に床を蹴つて直ちに神前にて、約一時間半の祓を行ふ。日に此の祓を八回乃至九回行ふなり。祓の間は集ひせる人々は選手を激勵叱咤し打擲至らざるなし。怒號の聲、打擲の音。心身疲勞して、聲亦出でざるに至るも斷じて安價なる同情は許されず。實にや悲痛壯烈の修業たり、選手一同恙なく三日間の雄行を終へ、相互ひに向後の健康を祝しつゝ、七月十二日一先づ解散せり。

八月十九日再び集合。選手は大利根遠漕の途に上れり。烈日の下、力漕長漕怠らざる戰士の苦衷また察すべきならずや。光榮の歴史も一瑕瑾に汚れてよりは、何とはなき重き空氣の我が部を蔽へり。之を排し之を斥け一擧に覇業を再成せんには尋常凡庸の努力奮鬪のみを以ては如何でか達し得らるべき。我が部、戰士コーチ相共に超人的努力を期して、進まんことを誓へり。炎熱酷暑却つて選手を歡ばしめぬ。二十六日一同上京し、翌日對三高野球試合を應援す。此の日、向陵軍は全く敵を壓迫し、二對零を以て凱歌を擧げたり。野球部既に勝ちぬ。吾人また勝利を得ずして止まんやと選手勇躍意氣軒昂たり。此の頃大雨頻りにして、利根川隅田川增水し、到底練習すべくもあらず。二十八、二十九、兩日は僅かにタンク、バック臺にて腕を撫したりき。三十日、河勢恢復の報を得るや直ちに佐原に至り、大利根の天地に奮鬪し、九月三日無事大遠漕を終へぬ。

第二學期始業と共に新鋭の意氣を以て、再び南蒼二番に合宿し陣營を備ふることゝし、九月五日より練習は開かれたり。競漕の日早や四ヶ月の後なり。必ず覇權を奪取して今春敗北の恨を雪がずんば、我が端艇部は遂に再び起つ能はざるべし。戰士既に決死の覺悟あり、先輩亦來りて激勵叱咤せり。而かも此の度の戰たるや、二高その覇權を固守せんと北に備へを固うし、三高また積年の恨を晴らさんと西に、虎視眈々たり。更に四高六高松高等ひそかに備へを整へて、討つて出でんとするの風聞あり。戰機の熟し來ると共に凄愴の氣益々戰士の胸を壓しぬ。かくて練習は日一日と猛烈となれり。然るに九月初旬より病臥中なりし村林コーチはその病容易に癒えず、十月十二日遂に逝けり。是より先村林コーチ不在の間西垣、龜山の二氏常に來りて指導せられたるが、是より全く村林氏の跡を襲ひて專任コーチの任に當らるゝことゝなれり。憂の雲深く閉ざせどもいつ迄も悲しむべきに非ず。新コーチ指導のもとに更に躍進奮鬪せり。

十月二十四日より一週餘日。行軍休暇を利して、大利根遠漕を敢行せり。此の頃調子頗る良好にして、艇足また甚だよく、戰前二ヶ月にして、すでに敵を呑むの概ありき。

十一月十日倫理講堂にて、選手推薦式擧行され校長の訓辭部長先輩の式辭あり。選手總代西村起つて、今春の敗を雪ぎ墨江上頭再び覇權を確立せんことを誓ふ。

戰機漸く熟するに從ひ戰士の意氣また益ゝ高し、十二月よりは校内タンクに弊害多きを知り出艇並びにバック臺のみにて技を練ることゝせり。此の間マネージャー新谷、選手吉田等家庭に不幸あり。されど愁雲しげき中戰士は涙を呑んで覇業の再成へと只一途に奮闘せり。

十二月下旬授業終了と共に寮を去りて、向島合宿に入る。雄圖空しく潰えて覇權の奪取成らずんばあゝ吾人果して何の面目ありや。向陵原頭敗れては再び見えざらん。選手は固き決心を眉宇に秘めて戰地に入れり。而して四高六高松高等遂に來らず。櫻蜂の二軍のみ西東より來り戰ふ。かくて、柏蜂櫻の三艇入り亂れて河上に技を練り、新聞紙又、其の技の相伯仲せるを傳へ、戰雲は墨江十里を蔽へり。二高昨冬の例に倣つて年末より年頭にかけて、利根遠漕を敢行したり。三高また侮り難き勢を持し墨江上頭猛練習を積めり。之に對する我が軍何ぞ後るゝを得んや。あゝ覇業の再成覇業の再成、酷寒何する者にもあらず。三軍の陣漸く緊張する中に、大正十一年も暮れぬ。

大正十二年

白線赤の三艇、新年を祝ふ暇もなく江上に入り亂れて、戰備を固うす。偵察隊また不斷の活動をつゞけ、墨江の風雲益ゝ急なり。一月六日遂に第四回全國高等學校競漕の日は來りぬ。此の日一高軍の調子最高頂にあり。然かも上潮。三コースなり。二高二コース、三高一コース、勝算我に歴々たるものあり。四時三校選手は應援隊の喚呼に送られて、出發點に向ふ。白線赤の旗堤上江上に閃き殺氣墨江に滿ちたり。午後四時十五分三艇所定の位置に就き出發の號砲今かと待てり。然るに此の時上潮の最中にして、上航する船頗る多く、爲めに水路の整理成らずして、容易に競漕を始むる能はず。その中

黄昏すでに四邊を蔽ひ、水路の整理益々困難となり、競漕は遂に中止の已むなきに至れり。我が選手は獨りレースコースを引きて意氣を擧ぐ。

思ふに此の日の責任は、全部大學當事者に在り。一月六日を期して練習せる各高校選手の苦心慘憺に對して余りに無責任なる當事者なり。されど、今將た何をか言はん。レースの翌七日と決定せる以上、吾人は夫れに備へざるべからず。かくして吾が選手はレースコースを引きて後艇庫樓上にてバック臺百本を引き、意氣軒昂翌七日の決戰を待てり。

明くれば七日。風全く死して、絶好のレース日和なり。三校應援團早朝より墨堤に陣し、觀衆また此の決戰や如何にと早くより詰めかけ、凄愴胸を壓す。此の日、コースは、抽籤の結果一高一、二高二、三高三、となり、一高まことに不利となれり。されどすべては勝利にあり。決死の奮闘あるのみと我が陣營は言ひ知れざる悲痛の色に包まれぬ。

午後三時五十七分一發の號砲と共に三艇はスタートを切れり。一高滑り出しよし。二高之につゞき一、二、三、の順序にて進む。暫くして、二高力漕效を奏し、枕橋下にて、我を二シート拔けり。我かくてはならじと、之を追ふ。三高は我に半艇身おくる。水門附近に至るや、二高は其のコースの有利なるに乘じ、益ゝ艇脚を速めたり。一高艇首岸に沿ひ、コースは愈ゝ不利となり二高との差增大せり。三高は此の機乘ずべしとなし、力漕我に迫り渡場にては二高と我の差一艇身三高は我におくるゝ半艇身なり。然るにスワンのカーヴに至る頃三高、奮然力漕をつづけ我に並行せり。あゝ我が選手は死を決せり。早くもラストヘビーを出して、力漕又力漕、前に進む二高を追ひしも及ばず。艇足徒らに進まずあはれや三高にも拔かれぬ。二高は悠々力漕をつゞけ、三艇身の大差を以て先づゴールに入り、三高また我を半艇身の後に殘して之につゞく。一高遂に慘敗したり。二高のタイム、五分五十秒。

報復の志もろくも潰ゆ。半歳の嘗膽苦心、また徒らに空しく去りぬ。東北京洛の二豎子の墨堤を蹂躙するを見ては一同只無念の泪にくるゝのみなりき。我が力のかく迄に弱小なりしが。我が意氣のかく迄に弱薄なりしか。思へば唯悲嘆の涙

のみ。而かも是れ全國高等學校對校競漕の最後なり。第一回は大勝よく他を慴伏せしめて永年の覇權些の搖ぎもなかりしに第二回は惜しくも我が技を充分に示す能はず。第三第四回は二高の爲に覇權を奪はれ、茲に我が先人覇業の跡は潰滅せるかの感ありき。何の悲しみか之に如かん。端艇部死活の危機に直面して一同は默して、唯我が武運の非をなげくのみなりき。

されど徒なる悲嘆にのみくれて、爲す所を知らざるは我が端艇部の眞の面目にあらず。一方固定席艇の漸く舊時代の殘骸たらんとするを知り、滑席艇を採用して一高端艇部の面目を一新せんとの議いつしか、先輩部員の間に盛となれり。

一月十二日第五十六回校友會競漕大會擧行せらる。對科レースは、第一第三選手は理科の占むる所となり第二選手は文科優勝せり。理科第一選手。舵手加藤次郎。整調谷一郎。五番岸道三。四番黒田幸二。三番小宅習吉。二番佐藤金治。舳手小林肇。文科第二選手。舵手梯明秀。整調渡邊次郎。五番原義房。四番松田竹三郎。三番本多龍雄。二番加藤虎之助。舳手角田忠夫。

對科レース終了後新委員三宅恕夫、梯明秀、松澤一鶴。柳田直輔の四氏就任す。

而して再度の敗北によりて、先人覇業の潰滅せるかの感ありしが、我が部は徒らに悲嘆にのみ暮るべきに非ざるを知り且つ、帝大主催全國高等學校對校競漕も終了し、旁〻固定席がすでに舊時代の殘骸たらんとする趨勢を知り茲に四月斷然スライデイングシステムを採用せり。固定席艇レースに於て、慘敗遂に受けざるを得ざるに至りし絶大の恥辱を秋季に於ける都下十大學對抗競漕に於ける勝利によりて、雪拭し去らんと企てたり。即ち十大學對抗競漕に於ける覇權の奪取を目的とし、或は大利根に遠漕を試み或はトラックに健脚を養ひ只管に猛練習を重ねたり。時偶々第三高等學校水上部より滑席艇にて定期對抗競漕を行はんとの挑戰狀來れり。敵はこれ全國高等學校大會における好敵手なりし者、而かも關西に於ける高校の重鎭なり。且、十大學對抗競漕は帝大商大等との關係ありて、一高の出場に就きては種々困難なる事情ありし

折柄なれば、我が部は先輩等とも熟議の末三高よりの挑戰を快諾し、十大學競漕參加を見合はせ對三高對校競漕を行ふことに決定せり。即ち三高と種々交渉の結果左の如き規約を締結せり。

第壹高等學校
第參高等學校　端艇競漕規約

一、競漕ハ必ズ毎年行フ。
一、競漕ハ定期八月末ニ行フ。
一、競漕場ハ隅田川及瀬田川トシ一回毎ニ交替ス。
一、競路制定ハ擧行地ノ學校ニ一任シ會議ノ上之ヲ決定ス。
一、競路ノ距離ハ貳哩トス、但シ標準ヲ示スモノナリ。
一、使用艇ノ形式ハ滑席八擢艇ト定ムル外何等ノ制限ヲ加ヘズ。
一、競漕ノ形式ハ高等學校會議ノ申合セニヨル對校試合トス。
一、練習ニ關シテハ絶對自由トス。
一、競漕ハ他ノ學校若シクハ團體ノ主催ノ下ニテハ之ヲ行ハズ、但シ後援ハ此ノ限ニ非ズ。
一、競漕ニ關スル役員ハ兩校先輩ニ依賴ス、但シ審判長ハ兩部責任協議ノ上之ヲ定ム。
一、審判ハ第一高等學校對第三高等學校端艇競漕審判規定ニ據ル。
一、競漕ニ關スル設備費ハ擧行地ノ學校ソノ全額ヲ負擔ス、但シ當日役員ノ費用ハ兩部均分トス。
一、招待祭ハ兩部ノ名ヲ以テ發行シ枚數ノ分配ハ擧行地側六分他ハ四分トス、總數ハ兩部會議ノ上之ヲ決定ス。

而して本年は日時切迫せる故　定期八月には行はず、十月行軍の休暇を利用し、瀬田川に於て第一回對校競漕を試むこ

とに決定せり。選手は、種々變更の結果舵手文甲三加賀山之雄。整調理甲三加藤次郎、七番理甲三吉田稔。六番理乙二黒田幸二。五番文丙三安田宗次。四番理乙一小島策郎。三番文乙二本多龍雄。二番理乙一佐藤金治。舳手理甲二、小林肇。と決定し、漸次に猛練習を重ねたり。七月下旬隅田川に合宿し先輩亦炎熱を冒し來りて、激勵叱咤せられたり。かくて八月下旬瀬田川に夏休最後の練習を行ひ技益々進み野球部三勝の報を得てよりは、戰士の意氣愈高く、戰前二ケ月にして、既に敵地を征服せるの概ありき。然るに不幸彼の大震災の爲め、本年度レースは中止の已むなきに至り、吾人は徒らに鐵腕を撫して、徐ろに來るべき年の計を致すことゝなれり。

九月一日所謂關東の大震火災あり。帝大商大等の艇庫は、灰燼に歸せしも、我が艇庫は不思議に災厄を免れたり。されど厩橋艇庫附近は、全部燒滅しその區劃整理に就きて、一高舊艇庫の敷地云々の問題起れり。是は後一高駒場移轉の議の決定すると共に起りし艇庫移轉問題と、相關聯して重要なる問題となれり。震災後一ケ年余の間復興局、東京市等との間に種々交渉を重ねたるも、解決の曙光は未だ見えざるなり。此の事に關する記錄は、後艇庫問題の解決の曉に詳述すべきを以て暫く、是が記述を省略す。

對校レースは中止されたれども校内競漕は頗る盛にして、獨り、隅田川を征服せり。都下十大學競漕も中止され、帝大商大等は艇を失ひし折柄とて、我が校の艇影常に墨江を獨占せり。此の年度組選競漕は頗る興味ある各組勢力の消長を來し文科にては、連勝の獨法昨の威なく、一學期は三ノ組。二學期は二ノ組優勝し、獨法は三學期に、覇業を再成せり。理科にては二ノ組勃興し、一學期は五ノ組優勝せしが、二三學期は二ノ組連勝せり。

對科レースは例年一月初旬に行ひしも今回は翌年三月二十四日に之を行ふことゝし、文理兩科の選手は十一月頃より練習を開始し冬期休暇には夫々大利根遠漕を行へり。

昨年迄は年末毎に殺氣漲り、風雲急なりし墨江も本年は漕艇界行事の變更と共に、河上極めて平穏にして、唯幾多の震

火罹災者の生靈を包んで悲しき響を流しつゝ、かくて大正十二年は逝きぬ。

大正十三年

二月中旬、新委員原義房。三浦元。(初め松田竹三郎。七月交代)岸道三。曾根文二。の四氏就任す。

三日二十四日、第五十七回校友會競漕大會擧行。對料レースは第一、第二、第三選手共、理科優勝す。理科第一選手舵手吉田稔。整調佐藤金治。五番小山朝治。四番小島策郎。三番木村昇。二番西村太郎。舳手小林肇。理科第二選手舵手曾根文二。整調三木威勇治。五番長澤武夫。四番與田豐。三番前田興三。二番平賀稔。舳手成島俊一郎。

一方對三高對校競漕は昨年レース中止の爲め、本年は其の第一回を行ふべく、而して期日は八月二十四日、場所は瀬田川なることに確定せり。因りて、我が部は之に備へんとして、三月對科レースの終了すると共に直ちに對校選手選定に努めたり。先づ文理兩科選手混合にて、練習を開始し、大利根の遠漕の後對校選手を決定することとし、四月十日より練習を始め十四日より十九日迄約一週間大利根遠漕を敢行せり。而して、其の結果第一回對三高競漕選手は左の如く決定せり。

舵手、理乙二、黒田幸二。整調、理甲三、小林肇。七番、文乙三、本多龍雄。六番、理乙二、小嶋策郎(初め岸道三、七月交代)。五番、理甲二、木村昇。四番、文甲二、馬場要太郎。三番、理甲二、西村孝太郎。二番、理乙二、佐藤金治。舳手。文乙三、原義房。

マネージャーは理甲三、曾根文二。理乙二、平賀稔の兩名其の任に當り、尙理甲三、吉田稔。同寺田省二の兩氏は水手兼補欠選手となり、髙川潤三氏指導のもとに、陣容を新にして敵三高に當らんとせり。

四月二十一日より、選手一同南寮二番に合宿練習を開始し、先づ四月中は例年の如く固定席艇の練習をなせり。五月一

日より、滑席艇の練習に移り、平日と雖も能ふ限り出艇し、出艇後と雖も拔苦臺を敢行し、出艇拔苦臺兩者相併せて練習し、戰備いやが上にも固くせり。されど五月二十三日に至り、岸六番手病あり。二十四日大學病院に入る。選手すでに一人を欠けり。されど三高に對する男兒の宣言斷じて曲ぐべからず。殘る七人の漕手にて、一層の猛練習をなせり。而して出艇の際は岸の快癒する迄、理乙二小島策郎代つて、練習することゝなれり。六月三日夜スライディングバック臺一千本を引く。端艇部死活の機、選手の決意既に悲痛なるものあり。相勵まし合ふ戰士のかけ聲南寮の廊下を壓しぬ。

六月六日嚶鳴堂に於て、第一學期全寮茶話會催され、席上對校選手推薦式行はる。選手一同斷じて、三高を征服し墨江三十年の覇業再成の緒を成就せんことを誓へり。而して此の間に於ける練習は最も猛烈なる者あり。

六月十一日より三日間、選手一同中野なる一九會道場にて美會岐修業をなす。先輩多く來り集ひ、相倚り相扶けて、以て修業を完了せり。十四日は、美會岐慰勞にて休養し十五日より再び練習を開始す。而して十六日夜一同豫定の如き練習を終へて後、結束會を催し始めて一夕の歡を得、その夜、全寮ストームを行ふ。敢て他意ありしには非ざしが亂暴狼藉なりとて指彈され、十九日朝突如として「端艇部對校選手推薦ヲ取消スノ件」が其の夜の緊急總代會に寮委員より提出さることを知れり。一同餘りの突然に驚けり。吾人は暴行に對しては飽く迄も之を不問に附する者にも非ず、又敢て傲慢自ら省みざる者にも非ざりしが、寮委員の餘りに吾等を無視せる態度に今更乍ら驚けり。されど戰機刻々に迫る。十九日放課後も出艇し歸寮後もバック臺を引く。時に會根平賀兩マネージャーは端艇部後援會の用件にて西下中なりしかば其の夜の總代會には出席せず、而して吾人は遂に對校選手推薦を取消されぬ。

然れども選手は依然對校勝負の氣持ちを以て、練習をつゞけたり。三高に對して眞劍勝負を宣言せる以上、斷じて退くべきにあらず。彼の刄に對して、吾人は突然刀を引くべからず。戰士一同悲愴の意氣を以て練習せり、二十日の晩餐會にも出席せず、只管に練習せり。二十四日より、岸病癒えて練習に加はる。久保先輩此の間にありて、種々ストームの件に就き、寮委員等と折衝、圓滿解決の道を講ぜらる。六月三十日より學期試驗始まりしが、試驗中と雖も練習の度を緩めず、而かも、此の間に於ける整調七番の苦心は、言語に絕せり。七月七日、試驗終るや、南北寮間の庭にて向陵最後のバック臺を引く、選手の意氣軒昂たり。同日總代會開かれ、選手一同再び對校選手に推薦され、マネージャー會根平賀一切の責任を負うて退き、文甲三、三浦元。理甲二、木村二郎の兩名之に代る。再び總代會を開きて、再推薦の事に至る迄の有志諸君マネージャー並びに先輩等の苦心は吾が部の感謝措く能はざる所なり。七月八日より十六日迄、艇庫樓上に合宿し炎熱を冒して來る先輩また多く、戰士の技益々進みレースコースのタイム、九分五十九秒十分ノ九てふ、新記錄を出し、堂々の意氣は既に敵を呑むの概ありき。此の合宿後、岸病再發し盲腸炎を宣せられ、到底競漕に參加すべくもあらず。よつて小島起つて、岸の後をつぎ、對三高戰に出場することゝなれり。合宿を終へて一同一先づ解散す。舳手原、此の間に於て、クルウ一同の集ひのもとに、七月廿二日より三日間美會岐修業をなせり。

八月一日、第二期艇庫樓上合宿に入る。戰機刻々に近迫し、選手の練習また日一日と、猛烈の度を加へたり。八月八日墨堤最後の練習を終へて、その夜、西下す。此の日谷山部長來つて、訓辭せられたり。戰士一同、必ず敵三高を打敗らんことを期しぬ。若し、敗るれば吾人果して何の顏ありや。墨江再敗の雪辱、且は又、六月事件に對する手前我が端艇部にして敗るゝあらば、斷じて中外に對する能はざるなり。墨江上頭敗れては再び見えざらんと、選手は固く誓へり。同夜八時十分、杉幹事、龜山先輩野球部諸君其の他有志の見送りをうけて帝都を去りぬ。嗚呼、吾人は遂に戰地に乘り込むなり。

九日午前七時すぎ大津驛に着き三高選手の出迎へを受け、それより石山の合宿所に行く。選手一同水氣の爲に手足膨れ痛く疲勞す。暫時休息の後午後、レース艇を出だす。艇は三高の艇にて、一高艇とは全然型を異にし、漕手慣れずして苦痛一方ならず。二週の後に迫れる競漕を想うては、唯奮躍の一途を決意するのみなりき。夜三高選手の招待にて、兩軍挨

拶を交し快戰を誓ふ。十日より愈最後の合宿練習にうつれり、東西兩大學のレースも一高三高と同日に行はるべければ、四艇の瀬田川上に往復する樣誠に壯觀なり。而して之をめぐりて、堤上を馳驅する偵察隊の活動また頗る猛烈にして、石山の空氣逐次に緊張し來れり。

先輩校友の來石また多くして、炎熱を冒して奮闘する戰士を激勵す。「戰はん哉」の歌と共に殺氣いやましに石山を包めり。然れども悲しむべし、我が選手の中脚氣の爲めに冒される者二三あり。七番手殊に甚だし。加之時は是盛夏八月なり。苦痛察するに餘りありしも敵三高の奮闘を見ては、一刻も安んずべからず。且、十三日初めてレースコースを引きし時は彼我殆ど同タイムなりしも、それより以後は三高のタイム常に我を凌ぎその調子又日增しに、良好なりしかば我が選手は寸毫も安んぜず、涙を呑んで苦心慘憺薄暮に至る迄練習せり。二十一日部長谷山生徒監病を押して來石され、日々應援艇に乘じて激勵せられたり。先輩亦交ゝ叱咤鞭勵す。然かも連日レースコースのタイム、三高常に一高を凌駕す。我が陣中不安の色濃し、然れどもいつ迄か吾人の奮闘の酬はれざることあらん。二十二日夕暮より我が苦心の跡歴々と現はれ艇足俄かに恢復し、二十三日最後のレースコースに於ては一高斷然三高に勝れり、勝利の意戰士の胸を躍らしめぬ。かくて彼此兩軍の陣營緊張せる中に八月二十四日、愈第一回、一高對三高對校競漕の日は來りぬ。

此の日風全くなく絶好の競漕日和なり。我が調子頗る良し。敵亦侮り難き艇足を有す。赤旗數旒兩岸に靡き敵應援團の數八百と號す。敵陣より響く鼓々の音亦敵の侮り難きを示すが如し。されど我應援團もさる者俄か仕立の大旗を立てて敵陣に對す。戰機すでに熟しぬ。午後三時選手は必勝の決意固く、艇庫に向ひ出發せり。あゝ二歳に亘る敗衂の涙、亦總代會に於ける勝利の誓。想へば斷じて勝たざるべからず。戰士の心雄々しくも又涙ぐましき限りなり。

午後四時三十分、兩艇ステイックボートにつく。一歳の臥薪、三歳の嘗膽、又數分の後に決せんとす。一高、石山コース。三高、瀬田コースなり。晴天無風。距離は唐橋下より下航一哩八分ノ五なり。四時四十六分一發の號砲と共にスタートは切られぬ。

我スタート調子揃はず。敵の滑出し頗るよく二十米にして我を拔く三分ノ一艇身。三高艇庫前にては我セットルダウンをなせしに、敵依然として急調をつゞけ一歩も讓らず、艇差は半艇身に增加せり。かくて、敵が稍その調子を下せるに及び、我はピッチを上げて之に肉薄し艇差稍縮まりそのまゝ鶯谷カーブを廻る。玆に於て、我猛然とスパーティングに移り一擧に敵を壓せんとせり。然るに悲しき哉、此のとき四番手のソールピン折れ大ロールリングを起し艇足俄かに止まれり。而かも四番手のオールは全然用をなす能はざるに至る、四番手の苦哀察すべし。此のときスタートより約二分後なり。敵此の機に乘じ力漕し艇差一艇身となれり。我既に七漕手となる。されど悠々迫らず、敵を追ふ。四番手亦苦心慘憺調子を揃へぬ。而して、敵はそのカレントの利なるに乘じて更に力漕し艇差は一艇身三分の二に增加し、そのまゝ柳屋カーブにかゝれり。あゝ艇差はすでに二艇身なり、而かも我は七漕手。浮沈の境にある端艇部は今や一大危機に遭遇せり。然れども我が選手は既に死を決せり。俄然此のカーブの、我に利なるを利用せる我が艇はピッチを上げて敵に肉薄し、柳屋別邸に至れば艇差は一艇身となりそのまゝストレートコースに入れり。我戰士の決死の勇玆に現る。策戰悉く齟齬せりと雖も今將た何をか言はん、敗るれば吾が端艇部を如何にせん、更に選手は何の顏あつて中外に對せん。端艇部死活の運命を擔へる選手は一本一本に決死の力をこめぬ。而かもその一本一本敵に迫り行く力强き艇足、誰かそこに決死の力を見ざる。かくて艇差は漸次に減じ、ゴール前約百米にて半艇身となる。我ピッチを三六半に上げ全力を傾注して最後の奮張りをなせば敵既に疲勞の色ありピッチ上らず、ゴール前五十米にて並行し、漸次敵を拔き遂に三分の二艇身の差にて、一高先づゴールに入る。タイム九分五十一秒五分の一。

百日の苦節成つて我端艇部は完全に三高を屠れり。何たる痛快事ぞ。「嗚呼向陵に正氣あり」の歌、石山を壓し墨江三十年の覇業再成の基は瀬田川の一戰にて確立されぬ。選手校友相擁して歡呼す。

事茲に至る迄には誠に筆絶の苦心ありしなり。殊に六月事件以後に於ける有志諸君の御盡力は、先輩コーチの指導と相俟つて我端艇部の大勝に與つて力大なり。

因みに競漕に於ける兩艇のビツチ、左の如し。

		スタート	艇庫前	鶯谷	三ケ月堂	柳屋	出發後六分	同七分	同八分	同九分
漕調表	一高	四五・五	三一・五	三二・五	三〇・	三〇・	三一・六	三二・六	三四・	三六・五
	三高	四七・五	四〇・五	三七・	三二・九	三三・三	三三・三	三五・七	三三・三	三三・三

九月、對校選手一同、寮委員と會見し、かの六月事件の終局を敢て公にす。

記してその勞を謝し併せて六月事件は圓滿解決せり。久保、龜山兩先輩の盡力に與る事多し、茲に附

十月八日、第五十八回校友會競漕大會雨の中に擧行さる。對科レースは第三選手は文科優勝し、第二第一選手は理科勝つ。理科第一選手舵手松岡瑞雄。整調長澤武夫。五番小山朝治。四番岡田光衛。三番奥田豐。二番西村太郎。舳手中内義雄。理科第二選手舵手成島俊一郎。整調杉原禮彦。五番寺澤健一。四番前田與三。三番德永玄理。二番井上惺三郎。舳手篠原武司。

組選競漕また興味ある各組勢力の消長を示し、文科にありては、第一第三學期は佛法優勝し、第二學期は三の組勝てり。理科にては一の組優勢にして第二第三學期を通じて優勝し、第一學期は三の組勝利を占めたり。

而して、一方第二回對三高對校選手の選定は早くより行はれ、十月對科レースの終ると共に、新選手を定めたり。前回選手たりし、黑田幸二(舵手)小島策郎(六番)木村昇(五番)馬場要太郎(四番)西村孝太郎(三番)佐藤金治(二番)の六名再び起つて奮闘すべかりしも家庭の事情、病氣等の爲めに能はず、第二回選手は全部新選手となれり。即ち文科より二年保科禮一、林俊三、一年長谷川周重、飯塚壽夫、理科より二年、成島俊一郎、小山朝治、岡田光衛、奥田豐、前田與三を拔き、

十一月初旬一同南寮二番に合宿し既に練習を開始せり。

尙佐藤金治、小長谷透、宮本茂業、小澤恒久の四名はマネージャーとして、競漕に關する萬端の事務を執ることゝなれり。十二月十一日より五日間選手一同中野なる一九會道場にて美曾岐修業をなし、更に冬期休暇を利して、二十八日より一週餘日大利根に遠漕し只管に備を固くせり。

大正十三年は端艇部覇權確立の事成りし年なり。再敗の雪辱成つて來るべき雄飛の基を成せるの年なり。知らず、十四年以降に於ける我部の活躍は果して如何。

大正十四年

二月中旬、新委員保科禮一、小長谷透、佐藤金治、小山朝治の四名、就任す。

而して、對校選手の練習は、戰前半歲にして既に刻一刻と猛烈の度を加へんとす。

最近五ケ年間は我が部の活躍時代なり。帝大主催全國高等學校對校競漕に於ては遂に龍頭蛇尾の感なき能はず。先人覇業の跡潰滅せるかの恨ありしも對三高定期對校試合第一戰に於ける大勝は、滑席艇採用後に於ての我が部飛躍の基礎をなすもの、希くは覇權斷じて失はるゝこと勿れ。

更に躍進十大學對抗試合出場の日や如何に、想へば我が部の將來はまことに洋々たる者あり。後來の士、夫れ努めよや。

尙最後に端艇部後援會に就きて一言すべきあり。該後援會は大正十一年頃より企劃され、大正十二年に至り稍其の成立の緒に就きたりしが、かの大震災の爲めに不幸中絶せり。翌十三年に至つて、再びその事業進められしも、今尙基礎薄弱にして該後援會の基礎は後日を俟つて確立すべし。

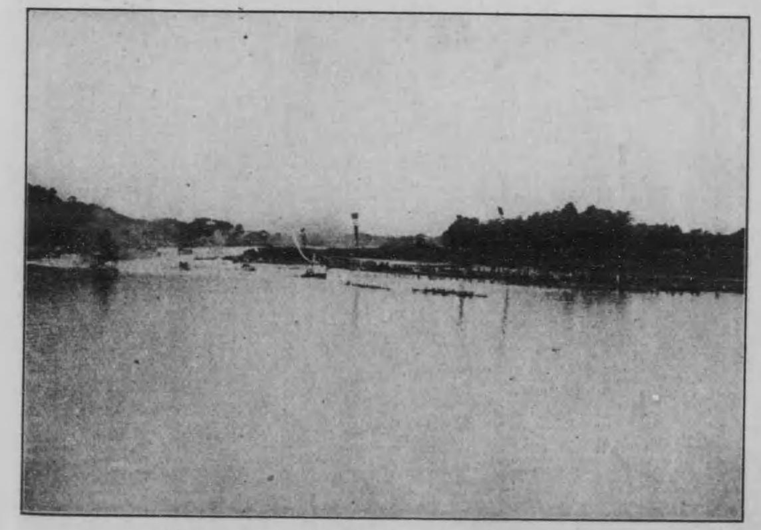
艇庫問題と同じく該後援會に就きても、他日事落着の時に至つて詳述すべければ、茲に其の記錄は省略す。即ち一言以

て記錄省略に關する責任を明かにするものなり。（大正九年度以降原義房記）

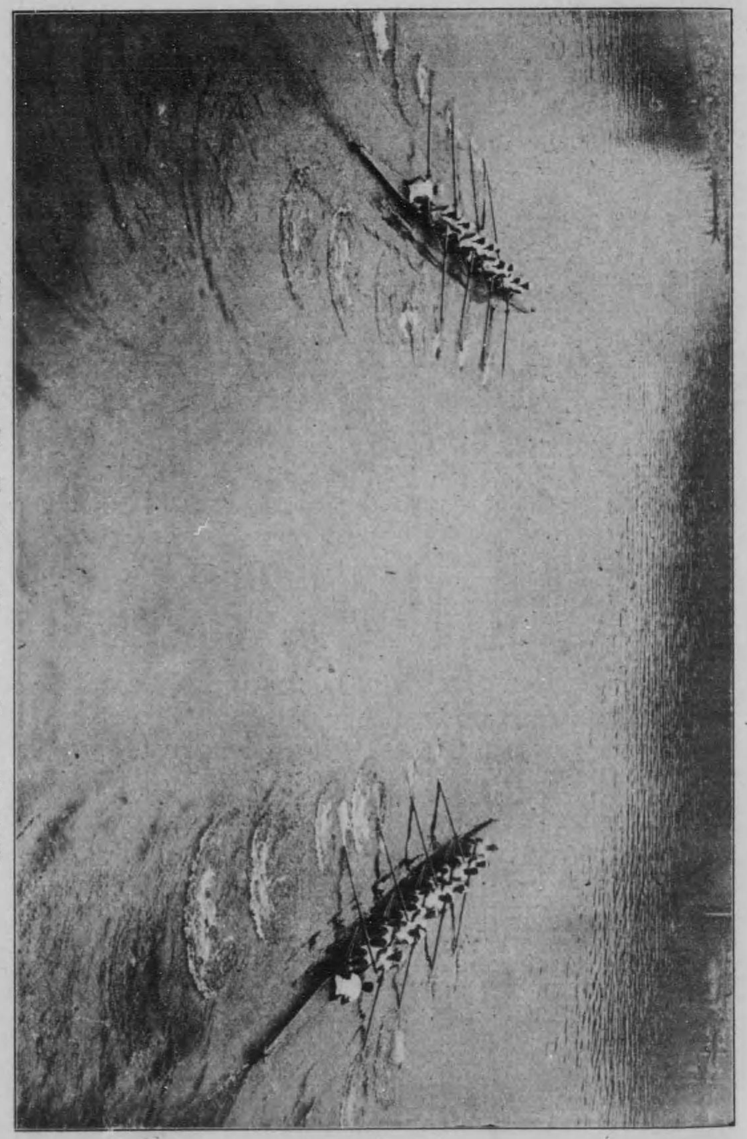
艇庫

短艇競漕

臺クラバー

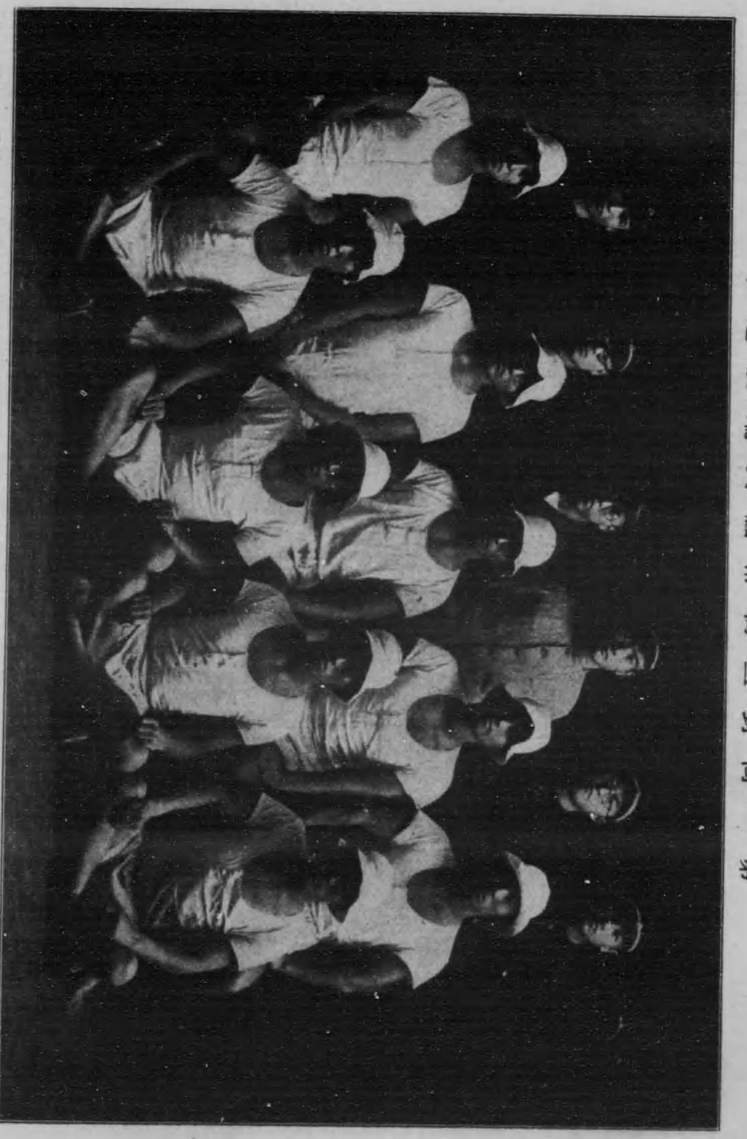


瀬田川ニ於ケル三高戰（大正十三年夏）



瀬田川ニ於ケル三高戰（大正十三年夏）

手選艇端式底滑高三對回一第



元　浦三　員委　二文　根曾　員委　三潤川翠　チーコ　三道　岸　將主　稔　賀平　員委　邸二村木　員委（列　後）
　　櫻　林小　潤壓　雄能多木　番七　二帝田黒　手舵　邸策島小　番六　昇　村木　番五（列　中）
　　邸太愛嬉馬　番　四　邸太孝村四　番　三　治金　藤佐　番　二　乃　義　原　手　軸（列　前）

水泳部史

水泳部部史

末弘嚴太郎

一　我が水泳部の創立

我が一高水泳部創設の事は明治二十七年夏日清國際の風雲急にして戰端將に滿韓の野に啓かれむとするの時にあり。是より先、校友の間游泳の必要を說くの士漸く多く水泳部創設の議有志の間に唱へらるゝもの再三にして止らざりしが機未だ熟せずして空しく此時に到れり。然れども當時校友にして斯技に長ずるの士少からず、頻に水泳部の必要を說いて已まず、加之教授諸先生の間に於ても此議に贊するの士漸く多きを致せるにより謀議遂に熟して五月弘く此事を校友の間に發表し以て大に部員を募れり。然るに此事如何に校友の歡迎する所となりしかは草創第一年にして既に部員百二十餘名の參加を見たるによりても知らるべく、殊に鹽谷先生の如きは我が部の爲めに「游泳を論ず」なる一文を草して校友會雜誌紙上に發表せられ「余は夙に本校に游泳科の設けあらむ事を希望せしに近日遂に評議に上り地を撰び教師を聘するに至れるを見て私かに宿願の達せるを喜ぶ」と述べられたるが如き、又七月朔日開場の式を行ふに當り時の校長心得久原先生等の來臨ありしが如き、以て當時如何に我が部創設の事が一般に重ぜられたるかを知るに足らむ。

玆に於て吾部則ち當時東都游泳界の雄鎭たる神傳流教場日本游泳協會に囑して教師村山正臣先生を聘し、又一方各地を銓衡探索して水泳場開設の地を求めたるが、遂に神奈川縣三浦郡浦賀町字大津の適地なるを聞き、六月村山先生本校職員と共に其地に至り、水の深淺海潮の緩急を察し土地の衞生風俗の事を考へて凡て其適當なるを知り、地を選定して此を游泳

場設置の場と爲し部員宿泊の屋舍を定めて歸る。

我一高水泳部創立の事は即ちかくの如くにして成れり。爾來時を經る事二十年其間多少の變遷盛衰之なきにあらずと雖も、能く我部をして今日の盛況に至らしめたる所以のものは蓋し草創の人深く意を根基の確立に致したるに因れり。

二　大津時代

大津の地は横須賀浦賀兩街の中間に位し風俗醇朴にして人情淡白、山秀で水清くして風光誠に明媚、右手には遙に觀音崎諸砲臺の翠巒を臨み左手には遠く横須賀港口を眺め、加之海上一里猿島の翠綠蓊欝として水光蕩漾の間に浮ぶ、其狀恰も神仙傳へ聞く蓬萊仙山の如し。吾水泳部此地に居る事四星霜、其期間決して長きにあらずと雖も而かも我部出生の地永く記して之を忘る可らざるなり。人之を稱して大津時代と云ふ。

明治二十七年

此年未だ我部の教導方針確立せず、參集し來る部員其從來學ぶ所の流派頗る區々たるものありしも、教師村山先生深く流派統一の必要なるを想ひ旁々本校の内訓に基きて專ら神傳流を教示せられたるに「數旬にして一同殆ど神傳流に歸したるものゝ如し」とは當時先生の自ら報告せられたる所なり。

此年部員の宿泊せるは信樂寺、貞昌寺、芋屋、下駄屋、會所の五舍にして本部を芋屋に置けり。

七月一日開場式を擧行し久原校長心得、鹽谷先生等の遠く觀を枉げて來場せらるゝあり、式後部員の伎倆を試み等級を分つて甲乙丙の三級とす。但し後其不便なるを感じ之を改めて現時の五級制となせり。

夫れより六旬の間村山先生助手諸氏と力を併せて技術の教導に力められしかば成績頗る見る可きものあり。而して二町

二十町二十五町一哩半の四遠泳の後、八月二十五日を以て猿島廻游の壯擧を決行す。抑も猿島の地たる其位置東京灣口を去る事遠からず、爲めに暗潮常に狂奔して尋常の士の容易に近づく可らざる所、當時大津の老翁尚唯僅に猿島迄泳ぎ至りし者一名あるを記するのみ、之を廻游すといふが如きは蓋し同地漁夫の夢想だもせざりし所なりき。然れども意氣天を衝く一高健兒の赴く所千古の難關は見事に破れぬ。午前九時出發して午後二時二十分歸着海上六哩時を費すもの正に五時間二十分なり。歸路西南の風浪游者を苦しむる事限なかりしも、初め十六名の參加者中左記九名の全泳者を見る事を得たり。

板坂智吉、加福豐次、津田素彦、山内確三郎、井原外助、岡部四郎、大越幸五郎、谷直諒、鹽谷瀛。

爾來同地の漁民吾部員を尊重する事舊に倍し游泳術の效果洵に恐るべきものあるを知れりといふ。

此年前後來津せる部員を合算すれば正に百二十三名。大沼、米田の兩先生を監督として委員石渡慶二郎、福井松雄、板坂智吉庶務萬端の任に當り木元長太郎、加瀨禹三、入江一雄、仲野秀治、高橋雄次郎、加福豐次、福井松雄、岡松匡四郎、永井誠也、板坂智吉の諸助手村山先生を輔けて部員訓導の任に當れり。

尚久原校長心得を初め鹽谷、鈴木、今村、松田、織田、長澤の諸教授屢々來津して一同を奬勵せられたり。

明治二十八年

抑も水泳部成績の如何は固より人爲の致す所亦多大なりと雖も、天候の能く幸するものなくむば遂に如何ともするなきなり。此年部員總數百四十七名、上に村山先生の眞摯なる教導あり、之を輔くるに高橋雄次郎、木元長太郎、井上匡四郎、板坂智吉、加福豐次、永井誠也、村岡坦、入江一雄の八助手ありしと雖も天候頗る不良にして七月中日光を見たるは僅に四五回、游泳を試みたるの日數十六日に過ぎず、七月二十一日漸くに擧行し得たる田戸遠泳も海水寒冷にして僅に八名の全泳者を見たるに過ぎざりき。

八月に入りてより天候稍恢復の徴ありしも水尚冷にして長く水中にあるに適せず、爲めに部員の技術進歩するもの誠に遲々たり。依つて七日委員助手相會して(一)天候從來の如くならば十五日限りにて閉場する事(二)天候順に復すれば二十五日迄延期し且大遠泳を施行する事(三)遠泳は横須賀口勝力岬より猿島沖を横斷し旗山砲臺附近に着する事等を決議し以て前途應急の策を立てたり。越えて八月十五日松田、鈴木、織田、小島、山口、黑田の諸先生の來場を機として拔手雁行、競泳、西瓜取等を行ひ終つて偶々有志者十六名あり沖に向つて遠泳し遂に意を決して猿島を廻游するの志を立てたるも逆潮に妨げられて能はず二俣礁の標柱を一周して歸る。時を費す四時間三十分全泳者八名なりき。

八月二十日は大遠泳を擧行するの豫定なりき、然れども十九日來の暴風雨は遂に部員最後の志をも成さしめざりき。二十五日遂に涙を振つて閉場の式を擧ぐ。

依つて歸京後九月五日向島言問より品川遠泳を擧行し退潮に乘じ僅に三時間二十分にして臺場の邊に達す。而して一同尚元氣旺盛更に猪進して遠く沖合なる某軍艦を訪問せむ事を企てしも村山先生無謀を戒めて遂に之を止む。參加者二十九名、全泳者二十三名なり。歸路は船にて歸るべきの豫定なりしが鹽谷先生率先して入水し給へるにより一同亦之に鼓舞せられて英氣復發し相繼いで水に入り時を費すもの三時間半厩橋畔に着す。往復十一哩餘、全泳者野口耕一、斯波孝四郎、藤野修吉、眞島利行、後藤市藏、津田素彦、岡部四郎、鹽谷先生、鹽谷溫の九名を得たり。

尚今茲に水泳部に就き特に記すべき事あり。當時横須賀在勤の海軍大尉廣瀨武夫氏此年春季ボートレースの審判官として我校に至られしより以來我校剛健の氣風を愛して共に語るべしと爲し水泳部開設中屢々我部を訪問せられ、或時の如きは水雷艇隊を率ゐて大津灣に至り以て我部員の縱覽に供せられ又戰利艦鎭遠觀覽の際の如きは特に多大の便宜を與へられたる事之れなり。大尉は即ち後世軍神廣瀨中佐として其名萬國に突々たるの人なり、英雄能く我一高健兒の士風を愛す、吾人の光榮何物か又之れに過ぎむ。

明治二十九年

此年天候頗る穩順游泳に適する事千萬、又前年霖雨連日暴風相次いで至れるものに比すべくもあらず。

六月廿八日開場式に先立ちて五六十名の部員一時に來津、蓋し前日校庭に於て對外人野球試合擧行せられしに因る。七月一日開場式擧行。前年游泳帽の制度一二級綠、三級白、四級赤白、五級赤白、五級赤と爲す現行の制度は即ち此舊制を踏襲し來れるものなり。

練習の概況につき此年の特徴と稱すべきは技術の練習盛なりしも遠泳頗る振はざりしの點にあり。依て委員助手率先して遠泳を練習せり。八月十七日猿島廻游を行ふ。夜來の雨一旦霽れたりと雖も半途にして俄然驟雨到るもの再三、波怒り風狂ひて細雨朦々四望暗憺として泳者を苦しむる事多大なり。八時四十分出發して十一時島を廻り一時四十分先頭到着し、二時十分殿漸くにして達す。四十一名の參加者中全泳者津田素彦、鈴木信太郎、沼田尚德、藤野修吉、谷直諒、森脇幾茂大、越幸五郎、小林幹、稱津淳夫、池田伴親、關山富、乙部融、太田庫太、新井琴二郎、福田謙之、山口堅吉の十六名を得たり。此日松田部長、鹽谷先生、土豪石渡氏、大津小學校教員諸氏保護船を以て行を共にせられ大に一同の士氣を鼓舞せらる。

今茲に總部員百九十四名、石渡慶二郎、入江一雄、板坂智吉の三氏委員たり。入江一雄、井上匡四郎、板坂智吉、永井誠也、木元長太郎、津田素彦、村岡坦、加福豐次の八氏助手として村山先生を輔助す。尚別に特別生の制度を設けて一級生中より技術優秀なるものを拔擢する事となせり。

明治三十年

七月四日開場の後天候定まらず、霖雨霏々として連日霽れず。加之一方有名なる南北寮事件の起るあり、慷慨の士多く上京して東奔西走部員在津者爲めに減じて二十名を越えざるに至りぬ。然れども其後事件落着して人漸く歸來、天候亦回復して晴天炎暑連日なり。於茲部員突如として增加し八月に入りては一時在津者の數百餘名を算するに至れり。是れ實に

水泳部設立以來未曾有の快事にして是れを以て實に大津時代の全盛の時と爲す。

八月二十一日猿島廻游を擧行し、島の東南角に於て約一時間の逆潮に苦しめられたるの外往復共に順潮大氣亦晴朗にして海水爲めに微溫なり。時を費すもの四時五十二分（落伍者は五時間三十二分）參加者四十九名中全泳者二十八名を得。

鹽谷溫、北澤淳夫、大島三郎、池田伴親、大岩武夫、大岩暢九郎、山口堅吉、加藤成一、大場信續、石渡五郎、杉程次郎、佐野定長、石坂晉四郎、飯尾藤次郎、島田義治、永池長治、九保德太郎、小管勇、佐分利貞男、中原溫二、長島隆二、富山衞吉、石神成一郎、山田復之助、川崎卓吉、根津千治、中條庸、畑惣之助。

此年特に記す可き事五あり。

一、過去三年の間我部草創の重任に當りて極力盡瘁せられたる村山正臣先生職を退かれ、入江藏六先生之に代られたる事其一也。

二、部員教導の用に供すべき教程を制定し以て練習を組織的ならしめたる事即ち其二也。

三、八月十二日の第二回田戸遠泳に當り從來の遠泳の凡て一列行進なりしを改めて三列側面縱隊となし一列を一二級二列を三級三列を四五級有志者と爲し以て從來の遠泳稍もすれば隊伍の分裂を來すの弊を救はむと企てたる事即ち其三也。

四、前年と正反對に遠泳に振ひて技術の之に伴はざりし事其四也。

五、浮竿、前筏、向筏、碇船等の位置を變更して菱形とし以て各等級者の混浴を禁じ游泳場の整理に力めたる事其五也。

部員百七十八名。飯尾藤次郎、森脇幾茂、鈴木信太郎を以て委員となす。助手入江一雄、木元長太郎、永井誠也、村岡坦、津田素彥、篠田治策、森脇幾茂、飯尾藤次郎、鹽谷溫、松平恒雄、鈴木信太郎の十一氏也。

三　水泳場の移轉

大津の地、風光明媚にして海水清澄、加之土俗頗る質朴にして一片輕薄の風なし。殊に吾部員の淡白無邪氣なる、能く村民の心を得、彼我の關係親密なること恰も鄕黨故舊の如く、就中土豪石渡氏の如きは義俠誠實稀れに見るの人士にして我部の爲に盡力周旋せらるゝもの萬端殆ど謝辭に窮するものありき。此地此人嗚呼誰れか能く之を捨つるに忍びんや。然れども水泳部は游泳練習の所にして單純なる海水浴場にあらず。海水の溫度低きに失するに於ては自然水中に在るの時間短少ならざるを得ず、然らば即ち游泳練習の目的亦之を充分に貫徹する事能はざるなり。大津の地もと海潮清澄なりと雖も水溫頗る寒冷、蓋し其地東北に面し而して夏期西南の風多きに當りては海濱溫暖の水遠く沖合に去つて水溫の低下する素より其所たればなり。此故に大津は遂に游泳練習好適の地にあらざりしなり。

於茲衆議一決、涙を振つて四年相親の大津を去るの決意を爲し場を新に各地に求む。然れども鎌倉逗子葉山の地は京濱の縉紳多く出入するを以て風俗豪奢にして淫卑到底吾部を置くべきの地にあらず。平塚大磯は海濱常に波荒くして游泳場たるに適せず。而して又羽根田大森の沿岸は海水汚濁風景平凡之亦一高健兒を容るゝに足らず、衆皆頗る困窮の狀あり。此時に當り報を齎す者あり曰く房陽の地一灣あり菱花灣といふ、灣廣く水清くして西面、遠く灣の開く所富嶽雲際に聳ゆるあり風光雄大眞に健兒を養ふの地たらむと。即ち人を派して之を踏察せしむるに四望風物の雄偉なる眞に報者の言の如し。於茲海水の深淺を測り土俗の朴否を考へて地を灣の東浦八幡にトし以て新水泳場となし、轉地の事即ちかくの如くにして成る。

此移轉に際し終始最も盡力せられたるは時の委員鹽谷溫氏、助手大島三郎氏並に那古町の醫師東氏にして八幡の土豪酒井根岸熊澤の三氏並に北條警察署長亦頗る好意を以て諸般の便宜を與へられたり。吾部此好適の地を得て今日の盛況あるを致せるもの誠に諸氏の熱誠なる援助ありしに因れり。

四　江戸屋時代

轉地の年明治三十一年より三十九年に至る九箇年間水泳部は其本部を江戸屋旅館に置けり。人此時代を稱して江戸屋時代といふ。蓋し吾部大津の搖籃を出でて諸事漸く整頓に近づかむとするの時なり、之を以て吾部の少年時代と爲す。

明治三十一年

此年游泳教師入江藏六先生其職を辭せられて又良師を得るに苦しむ。於茲日本游泳協會々長植原銑郎先生來つて教鞭を執らる。然れども先生は游泳協會々長の繁職にあるの人、素より長く東都を去る事能はざるに因り十日に一回來幡して部員直接の教導に當られ餘は之を法科大學々生助手入江一雄氏の代理に一任せられたり。

七月三日開場式を行ひ松田部長來幡せらる。此年前年猿島廻游成功の人多く等級高くして技倆の之に伴はざりしものありしにより技術の練習盛に行はれ風吹けば即ち支部を湊川河口波靜かなるの地に設けて技を磨き又各級當番の助手を設けて部員の教導に力めたり。

八月二十日午後澤柳新校長來幡、親しく部員の游技を視察せらる。翌二十一日沖島廻游を決行す。之より先、部員皆鏡が浦の地理に暗く經驗亦乏しきにより適當なる大遠泳の地を求むるに苦しみしも遂に諸方研究の結果沖島を廻游するに決せり同地の漁夫之を目して不可能の事となし迎ふるに冷笑を以てしたる事、尚第一回猿島廻游の際に於けるが如し。然れども同日午前十時五十五分八幡出發の一行四十二名は途中南西の風浪逆潮を捲いて至り舟夫周章狼狽頻りに形勢の容易ならざるを說きて遠泳の中止を勸告したるものありしと雖も、一同能く萬難に克ちて三里の浪路を泳過し五時三十九分先頭先づ着し六時二十分日既に沒したるの後未着の落伍者に中止を命じて之を全泳者と見做せり。全泳者十七名を得たり。

小林信一、平山金藏、山口張雄、北澤淳夫、奥山萬次郎、大久保利賢、佐藤勸、佐藤淺次郎、杉田鐵二郎、後藤和佐二山田耕、青山士、池田伴親、栗原忠二、柴田要次郎、宮部徹、山田復之助。

澤柳校長亦行を共にせられ二時間の久しきに亘りて風浪を冒し能く諸生の士氣を奬勵せられたり。

此年部員總員百三十六名。委員大島三郎、北澤淳夫、鹽谷溫、助手入江一雄、永井誠也、村岡坦、秋廣智吉、篠田治策鈴木信太郎、松平恒雄、森脇幾茂、大島三郎、北澤淳夫、畑惣之助、池田伴親、鹽谷溫等なり。

明治三十二年

此年天候不順七月は雨多くして八月は風多かりき從つて部員を得るもの僅に百十四名に過ぎず。

六月三十日開場。湊川小遠泳(七月十二日)を初め、北條(七月十九日)館山(八月二日)鷹島(八月六日)北條往復(八日九日十四日)等の遠泳を經て八月二十一日沖島廻游を擧行す。前年八幡を出發點となしたるの結果逆潮に苦しむ事頻りなりしに因り新に計畫を立てゝ館山共同水泳場より鷹島の南岸を通過して沖島に達せん事を策す。然れども此新計畫は見事失敗に終れり。蓋し鷹島の南岸は水頗る淺くして到底之を泳過するに適せず爲めに當日數町の長きに亘り一行徒涉して進むの已むなきに至りし也。加之歸路南位の烈風は一同を灣の中央に吹き流さむとして已まず隊伍爲めに四分五裂して又救ふ可からず。八時二十分出發して一時五十五分先頭の七士歸着し二時四十分にして全員十五名到着す。(參加者三十五名)

關美雄、山口堅吉、米元晉一、小林八十七、大久保利賢、上條韓次、原三一、青山士、田中敏、早乙女清房、豐住秀人宮部徹、鹽谷先生、永倉直七、山本五郎。

就中鹽谷先生四十有八歲の高齡を以て能く壯者の間に伍して全泳の功を擧げられしは特筆大書して之を後進に傳ふるに足る。

此年部長松田爲常先生を送りて現部長谷山初七郎先生を迎へ又游泳教師として新に植原繁吉先生を聘す。

委員宮部徹、大岩武夫、田中敏。助手篠田治策、森脇幾茂、片山外美雄、大島三郎、鹽谷溫、北澤淳夫、宮部徹、關山富、

水泳部部史

千葉眞一、大岩武夫、富田達三、田中敏の十一氏なり。

明治三十三年

此年初めて水泳教師杉田豐實先生を迎ふ。先生は後備砲兵少佐にして容貌魁偉、鬚髯盡く白く、雄健快活にして元氣壯者を凌ぐものあり。能く諸生の爲めに熱誠黨陶の任に當られたり。

七月四日開場。爾來天候不良なりしも中旬以降全く恢復して連日快晴、練習頗る盛なり。殊に櫓業の蘊奥を究められたる杉田先生並に所謂千葉式逆跳の盛名を游泳界に馳せたる千葉助手のあるあり、跳業の盛況を極めたる正に前後無比なりしといふ。

八月二十二日今年初めて八幡に水泳場を設けたる東京開成中學の部員八名を加へ一行四十三名を以て沖島廻游を行ふ。七時十五分北條汽船發着場を發して零時五分八幡に歸着(落伍者一時十五分)行程北條より鷹の島の北岸を經て中根を横斷し以て沖島を內側より廻るにあり。蓋し前年徒涉の覆轍に鑑みて新に案出せられたるの行程之より後數年皆之に依れり。往路兩島の中間に於て東風颾發妖雲低く垂れ、對岸一帶の地倏忽にして鬱山悉く隱れ加之急雨沛然として臻り風浪泳者を苦しむる事頻なりしも沖島西角を過ぐる頃より天全く霽れて日光赫々時に逆潮の前路を阻むものありしも能く耐へて二十四人の全泳者を得たり。

關美雄、北澤淳夫、久保田敬一、高橋其三、菊池昶、田丸卓郎、杉村眞一郎、福井定太、田口文太、根岸和一郎、原三一、中隈尙友、辻保次郎、井上要、長島毅、米元晋一、井手薫、(以下開成中學)吉田一郎、高橋太郎、吉澤忠吉、加福均三、寺井俊治、加島快三、郡司。

委員、原三一、加藤賢、加藤靜夫。

助手、大島三郎、池田伴親、片山外美雄、北澤淳夫、小山朝佐、大岩武夫、田中敏、千葉眞一、富田達三、中澤亮治、原三一、加藤賢、加藤靜夫。

明治三十四年

七月十二日開場式を行ひしも洪濤猛りて船筏を浮ぶるに由なく、僅かに拔手雁行を行ひて式を終る。然れども七月下旬以降晴天續く事約二旬、八月八日に至りては現在部員八十三名を算するに至り一同の意氣大に揚る。二十一日大遠泳を擧行す六時四十三分四十一名(中助手四名)の一行爆竹聲下に北條を發し、往路西南の風浪逆潮の苦しむる所となりて游者を失ふもの將に半數ならむとせるも八時四十分僅に沖島の南岸に達し、歸路風威漸く衰へて波稍歛まれるに乘じ勇を鼓して十一時十四分八幡に歸着す。時を費すもの僅に四時間三十分、殿後歸來せる時零時四十分なり。全泳者十五名。

關美雄、鈴木和志理、中野次郎、大久保利賢、井上要、山口堅吉、久保田敬一、井上文藏、田口文太、後藤佐清、菊池昶、白勢成太郎、中村傳治、金平亮三、今井嘉幸。

尙此行開成中學生徒八名吾れに尾し來りて五名の全泳者を得たり。

此年我部を見舞はれたりし先生には狩野校長、谷山部長を初め畔柳、小島、堀江の諸先生ありき。

委員、根岸和一郎、中澤亮治、菊池昶。

助手、片山外美雄、宮部徹、富田達三、加藤靜夫、原三一、千葉眞一、田中敏、田口文太、山口堅吉、北田正平、鈴木和志理、中野次郎、根岸和一郎、中澤亮治、菊池昶。

明治三十五年

此年七月中淫雨連日、殆ど日光を見る事なく僅に焚火を爲して暖を採り以て游泳を練習せり。八月五日に至りて初めて開場以來の好晴に會し翌日漸く北條遠泳を擧行せり。十五日山井先生の來幡あり西爪取、拔手雁行等を行ひて高覽に供す。十七日畔柳先生來場。越えて二十三日沖島廻游を行ふ七時四十分鈴木、杉村兩助手を先頭として出發。山口、千葉、田口、根岸、中野の五助手遊軍として兩列の間にあり以て救護の責に任ず。我部の遠泳、由來助手は救護船にありて危急の變に應ずるの例なりしも近年漸く其必要なきを感じて助手も亦多く遊軍として遠泳に參加するに至れり。今日現行の制は即ち此新例によれるなり。十時半右より沖島を廻りて零時五十八分先頭隊歸着し二時殿軍漸く到る。全泳者二十一名。

鈴木和志理、杉村陽太郎、根岸定治、廣瀬基、實吉敏郎、海老名一雄、加福均三、小野以一、宮下千里、細谷雄太、金平亮三、渡邊功、山口堅吉、三原新二、田口文太、花岡止郎、千葉眞一、大木幹一、根岸和一郎、中野次郎、宮下左右輔。

此日開成中學生徒九名亦吾に尾して行を共にせり。

二十四日閉場式擧行此日初めて團體競泳を行ふ。但し當時はすべて兩軍相對して泳ぐを例とし今日の如く同行競泳する事なかりしものゝ如し。

委員山口堅吉、鈴木和志理、中野次郎。

助手鹽谷溫、大島三郎、千葉眞一、根岸和一郎、田口文太、北田正平、倉田謙、杉村陽太郎、山口堅吉、鈴木和志理、中野次郎。

明治三十六年

此年天候頗る適順炎暑赫々天雨降らざること數旬、水は暖かにして波靜に、人水中に在つて殆ど歸るを忘る。之を前年霖雨日に瀰り冷氣肌に通りしものありしに比すれば殆ど天地を異にするの感あり。從つて七月十五日開場以來練習に練習を積み二十六日に至つて競泳大會を擧行し、來賓杉村通商局長、韓國李峻塔氏を初め、戸山學校、高等師範、安房中學の生徒を招待せり。之を以て吾部開設以來最初の競技大會と爲す。八月に入りては部員遂に百名を越え、十九日鷹島遠泳の如き參加者實に八十三名全泳者亦七十一名の多きを數ふるの盛況を見たり。二十日舊師植原銃郎先生東海沿岸の水泳場を巡察して吾部を訪はれたるにより、部員一同競技會を催して先生の高覽に供せり。

越えて八月二十三日、全員六十八名鈴木、金平兩助手を先頭として大擧沖の島廻游を擧行し、途中鷹の島北角に於て西南よりの急潮に會したりしも中根の潮流平穩にして容易に之を泳過し午後二時五十五分（後尾は三時五十分）八幡に歸着す。九時十分北條を發してより時を費すもの五時間四十五分全泳者四十三名なり。

鈴木和志理、下田錦四郎、金平亮三、山脇正吉、桐淵廣一、岩波茂雄、飯田英作、吉田茂富、國分武胤、杉村欣次郎、堀切善次郎、井原秀雄、花岡止郎、實吉吉郎、市川良造、吉原重成、淺井芳之助、柴田務、見定二郎、山本平馬、海老名一雄、黑住宗武、菊池聞、鈴木孔三、坂本修作、玉井喬介、鷲尾勇平、島村虎猪、鶴田龜二、齋藤捨藏、根岸定治、橋元昌矣、藤懸廣、杉村英三郎、田口文太、樫田五郎、長谷川久一、江橋活朗、加福均三、白根竹介、杉村陽太郎、今井嘉幸、深見秋太郎。

此年初めて我部舊部歌成る、蓋し滿井信太郎氏の作なり。

委員下田錦四郎、田口文太、金平亮三。

助手根岸和一郎、富田達三、鈴木和志理、菊池聞、杉村陽太郎、山口堅吉、中野次郎、倉田謙、北田正平、加福均三、下田錦四郎、田口文太、金平亮三。

時や恰も日露の戰役に會し我敬愛する杉田豐實先生亦老軀を提げて出征、野津軍の兵站司令官として軍務に從事せらる。於茲先生の無事凱旋せらるゝを待つの間暫く根岸、鈴木兩先輩に囑するに部員指導の事を以てす。

七月八日開場式に當り暴風突然東より吹き荒れて遂に脚立を流失し、其夜又激浪のため筏一個を奪ひ去らるるに會ふ。近年開場式の當日道具を高く海岸草原の上に揚ぐるの慣例蓋し此時に始まる。七月下旬露艦浦鹽より脱出して東海に襲來するの報あり、二十五日朝東方遙に砲聲の殷々たるを聞けり。八月十五日文部省游泳視察の爲め視學官小森氏を派して吾部を訪はしむ。乃ち競技會を擧行して其觀覽に供す。かくて八月十六日の鷹の島遠泳は七十名中六十一名の全泳者を出すの好成績を以て終り、二十二日の沖の島大遠泳亦五十九名中五十五名の成功者を出せり。之を以て大遠泳未曾有の好成績と爲す。殊に從來の大遠泳北條を以て出發點とするの例なりしを、多年の經驗能く灣内の潮流を知悉したるの結果、八幡出發の事必ずしも難事にあらざるを思ひ、此年初めて三十一年八幡出發の例に歸る。遠泳行程之が爲めに增すもの約一哩半也。此日時を費すもの僅に五時三十五分（自七時半至一時五分、落伍者二時二十五分）全泳者左の如し。

金平亮三、梅澤親光、松井博太郎、入野憲三、幸田畔造、種田虎雄、木村寛一、池田讓次、松井文二郎、廣部一、鷲見寛司、渡邊素、松村茂、持田龍雄、井上吉之助、谷口喬一、細見仁、田邊好一、霜山精一、楢崎主計、增田次郎、吉田圭、橋元昌矣、根岸定治、樋口清一郎、河野周、鶴田龜二、海老名一雄、山本平馬、黑澤盛勝、落合直幸、大塚靖夫、杉村英三郎、杉村欣次郎、田寛、三枝助太郎、片山久壽賴、上野直昭、瀨川昌世、佐々木保藏、山崎榮一、高嶺俊夫、三好長豪、三守暢、吉原重成、吉田茂富、今村新、今井徹二、横田大九郎、北野正、杉村陽太郎、加福均三、田口文太、山口堅吉、桐淵廣一、

黑澤盛勝は當年十一歳の少年杉村英三郎十三歳と稱して幼年者のレコードと爲す。

委員加福均三、桐淵廣一、深見秋太郎。

助手田口文太、菊池聞、山口堅吉、杉村陽太郎、金平亮三、加福均三、桐淵廣一、深見秋太郎。

明治三十八年

七月中天候定まらず、天晴るれば則ち南風激浪を卷いて至り、風歇めば即ち淫雨霏々として降る。二十七日開場以來の晴天に一同元氣を得て午後より大競技會を催す。蓋し根岸菊池加福三助手の遠く游泳教師として赴任せらるゝを送るの意に出づるなり。八月に入りても南風尚已まず、而かも部員の元氣なる能く激浪を冒して日々猛烈なる練習を重ねたり。而して中旬以後降雨連日、水頗る冷却して遠泳に適せず。二十三日濛雨漠々たる鏡が浦灣頭撫氏二十一度の冷水を冒して雨中遠泳所謂「軍國的遠泳」を決行したりしと雖も、沖の島に達するの頃西北の颶風突發して激浪澎湃、保護船爲めに進退を失ひて船夫徒らに驚愕狼狽するのみ。舟夫行かず舟進まず死ぬまでもと決心の臍を固めし左記十七士も遂に涙を飲んで中止の已むなきに至れり。然れども此間吾一高健兒の眞面目を發揮したるものありしは聊か自ら慰むるに足るものありき。

細見仁、山本平馬、杉村英三郎、鶴田龜二、增田次郎、納富清篤、梅澤親光、土屋隆三、桐淵廣一、梶井剛、吉田圭、谷口喬一、木内直、綠川浩、兒玉章、唐澤眞一、海老名一雄。

大遠泳はかくの如くにして不成功に終れり。然れども此年最も喜ぶべきの一事件ありき大阪十哩競泳即ち是れなり。吾部より出場せるもの杉村、鈴木兩助手。而して杉村助手は能く衆を制して第一着の榮位を占め、鈴木助手亦出發後僅に一哩にして痙攣脚部の自由を失はしめしに拘はらず能く十哩の長程を泳過して第六位を占め以て一高水泳部の名を全國に轟かしめたり。是れ獨り兩助手の名譽たるのみならず、實に吾水泳部未曾有の痛快事たり。

九月歸京の後沖島廻游の代償として十七日墨田川に遠泳を行ふ。赤羽より向島言問に至る約十哩。九時二十分出發して四時五分先頭向島着、途中一行千住鐘が淵の邊より上汐の逆流に會し殊に後尾の如きは激流に阻まれて進む事能はざりし

により全泳者と見做して四時半之が中止を命ず。此日曇天、冷風肌を刺すものありしに拘はらず、七十名中二十六名の全泳者を見たり。

加福均三、桐淵廣一、楢崎主計、細見仁、海老名一雄、山本平馬、吉田圭、鶴田龜二、高嶺俊夫、谷口喬一、松村茂、清田一郎、木内直、梶井貞吉、梶井剛、有泉寛、大村儀平、新井源水、納富清篤、土屋隆三、鎌田正威、澤村寅次郎、吉村哲三、勝沼精藏、杉村欣二郎、唐澤眞一。

此年杉田先生未だ凱旋せられざるに依り、新に水上監督の制を設けて根岸和一郎、鈴木和志理、中野次郎、菊池昶、田口文太、杉村陽太郎、近藤亮三、の諸先輩を共職に任じ加福均三、桐淵廣一、梅澤親光、楢崎主計、細見仁、海老名一雄を助手とす。委員海老名一雄、楢崎主計、細見仁。部員百三十名。

明治三十九年

此年は我部にとりて頗る多幸の年なりき。蓋し出征中の杉田先生芽出度く凱旋せられて再び部員鞭撻の任に當られしのみならず、天候甚だ順當にして部員をして充分練習の目的を達するを得せしめたればなり。

十三日開場式を行ひてより數日雨降りしも、十六日以後連日晴天、十七日の淡川遠泳の如き參加者三十一名全部成功の好成績を示し、二十二日先に海老名助手を越後高田師範水泳部に、桐淵助手を豐橋に送りし我部は更に加福、細見、梅澤の三助手を諸方に送るの必要を生じ、此日送別競技會を催して大に日頃修練の結果を示す。

此年初めて房南滞在の各學校水泳部を中心として關東各地游泳場の游手を網羅し、以て水泳術の相互研究を爲し、流派の比較融通を計るの目的を以て關東聯合游泳會を組織するの議、吾部員の間に起り、吾部並に高等師範學校水泳部共發起人として第一回大會開催の事を各地水泳部に謀るに、直ちに之に應じて參集するもの高師附屬中學、安房中學、開成中學

の三校あり。依つて八月六日北條海岸に會場を設けて游泳大會を催す。我部より出場せるもの模範游法に杉田先生を初め梅澤、楢崎、山本、細見、海老名、山川の五氏あり競技に梅澤、市川、古賀、霜山、細見、海老名、山川、阿曾沼、谷崎、末弘の十一氏あり皆平素の蘊蓄を遺憾なく發揮して聯合游泳會の盟主たる吾部の盛名を辱かしめず。尚遊戯として吾口、楢部獨特の蓮華、並に猛なる筏逼合を行ひて大いに喝采を博せり。

而して十六日の鷹の島遠泳には此年初めて游泳に志されたる丸山通一先生、大に勇を奮つて全泳の功を擧げられたるの快事あり。又二十二日沖島廻游に當りては南風波浪の難ありしに拘はらず、五十名中三十七名の全泳者あり。加之監督米田源次郎先生、五十四歳の頽齢を以て能く三里の長程を泳過し而して尚壯者を凌ぐの元氣を保有せられたるあり。是を以て吾部高齢全泳者のレコードをなし、特に記して之を後進の諸士に傳ふ。此日先頭時を費す事僅に五時二十九分。之を大遠泳最短時間のレコードとなす(落伍者七時間四十分)。

阿曾沼正治、霜山精一、北住福太郎、梶井滋、山田康太郎、中村德吉、新井練三、佐々木救、須藤求、小宮山直太郎、春日弘、三好長豪、宮澤源吉、末次猛、南澤遊龜治、末弘嚴太郎、梶井剛、佐藤吉郎、有泉寛、横井直興、桐淵廣一、谷口喬一、東繁造、山本平馬、綠川浩、綠川洽、杉溫平、吉田信一、兒玉章、松村茂、細見仁、黒住宗武、清田一郎、米田先生、三守暢、古賀光華、梅澤親光。

委員山本平馬、阿曾沼正治、古賀光華。

助手加福均三、桐淵廣一、海老名一雄、細見仁、楢崎主計、梅澤親光、山本平馬、阿曾沼正治、古賀光華。部員總員百二十三名

五　宿舍問題の二年間

明治三十一年我部八幡に共場を移してより以來九箇年間、常に江戸屋を本部とし之れに加ふるに片山、石川、增尾、小

川の四舍を以てし、之を支部となし部員を之に分宿せしめたり。然るに四十年六月中旬、江戸屋突然にして本年の宿舍を拒絶し來り、增尾亦家内の無人の故を以て拒絶の旨を申出でたるに會し、一同大に驚いて善後の策を講ぜむが爲め鳩首熟議する所あり。一方亦八幡移轉の當時盡力せられたる當地の名士を訪ひて共斡旋調停を乞ひ、以て應急策を講ずる所ありしも江戸屋、增尾共に辭意固くして遂に如何ともするなし。然れども江戸屋は從來の宿舍中最も大にして設備亦整へる所のもの。若し之れにして無くんば小川、片山等の諸舍ありと雖も遂に如何ともするなきなり。此時に當りて北條町に新築せられたる幸田旅館なるものあり階下全部を提供して我部の宿舍に充てん事を申出でたるにより遂に意を決して本部を幸田旅館に移し、片山を以て支部となし而して水泳場を北條海岸に移す。

然れども幸田旅館は我部の宿舍たると同時に階上を以て普通旅客の宿泊に充つる所のもの、加之館主未だ我部の慣行に習はざるが爲め、稍もすれば感情の衝突を來すが如き事なきにあらず。此家遂に我一高水泳部を置くべきの所にあらざりしなり。

於茲翌四十一年再び場を八幡海岸に復し片山を本部となし又遠く宿舍を湊區に求めて湊屋、瓦屋の二舍を得、之を以て支部の用に充てたり。然れども宿舍の相遠隔するは各舍間の意思疎通を妨げて練習に便ならざるのみならず、片山は宿舍の設備頗る不完全にして衛生に適せず、又到底永く本部を置くべき處にあらざるにより、寄宿舍造營の事は遂に端なくも部員一般の念頭に萌して翌年遂に其實現の美果を見るに至りしなり。

此明治四十年、四十一年の兩年度は我部の最も宿舍問題の爲めに苦慮困窮せるの時なりき。然りと雖も此困窮はやがて却つて寄宿舍造築の機運を促進し、以て我部獨立の基礎を固むるに功ありしを想へば、吾人亦聊か欣喜の情に耐へざるものあるなり。

明治四十年

七月十三日開場。鹽谷、谷山、兩先生の來場あり。越えて十八日新渡戸校長の來臨あり、北條遠泳並に競技會を催して觀覽に供す。此月二十八日、我部初めてウォーターポーロの遊戯を行ふ。

八月五日第二回關東聯合游泳大會を擧行す、參加するもの吾部並に高師を初め外國語學校、附屬中學、早稻田中學、安房中學、川越中學の諸校。吾部員にして出場せるもの模範游法に杉田師範を初め千葉先輩、加福、山本、梅澤、末弘、山川、阿曾沼、細見の諸助手。競技に梅澤、藤井、林、古賀、梶井、南澤、山本、末次、末弘、阿曾沼、山川、鹽澤、須藤の十三名あり。尙其他ウォーターポーロの遊戯を行へり。

八月中旬にいたりてより天候稍もすれば不良にして風浪連日、十八日怒濤を冒して行へる沖の島遠泳（從來の那古遠泳に代はるものにして沖の島片道約一里餘を以て行程とす。蓋し此年水泳場を北條海岸に移せるに由る）も三時間四十五分を費して僅に目的地に達する事を得たるが、二十二日擧行すべかりし沖の島廻游は遂に暴風雨の妨ぐる所となりて之を行ふ事能はず。而して部員漸く霖雨に倦みて歸京する者多きを致せるにより、二十五日僅に雨の歇み間を利して閉場式を行ひ遂に大遠泳を中止す。

此年初めに宿舍變更の難あり。而して又閉場に際して風雨の厄に遇ふ。蓋し我部開設以來の厄歲なりといふべし。

部員百十七名。

委員末弘巖太郎、梶井剛、山川戈登。

助手加福均三、桐淵廣一、細見仁、梅澤親光、山本平馬、阿曾沼正治、古賀光華、梶井剛、山川戈登、末弘巖太郎、末次猛。

明治四十一年

七月十四日開場。其後七月中天候不穩にして晴曇相半ばし、時に又暴風雨の襲來するありて海水黄濁、游泳に適せざるもの旬日に亘れる事ありしも、八月に入りてより天候追々順に復して部員漸く增加し、十五日鷹の島遠泳を擧行して四十七名の全泳者を得。十九日の第三回關東聯合游泳大會には杉田師範を初め加福、阿曾沼、山川、古賀、梅澤、末弘の諸助游法を演じ、古賀、中野、藤井、末弘、上杉、根岸、山川、南澤、淺村、幸田、阿久津の諸部員我部を代表して出場し、尙手模範遊戯として龍戰及びウオータポーロを行ふ。

八月二十一日好晴に乘じて沖の島廻游を行ふ。參加者五十一名沖の島の南岸、逆潮海月の厄難游手を苦しむる事限なかりしも、加福大先頭巧みに衆を率ゐて隊伍の潰亂を防ぎ六時間二十七分（殿軍七時間）にして全泳の功を擧ぐるを得たり。全泳者四十二名、蓋し三十七年に次ぐの好成績なり。

加福均三、根岸德雄、山川戈登、佐々木救、上杉綱雄、宮澤源吉、古賀素一、藤井啓之助、大脇康德、淺村成功、石川武雄、大河原泰次郎、井口常雄、三堀一郎、細井俊雄、桐淵健夫、阿久津國造、高橋文雄、樋口太郎、齋藤武五郎、山田康太郎、須藤求、田路坦、幸田藏六、越智主一郎、水野智彦、赤峰哲夫、高橋敬吉、小越知軌、大熊善吉、鈴木諒爾、小林俊三、南澤遊龜治、庄原和作、末弘嚴太郎、馬場直、中野芳太郎、酒井雪介、阿曾沼正治、鈴木孔三、越智義虎、古賀光華。

委員南澤遊龜治、中野芳太郎、根岸德雄。

助手加福均三、細見仁、山本平馬、阿曾沼正治、梅澤親光、古賀光華、末弘嚴太郎、山川戈登、梶井剛、末次猛、南澤遊龜治、中野芳太郎、根岸德雄。

部員百二十四名。

六　寄宿舍の新設と寄宿舍時代

明治四十年以來宿舍問題の爲め我部が幾多の苦心を重ねたる事は既に上述せる所の如し。然れども八幡の地たるや游泳練習の場として殆ど理想的なる諸條件を具備し、容易く之に代はるべき好適の地を求むる事は到底不可能なりと云はざる可らず。故に單に適當の宿舍なきの理由を以て此地を棄つるは吾人の到底忍びざる所なり。加之八幡の土俗もと如何に淳朴淡白なりとするも、近年東都の人士房南の地に入り來る者漸く多きを致せるにより夏季物價の騰貴するもの尠少ならず。從つて旅店下宿の類を以て宿泊の場となすが如きは到底吾部永遠の良策にあらざるなり。於茲我部は遂に意を決して寄宿舍を造營せん事を策し以て之を部長初め校友會の諸役員に謀る。之より先、四十年新渡戸校長來場の砌、宿舍の不完全なるを嘆じて將來寄宿舍建造の必要あるを說かれたるあり、其他諸先生の間此議に同情せらるゝの士亦少からざるにより我部は遂に校友會本部より一時借入金を爲して建築資金に充て之が塡補償却の爲め廣く先輩校友の間に寄附金を募集するの計畫を立てたり。此時に當り會々那古町所在の一小學校其建物一棟を賣却すとの報を得たるにより、人をして之を檢せしむるに其木口頗る優良能く之を改造して寄宿舍と爲すに適すべきを認めたるを以て直に之を購買して取壞の上、海路八幡に運搬し又一方八幡海岸松林中の共有地を賃借して四十二年春四月此地に工を起し爾來工程進捗七月中旬にして竣成す。

かくの如くにして寄宿舍造營の事は比較的急速に其目的を達し得たりと雖も、一方尙資金調達並に寄宿舍經營の難事存來るあり。茲に於て委員助手等力を併せて先輩の門に寄附金を乞ひ同時に又校友の同情によりて寄附金を校內に求む。爾來年賦償却の法能く順を追ふて行はれ、今や既に全部の償還を了へたる所以のものは實に先輩校友の多大なる後援の致す所なり。然りと雖も當時の委員、殊に越智主一郎氏の東奔西走、先輩歷訪に力められたるの功は我部の永く忘る能はざる所なり。而して寄宿舍經營の事業亦未だ全く經驗を有せざるの事、素より容易の業にあらず。而かも爾來大過なくして今

日に至り毎年相當の好成績を擧げつゝある所以のものは部員諸氏の眞摯なる自制に由る所素より少からずと雖も、時の委員殊に佐々木救氏の熱誠なる經營と天質の手腕とに依つて萬事の基礎を確立せるに由る所のもの亦頗る大なり。

明治四十二年

七月十八日開場式を行ひ、終つて寄宿舍新築祝を爲す。校長代理堀先生を初め谷山部長、鹽谷先生の御來幡あり。

八月四日那古遠泳の日杉田老師範保護船上に於て突然腦溢血を發せられて半身不隨の重態とならる。然れども八幡の地素より僻遠、良醫を得る事到底不可能なるにより、六日大沼先生附添ひて歸京せらる。是れ實に獨り先生の御不幸たるのみならず、吾部此良師を失ふ洵に恢復すべからざるの大打擊なりといふ可し。

八月十五日第四回關東聯合游泳大會を擧行し吾部を初め高師、外語、安房中學、開成、附屬、川越中學の諸校皆參加す吾部より出場せるもの模範游法に加福、山川、末弘、古賀の四助手並に鈴木先輩あり。競技に齋藤、佐々木、根岸德雄、前原、越智、楊、石川、根岸定治、高、水野の諸氏あり。遊戯ウォーターポーロ並びに打球を行ふ。

二十日沖の島廻游。一行四十九名中全泳者二十八名。

梅澤親光、山川戈登、越智主一郎、渡邊復、梶井滋、白石多士良、山崎一、關澤房豐、細井吉雄、鮫島龍水、石田新一郎、大津武敏、國友勇夫、水野智彦、野村駿吉、石川武雄、齋藤武五郎、武藤秀三、梶井剛、市河三祿、岡村治人、海上靖、清田一郎、野村龍吉、古賀光華、山崎壽市、佐々木救、前田孝義。

此日水中にある事先頭七時間十五分、殿後八時間四十八分共に水泳部創始以來の最長レコードなり。蓋し當日潮流往復共に逆、往路既に四時十五分の長時間を費したるに依れり。

尙從來大遠泳に成功せる者皆之を一級生と爲すの制を採れるも、技術未熟の者をして濫りに高級者たらしむるは却つて將來の進歩を妨ぐる所以なる事過去の事例比々として皆之を示せるに因り、此年改めて全泳者を列するに二級を以てするの制となす。

此年部員百四十二名。

委員越智主一郎、佐々木救、古賀素一。

助手金平亮三、加福均三、海老名一雄、細見仁、梅澤親光、阿曾沼正治、古賀光華、末弘嚴太郎、山川戈登、梶井剛、南澤遊龜治、根岸德雄、越智主一郎、佐々木救、古賀素一。

明治四十三年

前年中途にして杉田師範を失へる我部は、此年加福先輩に囑するに游泳教導の事を以てす。吾部開設以來十有六年、教師として迎ふる所の人皆神傳流の士、今茲新に水府流の名手加福先輩を迎ふ、蓋し吾部未曾有の事なり。

此年寄宿舍の增築を行ひて力めて部員を本部に集中せん事を計り、又從來の部歌長きに失して歌唱に適せず、且つ特別の音譜を有せざるにより、加福師範並に末弘助手に囑して新歌曲を製す現行の部歌即ち之なり。

尙此年遠泳の制度を改めて那古遠泳を廢止し、之に代ふるに沖の島遠泳を以てす。蓋し那古遠泳は海濱に沿ふて行く事約二十町餘興味頗る薄く且途中湊川の河口遠く海中に突出して泳過に便ならざるものあればなり。

八月に入りてより天候不順曇天、海潮寒冷なる事多かりしも七日競技會を催して大に部員の技術を奬勵し十八日高師、房中、開中、外語、早大の諸校と北條海岸に會して第五回關東聯合游泳大會を行ひ、大いに部員日頃の手練を示す。模範游法として加福師範を初め梶井、末弘、梅澤、中野、細見、澁村の諸氏、競技として永井、渡邊、佐竹、鹽谷、武藤、阿久津、越智、佐々木、松本、根岸、花島、鮫島、向山の諸氏出場、尙梶井、佐々木の兩氏レコードレースに參加して見事

一二等を占め遊戯に部員一同の打球及び筏相撲を行ひ又師範助手總出にて優麗なる「狂瀾千鳥戯」を演じて大喝采を博す。

沖の島廻游を擧行せるは二十二日。十九日以來の風雨悉く霽れたるも、部員の既に歸京したる者頗る多く參加する者開成中學生徒十名を加へて尙僅に四十一名に過ぎず。時を費す事六時間二十六分にして全泳者二十二名を得たり。

松本東作、永井俊吉、榊正、山岡愼一、向山均、大場直次郎(開中)、山口多聞(開中)、須藤求、渡邊復、鹽谷良彦、末次保、佐々木利吉、荒井誠一郎、鮫島龍水、佐々木敎、越智主一郎、中野芳太郎、市河三祿、根岸德雄、阿久津國造、陳啓修、梶井剛。

委員佐々木敎、渡邊復、市河三祿。

助手梅澤親光、細見仁、末弘嚴太郎、梶井剛、山川戈登、中野芳太郎、南澤遊龜治、越智主一郎、松本東作、根岸德雄、佐々木敎、市河三祿、渡邊復。

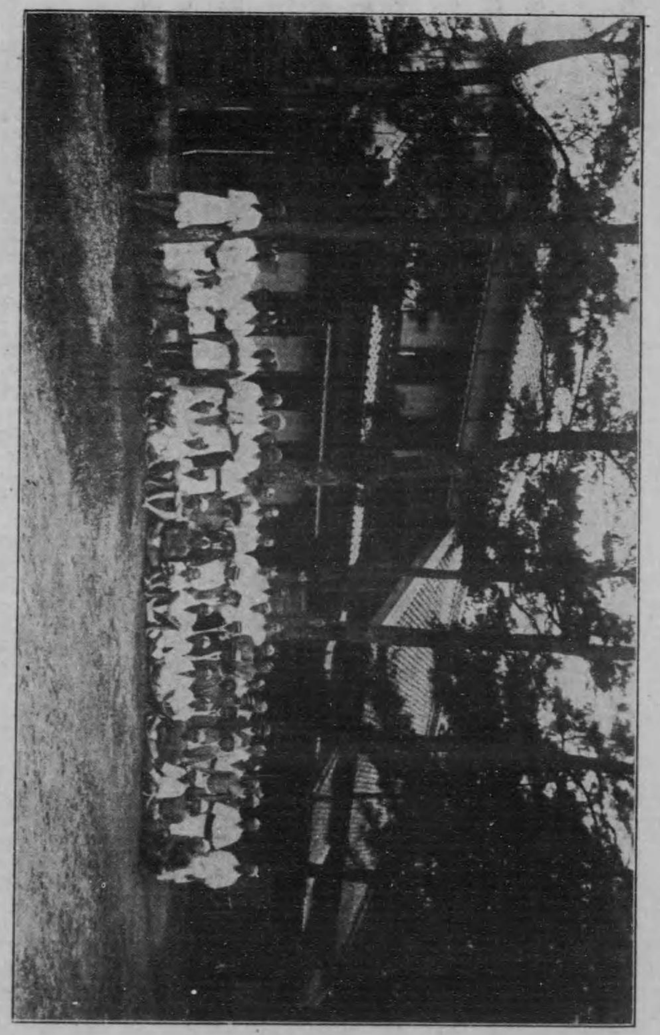
部員一百二十名。

尙終りに追錄すべきは此年十一月二十九日、多年我部の爲めに盡瘁せられたる山川戈登助手、腸チフスの爲め長逝せられたるの一事なり。氏が獨特巧妙なる潛水術は吾部の至寶にして每歲聯合大會の花たりし所のもの、今や既に此人なし。我部の損失亦何物を以てか之に例へむ。

明治四十四年

此年又加福師範を送つて梅澤先輩を師範として迎ふ。

七月二十日開場式擧行。同二十六日颶風襲來して船一隻並に小屋を破壞し去られ、其他激浪の爲め筏を湊川河口に流されたる等の失態を演じたるも、損害をして單に此程度に止まらしむる事を得たる所以のものは、實に暗夜暴風雨を冒して



活動したる部員の共同的奮鬪の賜物なり。

八月十五日第六回關東聯合大會を擧行し一高、高師、早大、外語、開中、附中、房中、川越中學の參加あり。吾部員にして出場せるもの模範游法に梅澤師範を初め細見、越智、末弘、中野、渡邊の五助手、競技に渡邊、海上、鹽谷、山岡、阿久津、向山、永井、鮫島、根岸、飯田、鈴木、太田、西村、鮫島(弟)、古賀、吉田、杉村の諸氏あり。尙筏角力並に新案の浪裡白跳を演ず。

越えて十八日沖の島廻游を行ふ參加者三十四名、八時十五分出發して二時上陸全泳者二十四名なり。

鹽谷良彦、太田子太郎、高田龜太郎、永井了吉、橋本芳雄、山岡愼一、武藤秀三、渡邊復、鮫島龍水、向山均、阿久津國造、杉村英三郎、鈴木雄輔、杉郁、蟻川一、立木雄二郎、古賀邦夫、西村泰、陳啓修、飯田光太郎、佐々木利吉、中野芳太郎、永井俊吉、川口元市。

委員渡邊復、永井俊吉、鹽谷良彦。

助手、細見仁、末弘嚴太郎、中野芳太郎、越智主一郎、鮫島龍水、根岸德雄、渡邊復、永井俊吉、鹽谷良彦。

尙此年鹽谷先生に委囑するに寄宿舍命名の事を以てしたるに先生快諾『詠歸賽』の名を撰むで扁額を賜はる。『詠歸』の二字は之を論語先進第十一『(點)曰莫春者春服既成。冠者五六人。童子六七人。浴乎沂風乎舞雩。詠而歸。夫子喟然歎。曰吾與ㇾ點也。』に採る。

明治四十五年大正元年

此年開塲幾何もなくして聖上陛下御不例の報に接し、爾來部員一同日夜御平癒の事を祈願せるも七月二十九日早朝先づ御危篤の報あり。次いで翌朝未明遂に御崩御の急電に接す。依つて我部亦水泳を休止し部員歸京するもの頗る多し。越え

八月一日本校より訓令あり、一同禮裝して海岸に整列し遙に宮城を拜して哀悼の誠意を表す。然れども我部の期する所素より游泳の練習にありて普通一遍の海水浴にあらざるを以て、之を中途にして閉鎖するは却つて其の當を得たるものにあらざるを思ひ、本校の指令を待つて八月二日游泳禁止の令を解き、爾來練習を積む事平日の如し。

此年諒闇の故を以て關東聯合游泳大會を行はず。十七日梅澤、阿曾沼兩助手の送別を兼ねて競技會を催し、二十一日好晴に乘じて大遠泳を決行し總員三十六名中二十八名の全泳者を得たり。時を費す事先頭五時間三十五分殿後六時間四十五分。全泳者左の如し。

末弘嚴太郎、中野芳太郎、根岸德雄、鈴木雄輔、鮫島龍水、鹽谷良彦、永井俊吉、太田子太郎、阿久津國造、外山高一辰野保、永井了吉、西村泰、立木雄二郎、古賀邦夫、高橋方雄、飯沼一省、原愛二郎、鮫島龍雄、星野直樹、安藏善之助、義俊、孫孝寛、神原襄、國友道夫、菅野拓三、竹內盛生、阿久津勉。

此年谷山部長、堀、鹽谷、兩先生の御來幡あり。

總部員百三十一名。

師範細見仁、委員太田子太郎、鈴木雄輔、杉村英三郎。

助手梅澤親光、阿曾沼正治、末弘嚴太郎、中野芳太郎、市河三祿、鮫島龍水、佐々木救、根岸德雄、永井俊吉、渡邊復鹽谷良彦、杉村英三郎、太田子太郎、鈴木雄輔。

○大正二年

七月十六日開塲式を行ひ、翌十七日部員一同五時半起床、六時海岸に整列して本日國葬せらるる有栖川宮威仁親王殿下の御靈を遙拜す。次いで七月二十四日本部創立二十年兼增築祝賀式を行ふ。此日東京より瀨戸校長、菊池教頭、堀幹事、

谷山部長、及び鹽谷、小島、丸山、今井、島田の九先生來幡せられて親しく祝賀式に列せらる。斯の如く多くの諸先生が、一時に我部を來訪せられたるは未曾有の事にして我部の深く感謝する所なり。式中、二十年間我部の庶務に從事せられ、能く部員を監督鼓舞せられたる大沼、米田兩先生に記念品を贈呈す。

八月十五日第七回關東聯合游泳大會を擧行す。集る者、一高、高師、早大、開中、附中、房中、川越中學等にして吾部員にては模範游法には末弘師範、梅澤舊師範、佐々木、阿曾沼、根岸、渡邊の四助手出場し、レコードレースには西村氏百ヤードにて一着を占め、永井氏二百ヤードに出場して三着を占む。尙餘興として本部獨特の妙技ライゲスシュインメンを演じて大喝采を博す。八月十九日沖之島廻游。此の日風波頻りに起りて健兒を苦しむること少からず。殊に歸途驟雨沛然として來るに會し泳者の困苦亦其の極に達せしが皆よく惡戰苦鬪に堪へて參加者五十四名の中全泳者三十一名を得たり。時を費すこと僅かに五時間二十二分にして沖之島廻泳の新記錄なり。

石本巳四雄、尾澤俊藏、山中鍊治、細川太郎、桑原宗助、鮫島龍雄、轟俊、越智義虎、高橋方雄、長岡治男、小柳義雄、渡部潔、松浦安雄、一戸次郎、加納芳三郎、奥山五七、松井六郎、中村邦、大河原半藏、西川友義、松田元市、梅澤親光、梶井剛、渡邊復、鹽谷良彦、太田子太郎、杉村英三郎、永井了吉、武藤秀三、飯田光太郎、蒲生勇次。

委員、武藤秀三、石本巳四雄、永井了吉、

師範、末弘嚴太郎。

助手、阿曾沼正治、梶井剛、根岸德雄、佐々木救、鮫島龍水、渡邊復、鹽谷良彦、永井俊吉、杉村英三郎、太田子太郎、石本巳四雄、武藤秀三、永井了吉。

○大正三年度

六月二十一日尾澤、山中、長岡の三委員等の渡房によつて先づ水泳部は開かる。

本年は屢と暴風强風に襲はれたれども概ね好晴にて雨は少く充分の練習をなすを得たり。從つて游泳隨意を利用して房中にボールテニスなどの素人陸上遊戯流行せり。

七月七日より新調の脚立を使用し同じく九日競技會を催せり。七月二十四日南西風强く波高く暴風の氣味あれど豫定ならばとて北條遠泳を決行す波浪のために舟の操縱さへ思ふに委せず多數の落伍者を出したり。

八月七日沖の島遠泳例年の通りなれど此の遠泳に武藤秀三氏が本隊の周圍を廻りながら拔手で乘り切りしことは特筆に値ひす。

八月十五日には關東大會の第八回を行へり。本年よりは競泳にてオリンピックの方法に倣ひて距離を「米突」にて測りスタートを跳び込みとなすこととせり。タイムレコードは一般に昨年に比して宜しく競泳の年毎に進歩し行くの傾あり。

沖の島廻游大遠泳は八月十九日、空模樣面白からずとの漁夫の言を捨てて出發本年の天候は雨非常に少く練習日の多きと部員の不斷の努力とは此の日の良好なる成績に表はれたり、時間の記錄は先頭四時四十五分の最短時間のレコードを作り五十三名の出發に對して四十七名の全泳者を得たり。

八月二十一日閉場式八月三十一日には全部員退幡せり。

師範、梅澤親光、末弘嚴太郎、佐々木救。

委員、尾澤俊藏、山中鍊治、長岡治男。

○大正四年度

六月二十四日開部、房南の別天地に渺々たる大海を背景に八旬の痛快なる生活を送らんとする吾部に降雨多かりしも本年度の活躍には目醒ましきものありき。

八月六日（曇）風浪を犯して鷹の島遠泳を決行。全泳者十九名、歸途鷹の島より北條まで競泳す、長岡（二十二分）宮下、武藤、佐々木師範、多々見、百瀬の順なりき。

八月十二日（曇）絶好の遠泳日和なり。沖の島遠泳決行。全泳者三十九名、所要時間、一時間五十五分。

八月十五日（晴）本校及高師主催第九回關東游泳大會あり。參加學校をあぐれば早大、水產、房中、開中、川越中學、千葉水產の六校なり。競泳は五〇米、百米、二百米、の三種なりしも百米突に於て我部の澤田武治（一分二十二、六秒）が三着を占めしのみ、競技に於て水府神傳兩流ともに活躍せり。

八月十六日（晴）安房中學校運動場に於て夏期陸上運動會あり、我部の山岡助手をはじめ宮下、重松、清氣の諸氏奮闘して氣を吐けり。

八月十八日（晴）沖の島廻泳。速水、葉山兩先生校長代理として來幡せられ健兒奮闘の狀を目擊せられたり。この日無風にして順潮なりき。沖の島を右端より廻る頃大逆潮に出會し苦闘に苦闘を重ね數多の落伍者を出したるも三十三名の一隊は四〇分にしてこの難關をきりぬけ先頭十五名は四時間五十五分にして萬歳を連呼して上陸せり。全泳者三十九名。武藤助手が片手拔を以て全泳せられしは特筆すべきなり。

八月二十八日（晴）詠歸寮を閉鎖す。

師範、佐々木教。

舊師範、末弘嚴太郎、梅澤親光、根岸和一郎。

（來幡せられし助手）

尾澤俊藏、永井丁吉、石本巳四雄、長岡治男、山中錬治、渡邊復、鈴木雄輔、武藤秀三、太田子太郎。

委員　齋藤武五郎、鈴木信太郎、山岡愼一。

○大正五年度

六月二十二日、三委員及齋藤助手の渡房により夏の國の天地は開拓せられたり。本年度は天氣兎角不順勝なりしにもかゝはらず谷山部長をはじめ須藤、齋藤、島田、速水、菅沼、畔柳、齋藤（阿）、山川、佐野の諸先生多數御來幡ありて我等部員を激勵されし結果數度の遠泳或は關東水泳大會に好成績をおさめ得たるを喜ぶ可し。

七月二十二日、南風强かりしも快晴に乘じて北條遠泳を行ふ、落伍者一二に過ぎず。

八月一日、快晴なりしかば小雨時々至るも鷹の島遠泳を決行す。途中東南の疾風になやまされ或は折柄碇泊演習中の滿航艇に驚かされたり。歸途北條まで競泳す、元良（五三分）一着を占む。

八月七日（曇）小雨中沖の島遠泳を決行す、全泳者三十七名。

八月十三日、房中グランドにて體育協會の練習會ありて我部の山縣、清水、澤田兄弟、山岡、飯塚、金平の諸選手大活躍をなす。

八月十五日、第十回關東聯合游泳大會を催す、早大、房中、開中、埼玉師範の諸校參加す。吾が水泳部は游法にては勿論競泳に於ても亦例年に見ざる猛練習の結果優秀なる成績をあげたり。百米競泳に於ては畑敏男一分二〇秒五分の四にて一着を占め、二百米に於て澤田武治二分五五秒五分の四を以て房中高師の猛者連を見事破りしは痛快なり。

八月二十日、前日來の暴風雨おさまりて海面明鏡の如し、即ち沖の島大遠泳を行ふ。全泳者、四十餘人。所要時間四時間三九分。レコードを破ること正に六分。

かくて水泳部年中行事の一なる遠泳も了りて八月三十一日閉部、九月八日極東オリンピック大會出場選手豫選會府下赤羽製麻會社の貯水池に行はれ我澤田選手出場して二百二〇碼に次位を得八百八〇碼には二六分二一秒を以て一着となる。助手、細見仁、舊師範梅澤親光、舊師範末弘嚴太郎、助手齋藤武五郎、太田子太郎、尾澤俊藏、長岡治男、山中錬治、石本巳四雄、渡邊復、根岸德雄。

永井了吉、山岡愼一、鈴木雄輔（本年度來幡せられし助手）この他鈴木和志理、海老名大先輩來幡せらる。

委員、關屋悌藏、畑敏男、元良潤。

○大正六年

大いに伸びんとする者は、先大いに養はざるべからず。大正七八年度に於て我が水泳部が現代日本游泳界の沈滯を嘆き、勤ともすれば徒に雜居し、遊惰安逸の夢を貪り、然らずんば單に捉はれたる型の練習を以て足れりとする活氣無き各水泳部の陋習を破り新時代の游法を宣傳せんとして、玆に蘊奥を窮めし先輩諸氏の游法を耀とし、三十年傳統の向陵精神を舵とし、雄々しくも游泳界に乘り出せる快事は實に、特筆大書するに値すと云はんか。顧つて想見するに大正六年度に於ては此の光彩陸離たる外面的活動は現はれざりしも羅馬は豈一日にしてならんや。

此年萠芽は已に發せられたる也。

即ち久しく部員の指導に努められし佐々木救氏は圖南の雄志徐に成り、師範を辭せられしかば、助手等相議して大津時代の先輩、向井流達人、仲野秀治氏を迎ふ。而して師範を補佐し、部員の指導を一層完全せんため新たに、副師範の職を設け、囑託するに石本巳四雄、齋藤武五郎兩氏を以てす。制度改新せらる、部員また奮勵せざるを得んや。一夏を貫く猛烈なる練習、澄澈たる意氣、加ふるに藹々たる和氣は、盛春爛漫たる開花にも似たる外的活動の實力を培ひつゝありし也。

二部端艇部選手等、相率ゐて渡房する十數人、霖雨霏々として連日開かず、海水低溫なるに、早くも猛練習を開始す。また上述の氣風を養ふに與つて力ありき。

今にして想ふ。大正七年春墨堤に於て、二部、工科大學共に優勝す、故なきにあらずと。

□

六月二十三日、畑助手、下岡、野村委員。渡房。

七月十八日、開場式擧行。谷山部長、速水、齋藤兩教授來幡。

七月二十五日、應の島遠泳擧行。歸途吉例により北條棧橋に向つて競泳す、畑片拔一重伸にて悠々として一着二十九分五十秒。

二着、平石、三十一分十秒。三着、元良、四着、堀江、五着、下岡。

八月十五日、第十一回關東聯合游泳大會擧行。

早朝より風浪激しく會場の設備不可能なり、午後奮勵して開會す。我が部員は各競技に於ては、卓越せる技倆を示せるも競泳には多く出場せず。只新進の津田正夫練習の日時猶ほ淺きに、百米に於て二着、（一分、十五秒四）二百米に於て三着（二分五十三秒六）を占め以て部員の意を強うせしめぬ。

當日、加福、末弘、佐々木の三舊師範並びに、しばし谷山部長、須藤、畔柳、速水諸教授臨場せられ、未曾有の盛會を呈しぬ。

就中、加福舊師範の一重伸は技神に入り、しばし滿場の鳴を潜めしめたり。當日滯在人數八十有餘名に達し夜に到り八名隣家淺田氏宅に宿泊しぬ。これまた、水泳部開始以來の盛況なり。寮舍狹隘問題やうやく起らんとす。

八月十八日、沖の島遠泳擧行。

前日來の荒模樣風ぎ、夜半星影天空に燦然たりしかば委員等未明に起床準備す。

午前八時十分、五十餘名、靜かに進む、海面滑かなること明鏡の如しと雖も海水低溫加ふるに、密雪低空に懸り沖の島を越えんとする頃、遂に時雨の如き霧雨降りてしばしは方向も辨じ難し。衆苦むこと甚しく落伍するもの多かりしもよく頑張りて、四十二名の全泳者を得たり。時間八時間五十九分。

全泳者姓名左の如し。

關屋悌藏、淺田恒彦、橋爪雄一郎、史通、千葉四郎、山口鐵彦、土浦城、須藤英雄、小田秀人、橋爪三雄、澤田鐵男、橋爪雄次、佐野茂樹、史風律、平井尙一、安達辭三、大島寅治、津田正夫、淺田光彦、佐々木救、陸造時、石本巳四雄、野村陸雄、武藤勳、西村泰、金野敏雄、黑田鴻五、新田純興、葦葉榮、尾澤俊藏、野上久幸、郷達夫、松田小一郎、田邊重憲、下岡忠一、高田寛、稻垣善次郎、元良潤、須藤勇、堀江英二郎、平石榮一郎、佐野實。

八月二十三日閉場式擧行。

九月七日、殘寮者數名歸京。

此年より留守番を廢し、秋より翌年六月まで寮を閉鎖して、根岸熊澤兩氏に時々の見廻りを依頼することとせり。猶、本年水泳部敷地境界石杭及器械體操用鐵棒を設立したり。

此年、總部員　百九十名。

師範。仲野秀治、舊師範。加福均三、梅澤親光、根岸和一郎、末弘嚴太郎、佐々木救。

副師範。石本巳四雄、齋藤武五郎。

委員、下岡忠一、澤田武治、野村陸雄。

助手、渡邊復、根岸德雄、武藤秀三、山中錦治、尾澤俊藏、山岡榮一、關屋悌藏、畑敏男、元良潤、下岡忠一、澤田武治、野村陸雄。

○大正七年

此の年連日風烈しく、波浪高くして、晴朗の日を見ず。時として風歇めば、或は淫雨霏々、或は水寒冷肌を刺し、部員一同練習に苦む。

七月二十一日開場式擧行杉敏介先生の來幡あり。

此の年東京帝國大學主催第二回全國競泳大會に招聘さる。乃ち我部は選手を派遣する事に決し、澤田、津田、郷、尾形千葉、畔柳、山本、近藤、松澤、枝吉の諸氏を選手に推戴して七月二十六日、送別コンパに其の行を壯にす、選手意氣昂然たり。

七月三十日大會擧行。好敵手高等師範。安房中學校故ありて參加せず、我が選手の雄風無人の境を行くが如し。易々勝利の月桂冠を獲て此の會最初の優勝旗は燦として我が戰手の頭上に翻る。當日出場選手氏名左の如し。

澤田武治、津田正夫、松澤一鶴、郷達夫、尾形正作。

此の日津田選手の一哩二十七分の記錄は當時の日本記錄なりし內田正練の記錄を破る事一分餘。其他の選手も皆一着二着の榮位を占め總點數五十點中三十七點を我が部に奪ひ、大ひに向陵男兒の氣を吐けり。

八月十五、十六の兩日に亙り例年の如く關東聯合游泳大會擧行さる。

我部よりは模範游泳法に仲野師範初め梅澤、石本、齋藤、西村、山岡、關屋、澤田、下岡諸氏、競技には松澤、橋爪、山極、元良、郷、淺田兄弟、菴原、山口、千葉、菅野、山本、西川、藤本、畔柳、安達の諸氏。競泳には津田、澤田、郷畔柳、山本、枝吉　松澤、淺田(斐彦)土浦の諸氏出場す。適々我軍有名の士病む者多く、津田氏は狹心症の爲一哩戰の途

に斃れ澤田氏病みて亦振はず。枝吉、土浦の二氏賞に入りて纖に氣を吐けるも、遂に豎子をして徒らに名を爲さしむ。選手奮激一年の隱忍に臥薪嘗膽、以て明年に期して屈辱を雪がん事を誓ふ。

競泳は我が國に於ては、古來之を輕視し來りし風ありしが、近來オリンピックゲームの隆盛に赴くに連れ、世の競泳選手に期待する所も漸く大なるに至り、諸水泳場にても此の風潮を雲烟過眼視する能はずして近年頓に競泳を重要視するに至れり。我が部固より此に着眼してより多年、夙くより名選手輩出して常に競泳界一方の雄たりしが、今年の如く競爭激甚なるに至つては或は所謂技なるものを全廢して競泳の一途に進まんと說く者ありて諸論囂々たり。然れども元來此の兩者は車の兩輪の如き者、技に拙くして競泳に疾き者はなく技に練達の士にしてレース遲かるべきの理なし。根本の技を忘れて徒らにレコードの上らんことを腐心するは、駟を棄てゝ徒步力走するの愚なり。たゞ在來の型なる者は餘りに煩雜にして、秩序なく、初心修業の人をして徒らに末葉の技に苦ましむる事多かりしかば、齋藤武五郎氏等茲に八年度よりの各級教目を一新して此の弊を除けり。

八月十九日沖の島廻泳に決せるも激波砂を嚙んで至る、止むなく中止。靜日を待つ事數日遂に二十二日に至りて本年は大廻泳中止を決す。

二十三日閉場式。

此年八月鐵路那古に通じ、來幡の士をして船底魚介と共に呻吟して汚臭に苦む事なきを得しむるに至り、部員二百名を越えて記錄を破る。是れ夏時の自治賽たらんとする我が部の目的に添ふ所以なるも、たゞ益々宿舍の狹隘を感ぜざるを得ず。茲に當然起るべくして宿舍增築の問題は起れり。八年二月北條に一民家賣却の意ある由の報あり。即ち委員渡房此の家を檢し木口の優良優に遷して宿舍となすの用に堪ふるを認め、歸京後助手を會して鳩首協議の結果之を購ひて宿舍の增築に充つべく決す。即校友會基金を一時借用し、年賦を以て償還なす事としその償還の方法をも定め斯くて校長、部長、

幹事を歷訪し事情を說いて資金の融通を乞ふ。諸先生も我が意のある所を諒とせられしが如何せん年來物價の暴騰が校友會諸部にも影響し、校友會本部にも基金幾何も殘さず、到底我が要求を容るゝ能はず、部長の斡旋もあり艇庫修繕費等の融通を乞ひしが是も成らず、宿舍增築の事も挫折の止むなきに至れり。然りと雖も宿舍狹隘は益々發展せんとする我部々員を收容するに足らず。此の如きは夏時唯一の賽友團欒の地として自治の本領發揮に努むる我部の堪へざる所、宿舍の增築は校友の援助の下に近く解決せられざるべからざる懸案なり。

なほ此の年の四月、年來熱誠よく我部の爲に盡瘁せられたる元良潤氏二豎の冒す所となつて不歸の客となる。人に接して春日和照の思あらしむる其の溫顏と拔群なる神傳流の其の卓技とを菱花灣頭復た見るの日なきは悼むべし。

師範、仲野秀治。

副師範、石本巳四雄、齋藤武五郎。

委員、山口鐵彥、津田正夫、淺田恒彥。

助手、猶崎主計、海老名一雄、鮫島龍水、太田子太郎、永井了吉、尾澤俊藏、飯田光太郎、西村泰、山中練治、山岡愼一畑敏男、關屋悌藏、下岡忠一、澤田武治、山口鐵彥、津田正夫、淺田恒彥。

○大正八年度

オリンピツク競技會以來日本の游泳界は大いに動搖せり、殊に從來無自覺なる末輩水泳指導者のために誤まられて徒らに末技にのみ走り居たる游法は捨てられ武術の一種と見るよりも一箇の運動として重きをおかれ從つて競泳は其の主なるものとならんとする傾向大いに現れたり。昨年來我が部も先輩間に其議盛に起り或る者は競泳は型を崩し水泳の奧儀に達するを妨げるものとして其の不可なるを主張し亦時代に適應して行かんがために亦型に囚はるるは姑息なる運動として競

泳を力說する者あり議論區々なりしが目的とする處は、外部的形式にあらず、水泳道の根本精神なり競泳は所謂業や型の練習と共にこの目的を達する一徑路にして、根本精神を力づくるものなり。而して同時に競つては勝たざるべからざるの一高的精神を發揮する一機會として大いにやるべしとの結論は略々多數者の意見の一致する所なり。尙ほ我が部制度改革の必要を認め先輩石本氏齋藤氏の靈力せらるる所となりて師範制度を廢することとせり。それは適當なる師範、副師範に人を得難きこと、師範及び副師範制度の實際は殆んど有名無實なること及び夫れよりはかゝる形式を廢し豐富なる、先輩の自由なる御指導を仰ぐことの可なるに想倒したるが故なり。

此處に於いて新委員は水泳部の全責任を自覺し海上に於ては比較的初心者に型を重んじ上級の競泳出場者には專ら競泳の練習を奬勵し去年の弊に鑑みて最も組織的なる練習法を行ひ内は上下の差別を無くし團欒共樂の氣分を寮内に漲らせんとの主義を以て六月二十三日委員外二十名許り渡房水泳部を開けり。

今年は天候順調にして海上穩なりしかば部の年中行事は滯りなく捗る。殊に鐵道の北條まで延長せられたるがため房州一帶は非常なる活氣を呈し海岸の賑かさは例年見ざる所なりき。其の内唯戰後の影響と其の好景氣に伴ふ物價暴騰は寮生活に可成りの困難を來せり。

八月五日帝大の戸田水泳部の大會には十一名の選手を派遣す。澤田、津田、尾形、郷、山口、熊田、畔柳、藤本、神田松澤、青木皆な平素の猛練習に大なる自信を得、殊に優勝旗、手離すべからずの信念に意氣昂然奮戰力闘したれど殘念ながら不及二十五點に對する十八點にて僅に敗れたり。

八月十六、七日關東大會を催す、天候よからず會場の設備不充分なり、然れども競泳競技共に盛に行はれたり。長距離リレー短距離皆な優勝し競技に於いては一高獨特の健實なる游法優秀なる業とに於いて十二分に他を壓倒し得たり一高のために氣を吐くこと萬丈痛快を極めたり。澤田君、津田君、郷君、尾形君、諸子のめざましき奮闘を感謝す。

八月二十日沖の島廻泳大遠泳を行ふ天候もよし、潮もよし記錄を破つて三時五十八分の新記錄を得たり、競泳の盛なる結果なるべし。

今年より弓術部の道場を寮前に設けたり。夫は主として弓術部諸氏の盡力によるものにして八月二十日頃より盛に練習せられたるが如し。我が部が他のすべての部を包擁するものとして其の一端が實現せられたるものなり。

七　一高水泳部本領

玆に過去五箇年間の水泳部の歴史を綴るに當つて、再び一高水泳部の本領即ち我部の仕事の範圍と主張とを明確に考へて置かねばならぬ。夫れは單に我部の事業に定義を與へる爲に必要であるばかりで無く、急激なる日本水泳界の發達に伴ひて生じたる部内の各種の事業や、或は意外の天災その他の爲に醸された各方面の仕事に依て、非常に複雜にされた我部史を簡明に組織的に記述する標題を與へる爲にも、亦缺く可からざるものであらう。

我部の根本方針として創始以來取り來つたものは實に

夏時に於ける自治寮生活の延長、及び

廣く水泳に依りて心身の修養

の二つである。創始以來、我部の委員等は代々此重大なる二つの使命を果すべく校友會の一員として深き感激と熱心とを似て努力し來つたのである。

各寮各室の區別もなく、校友會各部の區別もなく、寮生通學生の差別もなく、總ての一高生が水泳部の名に依て美しく一團とされたる詠歸寮の生活は一高生活にとつて如何に深い意義を與へる事であらう。水泳部の生活が寮生活の延長なる故に、一高生にとつてその體驗は深い感激を起さしめる。詠歸寮生活の效果は今玆に述べる迄もなく、既に先輩が書かれ

た所に盡きて居る、(舊部史參照)。若し水泳部生活の特徴を理解するならば、通學生の數漸く多きを加へる今日或は勤もすれば、確執を生じ易き一般寮生と運動部員との感情問題の融和等、現在向陵に於ける諸難問題の解決は正に詠歸寮から始むるのも容易なる一つの策である事に想到するであらう。詠歸寮は一高自治寮の縮圖である。又水泳部に於て表はれて來る氣分は一高自治寮に於けるものの現れである。自治寮に於ける思想感情は敏感に詠歸寮の生活の上に反映する。實に詠歸寮はあらゆる點で、自治寮の Indicator である。憂寮の士は來つて一夏を水泳部委員と協力し、以て氣風の向上に努力すべきであらう。此の故に代々の委員等は水泳部本來の面目を忘れるまでに寮生活の延長と云ふ點に心を注いでるのである。

我部の根本方針の主なる一半は、廣く各方面に亘る水泳である。而も單なる保養や海水浴や技術の修得ではない。水泳を手段として吾人の心身の修養を目的とするものである。古來我國に傳へられたる泳法の組織的研究により水の自然を恐れず、水の自然を侮らざる、所謂心水一致の悟を致す修養の第一歩を、我々は踏まんとして居る。或は數浬の遠泳を試みては、努力と忍耐とに依り艱苦に耐へ自然を征服するの氣力を養ふ。而して我々は更に又競泳を練習して Sportsmanship の完成に力を惜しまぬ。斯の如くにして我一高生の夏は如何に有意義化せられる事であらう。

我には競泳の進歩發達と共に先輩よりも更に強くその必要を感じ、その練習には死力を盡して居るのである。現今日本に於ける競泳の急激なる發達は遂に或人をして競泳萬能を叫ばしめ、或は又、競泳と在來の水泳とを全く別視してその何れかを取るべしと論ぜしむるに至つた。何はとまれ、競泳は、在來の水泳界の思想に大波亂を生ぜしむるに至つた。我部は競泳に參加する樣になつたが一方我部が日本水泳界に於ける泳法の位置を考へ、その技術の遙かに進歩して他を凌駕せる事を想へば、我はそれを棄て去る事を躊躇するものである。併しながら我々は嘗て我先輩が云はれた樣に「技に拙くして競泳に疾き者は無く、技に練達の士にしてレースに遲かるべきの理なし」(舊部史增補參照)と云ふ競泳と泳法を混同せる

考或は競泳をして泳法の一部に屬せしむる考をそのまゝ受け入れるものでもない。現今の競泳法は一つの技として在來の泳法を全然離れて修養し得る事に就いては、異存は無いが我々は競泳の爲に我部の先輩が苦心慘憺して經營し美しく立派に完成せられたる泳法を離れるには忍びない。我部は敢て在來の泳法や遠泳と共に競泳をも相並行せしめたいのである。現在に於ては一高水泳泳部の施設の不完全から或は無理もあるであらうが、將來必ず此の兩者を相並行して消化して行く事が出來る樣になるであらう。

我部の本領は前に述べた所で盡されて居る。然らば此の理想に對する我部の現在は如何。其を考察するに先立つてこの間の五箇年間の歴史を回顧する必要がある。

八　歴史的記述

向陵誌の舊部史の分類に從へば我が最近の四年間(大正九年——十二年)は前の增補時代と共に寄宿舍時代に包括さるべきものであらう。而して大正十二年の震災史を以て我部の房州時代(明治三十一年——大正十二年)の二十六ケ年の幕を閉ぢて部そのものの內容は變らぬけれども形を新たにして大正十三年以降は伊豆に移轉して宇佐美時代の第一頁を誌さねばならぬ。明治四十二年より大正十三年に至る十六年を水泳部の形式及內容の兩方面から考へて次表の如く分ち得るであらう。

房州寄宿舍時代、

前　期　(明治四二——大正元)四年

寮設備成り泳法に覇を唱へたる時代

中期（大正二―七）六年
寮増築竣工、競泳勃興、一高水泳部黄金時代
後期（大正八―一二）五年
競泳益ゝ盛となり内容に混亂を來せる時代
震災史（大正一二―一三）二年
房州詠歸寮倒壞、復興計畫、移轉
宇佐美時代（大正一三―）

而して筆者は大正九年より同十三年に至る間を記さねばならぬ。記述を簡略にする爲に總てを表記しやう。

（一）各年度委員

（大正八年度を加へたるは前の増補に脱落せるが爲なり）

大正八年	藤本達二郎	畔柳健太郎	山極三郎
大正九年	青木實	生田純次郎	芳野道一
大正十年	中橋謹二	澤田鐵男	西村愼四郎
大正十一年	渡邊二郎	松澤一鶴	瀧澤延次郎
大正十二年	日野原節三	西本淺男	近藤剛
大正十三年	田中勝俊	德江德	南雲道夫

（二）各年度助手

毎年度の委員は翌年は助手として推薦せられるが部員激増と共に助手の不足を感ずる。依て技の達者な人で水泳部に關係の深い人を助手に推薦する事がある。左に委員以外で助手に推薦された人を列記しやう。即或年度の助手とその前年度の委員とがその年に於ける總ての助手である。（大正八年度を掲げたのは舊部史に見えないからである）

大正八年　尾形正作、久富達夫、（郷）西川友義、庵原滋
大正九年　無
大正十年　松澤一鶴
大正十一年　鈴木國太郎
大正十二年　原久一郎、永野俊雄、坂田定治
大正十三年　岡本勁一

（三）水泳部日記抄

大正九年	大正十年	大正十一年	大正十二年	大正十三年
六、二三　渡房自炊制開始 二四　室内片付け 二五　町内有力者挨拶				

二四	全寮大掃除			
七、一				
二	委員賄渡房			
三	道具出し			
四	障子張替	電燈增燭		
五	北條遠泳			
六	寮內大掃除			
七	鷹之島遊び			
八	道具出し、良渡丸流出			
九				
一〇	競泳用杭打、助手會	蓄音機到着		
一一				
一二	關東大會廢止交涉	北條遠泳		
一三		對慶應陸上部糸毬戰		
一四		競泳用杭打ち		
一五				
一六				
一七				

二四		委員以下渡房		
七、一		道具出し		
二		脚立破壞、有力者挨拶		
三		三十人祝		
四				
五				
六				
七				
八				
九				
一〇				
一一				
一二				
一三	タンク修繕成る			
一四	寮內大掃除			
一五				
一六	開場式競技會	開場祝コンパ	夜委員賄出帆	
一七	KYK發會式		宇佐美着寮未成	

一八	第一回競技會	助手會（大和田）		
一九		第一回競技會		
二〇	鷹之島遠泳			
二一		百人祝		
二二		開場式、良渡丸轉覆		
二三				
二四				
二五	開場式、良渡丸進水式			
二六		新調して出來		
二七				
二八		濱に心中屍體上る		
二九				
三〇	關東大會の後相談	沖之島片道遠泳		
三一	戸田行選手決定	競泳練習開始		
八、一				
二				
三	沖之島片道遠泳	盜難、KYK發會式		
四		鷹之島遊び		

一八		北條遠泳		
一九		新調脚立出來		
二〇		鷹之島遊び		
二一		新調筏進水		
二二		水瓜取擧行		
二三		戸田に選手派遣廢止		
二四		沖之島片道遠泳		
二五				
二六				
二七				
二八				
二九				
三〇	陸運大勝報飛來			
三一	購入蓄音機來る			
八、一	百五十人祝			
二				
三				
四	委員會（茂八）			

一八		助手會（大和田）		一四〇〇米遠泳
一九		北條遠泳		
二〇		筏飯の快		
二一		陸運勝つ、寮內掃除、夜脚立倒る		
二二		障子張替へ		
二三		諸先生來部、夜舟遊		
二四		鷹之島遊び、競技會		
二五		新ターニング臺出來	開場落成式、競技會	
二六			初島遊び熱海行	
二七				
二八				
二九				
三〇		KYK 例會		
三一				
八、一				
二				
三		沖之島片道遠泳		
四				

五		第二回北條遠泳	軍艦見物
六			
七			
八	百五十人祝	二百人祝	伊東片道遠泳
九			
一〇	戸田大會惜敗す		
一一	戸田行選手出發		第二回北條遠泳
一二			競技會
一三		KYK游法研究會	伊東往復大遠泳
一四	一高開中聯合競技會	沖之島廻游	沖之島廻游
一五	一高開中聯合競技會		閉場式競技會
一六			
一七		二百五十人祝	西瓜取擧行
一八	筏飯の快		閉場式競技會
一九		閉場式競技會	對水高水上競技大勝
二〇	沖之島廻游		
二一	沖之島廻游		
二二			

二三	閉場式競技會	閉場式競技會	
二四			
二五			
二六	體協選手出發		
二七		大暴風雨	
二八		荒天道具片付け	
二九		荒天	
三〇		對三高野球勝つ	競泳番組決定
三一	退幡歸京	退幡歸京	對三高野球勝つ
九、一			道具片付け
九	第一回インターカレヂ	第二回インターカレヂ	大地震遭難
一〇	〃	〃	一同歸京す
一三			
一四			第三回インターカレヂ
			〃

（四）各年度の特別記事

各年度の重要なる事項にして表にては盡し得ざるもの、夏以外に起りし事件、新設及廢止の事項等に就き各年度毎に簡

水泳部部史

單に記錄する。(前掲の表を參考の事)。

○大正九年度

此の年度で特筆すべきは水泳部自炊制度の確立である。此の事は前年度に於て因を生じて居るのであつた。大正八年は戰後の好景氣時代なるのみならず、房總線は北條迄延長せられ北條の賑かさは例年に見ざるものであつた。遽に土地の人も利に聰くなり物價の暴騰急變實に圖る可からざるものがあつた。斯くて詠歸寮の賄は經營が非常に困難となり食事の內容の低下その他の事より寮の食事委員藤本氏は、賄木村に詰る所あり。然るに賄は謝罪せずして道具をまとめて引上げた爲斷然自炊を行ひ、自然賄制度の廢止になつた。(八、六、三〇の事であつた)依て急遽委員は東上し炊事係を連れて來るまで全く委員寮生の手に依る眞の自炊で暮して初意を通したが自ら經濟上の損失は免れ難い所であつた。此の年の終りになつて學校の自治寮に於ても自炊制確立の事あり、斯くて大正九年の夏に於ては水泳部も自炊を完全に行ふ事が出來る樣になつた。丁度夏時學校の寮に於て炊事係の隙なのを利用して水泳部に於て給料を支拂ひ賄人給仕を連れて行き食事の世話を賴む事となつた。又今年から寮生の手を借り全寮の大掃除を決行した。爲に夏中全く蚤の害を免れる樣になつた。

此の年には關東大會廢止の件がある、關東游泳大會は一高、高師兩校の水泳部の主催の下に年々房州に於て競技會を開き鏡ケ浦に水泳部を有する諸學校は元より廣く關東地方の各學校水泳部、その他の水泳團體を招待し十三ケ年に及んで居つた所の當時に於ける有力なる水泳會であつた。一高は競技場海上設備を年々分擔し晩餐會場設備は高師が引受け共々費用を負擔してやつて來た。所が漸く競泳が盛になるに伴つて參加者は多くなり今迄は一日で競泳はホンの餘興であつたものがプログラムは二日間となり前日は泳法の競技會次の日は競泳と云ふ樣になつた。而も興味の中心は競泳となり一高高師房中三ツ巴の競爭は漸時劇烈となると同時に競技精神の薰育の缺けて居つた時代の事とて感情の衝突を來すに至つたのは

實に殘念な事であつた。而も兩校とも會の爲に學校に請求し得る金額は僅に三十圓を出でず競泳の勃興は設備にも正確を要求せられ參加者の增加と物價の騰貴とにて維持困難ともなつた。此等の原因から漸く廢止の氣運が萌した時に帝大水泳部が戸田に於ける全國競泳大會(大正七年より)は斯界の權威となり一高としてはそれに力を注ぐ事の有力なるを考へ廢止の件は促進されたのであつた。七月十日先輩助手會を開いて我部に於ける廢止を決議し同十二日に至り高師と相談せる所同じ意嚮なるにより廢止と決定し同三十日に今後は各校に於ける催物のある際には招待し合ふ事にして遂に關東大會は廢止されたのであつた。

七月十日の助手會に於て齋藤武五郎氏以下助手相集り我部に於ける水泳教目を決定した。現今も此を標準として居る所のものである。

此の年に良渡丸が新造せられた。此は明治四十四年度委員故渡邊復氏並に故鹽谷良彥氏の遺族の方より多大の御寄附があつたので永く兩氏を記念し兩家の御好意を傳ふる爲に建造せられたるものである。同船の命名に關しては故鹽谷委員の御尊父より良彥の良と渡邊の渡の字とを取つて良渡丸と命名しては如何と云はれたに依る。故人兩氏と同年度の委員にして且建造に際し盡力せられたる高橋俊吉氏に之が揮毫を依賴して船首に刻む事とした。七月二十五日開場式の當日部長鹽谷氏の家族の方々列席の上、船に神酒と海水とを注ぎ記念撮影後寮生の手により進水せられた。部長谷山先生は左の詩を賦して此の式を祝された。

房州鏡浦水泳場賀和船良渡丸進水式

船故鹽谷良彥渡邊復二君遺族寄所也因取其各姓命以爲記念焉

游泳當年稱兩雄　凌來萬頃綠波中　縱橫進退如平地　遺範長垂絕技功
生前波上積功勞　歿後又貽舟一艘　寄語菱灣游泳子　兩家情義與山高

○大正十年度

此年度に於て、注目すべも事項は新學年制施行の第一年であつた事である。休暇の短縮が年中行事に差支を生じ鹿之島片道遠泳の廢止を餘儀なくされ氣分はあはたゞしくなり部員の滯在日數の如きも非常に短かくなつた。一方新入生の來部は非常に增加した。前年の餘力を用ひて此年は大いに寮内の整頓に意を用ひた。電燈を增燭して夜の寮を愉快ならしめ引續き完全なる大掃除を施行したる爲蚤は全く姿を消し或は障子の張替をする等寮生活に重きを置くの實を擧ぐるに努めた。而るに殘念な事には八月二日の夜大雨に乘じて盜賊忍び入り被害は寮生八名に上り現金七十餘圓時計二ケを取られた。直ちに北條署に訴へたれども未だに犯人は不明である。

昨年關東大會を廢して一年を過して見れば夏の間濱に何等の催物無きは淋しき限であるとて早稻田が此の夏の始に新寮を開きたるを期し鏡浦にて競泳をなしては如何と相談して來た。そこで一高からは關東大會を廢止したる理由を詳細に說明して不完全なる設備にて競泳をするのは直ちに感情問題の行違ひを來す原因であるから寧ろ鏡浦に水泳場を有する各校水泳團體の親睦を圖る會を組織しては如何との案を提出したる所各校の賛成を得茲に鏡浦游泳協會（KYK）なるものが設けらるゝに至つた。競泳競技は此の會の意とする所に非ず要は各校委員同志が仲よくすれば鏡浦全體として調子よく行くのであるから常に各部委員が顏を合せる樣な機會を作らうと云ふのであつた。此の年は五月三日の夜鏡軒樓上に於て早稻田水泳部が當番となり盛大なる發會式を行つた。集る者早稻田、高師、商大、一高、房中の水泳部委員等三十餘名以後毎年上記の順に各校當番となり（抽籤の結果なり）年を追うて各校の友誼の益々深からん事を誓ふた。

競泳は此年に至り益々盛になり、此年度の始五月に我部の松澤は極東オリンピックに參加し上海に於て、四百四十碼競泳に極東選手權を獲得し一哩競泳に二着を得た。同學期始に寮生を勸誘して數十人を神田 Y.M.C.A.プールに送つたが後の熱心が缺けたる爲遂に失敗に歸した。で夏に於ては大いに競泳練習に意を用ひたが設備整はず非常に苦んだ。脚立に

板を取付けタニーング臺との間の往復練習も試みられたが大して效果を擧げ得なかつた。又競泳奬勵の爲に運力も進級の上に考査を加へる樣になつた。そして各競技種目に對して一般の標準タイムを發表した。戸田に於ける帝大水泳部の大會には津田、松澤を主とし芳野、澤田、西村を加へて行つた。戸田の海に見ざる波浪の爲成績は思はしくなかつた。且帝大水泳部員が競泳の前夜に至つてストームを敢行したるため漸く日本に於ける有力なる學校の參加を見始めたのに一般の信用を失墜したのは殘念な事であつた。又始めて水上學生聯盟が組織され秋には第一回の競技會が開催された。一高も發起者側に加はり參加する事となつた。會は生麥三笠園にて九月九日十日兩日に渡り行はれた。我部よりは松澤、澤田、西村、中橋、芳野、等出場し、松澤は二百、八百自由型に一着、四百に二着を占めた。リレーはフライングにて惜しくもオミツトされた。

大正十一年度

注目すべきは部員の激增である。來部者總數二六六人大正七年の記錄二〇九人を突破したる新記錄であつた。此の事は學年始めより委員等が向陵時報に或は寫眞の展覽等によりて宣傳の效を奏した點もあるが全く新學制の影響であつて新入生諸君の來部が最多數を占めたに起因する。寮舍は狹く且設備不完全で寮生に不愉快な思をさせたのは氣の毒であつた。只今年の始めに元木に賴んで各室に適合する樣な特別の蚊帳に改造して置いたので例年より約二割以上收容力を增して居たのは偶然の幸であつた。而も助手が少なく泳ぎも充分に指導出來ず從て競泳練習等も不充分であつたのは返すがへすも遺憾であつた。一時在寮生は百名を突破した事があつたが而も尙盜難の虞あり、雨戸を閉じて眠らねばならぬので夜の苦痛は大なるものであつた。そこで斷然寮の改修を決心した。今年より委員が水着水襌等の取次販賣を試み成功した。小豆委員林振成君の努力で皆よりの寄附を集め水泳部も少し補助じて蓄音機を購入しレコードは持寄りにして大いに享樂し

た。かくて夜も徒らに北條、館山を散歩することも少なくなつた。が今年より陸上監督として大沼先生が來られなくなつたのは淋しく感じた。

校友會より筏を一つ新調して貰つた。七月八日に道具を出し脚立も出して立てた所朽ちたる脚が折れて破壞して終つた。修繕も新調も費用殆ど變らずとの事に、水泳部にて新調する事に定めて一時に二つの道具を新調し得た事になつた。又良渡丸の舷側があまりに高くして操縱し難く且顚覆の虞あり、（昨年開場式に前例あり）依て五寸ばかり切り取つた。

今迄は水泳帽が級別になつて居たものを助手と寮生との二種に統一して開場式の日より新制を施行した。かくて助手は水瓜帽を寮生は黑に二條の白線入りの帽を被る事になつた。今年はあまりに人數多きため（殊に未熟なるもの）例年あまり行はなかつた試驗を度々やつて進級せしめた殊に閉場式競技會は競技會として徹底せしめる爲に競泳を行ふは勿論游法の技に對して各級毎に採點し等級を定め且試驗ともなした。鏡ヶ浦游泳協會は八月十三日に游法の競技會をやつた。一高の技は仲々に立派であつた。新調された櫓に刺戟され櫓業の練習は猛烈となり助手にして飛込みをなさゞるものは無きに至つた。

競泳に關しては前述せる如く、委員一同寮務に忙殺され充分の練習を房州にてする事が出來なかつた。戸田の帝大水泳部よりは例年の如く招待が來たがメンバーを揃へる事が不可能だつた事及幹部が房州をあけて他所に行き得なかつた事及昨年の事の爲に一般參加者少く出場しても無能である事等の理由で參加廢止と決定した。そしてインターカレヂの方に力を注いだ。歸京後メンバーを揃へ練習を始めた。松澤、原、西本、瀧澤、國澤、中島、永野、稻積(豐)等。されど練習不足にて結果は思はしくなかつた。五〇米にては原豫選を通り決勝に加はりたれども惜しくもフアウルにてオミツトされ再レースとなりたるは殘念であつた。胸泳に國澤三着を得、松澤、八百、四百に夫々二、三着を得た。

開場式の時鹽谷青山先生は、御自分の沖之島廻游記事を揮毫して下さつた大幅をわざ〳〵御持參下された。種々御面倒をなすつて下さつた、杉先生と共に厚く御禮申上げる。此稿を草しつゝある時丁度鹽谷先生の音に接した。先生は我一高水泳部創始の際に御盡力下されてより我部を愛せられる事深く多くの揮毫をして下さつたり屢〻來部せられ時には遠泳に加つて沖之島を廻游せられた事もあるその時の經驗を一文とせられたのが此の記事であつて中學教科書に採錄せられるものもある程に有名な著である。先生を思ひ出す形見として、左に全文を揭げやう。

記沖島廻游事

房之館山。距京東南水程四十餘里。駕輪船可半日而到。其灣形如馬蹄。廣袤數里。南岬爲洲崎。北岬爲大武崎。館山當灣之艮位。白沙青松與碧波映帶。西望富嶽於雲烟之表。箱根足柄天城諸嶺。綿延屏列其左右。洵爲絶勝之地。有二島。近者曰高島。遠者曰沖島。館山東北爲北條。又北爲那古。那古北條之間有邑。曰八幡。此爲高等學生之游泳場。夏暇習游泳者聚焉。初卜地於相之大津。嘗長游廻猿島。及去年夏移于此。又廻游沖島。土人嘖々傳爲美談。今玆己亥八月二十一日。再有沖島廻游之擧。余自京往會。是日天晴微風。細波淪漣。游者分爲雙行。皆被帽。有黑者。有白者。有紅者。豫具輕舸八隻。一導前。一殿後。餘往來游弋。備救急之用。部署既定。游者挨次投水。相戒勿踰次。勿離伍。頭頭相望。魚貫而進。側泳者如臥。竪游者如步。或伸臂如猿。或颺足如鷺。如鳧鷖之浮。如龜鼈之嬉。坦坦施施。不異行康莊之衢。余在殿船觀之。不堪技癢。急脫衣爲翡翠跳下投。尾衆而游。晌午到沖島之陰。衆漸疲飢。船中豫儲摶飯及果物。投而哺之。其有餘力者。離隊先進。三三五五。不能復相合。余與三人者。竟落後。比過高島之西角。風益作。波濤洶湧。簸蕩掀飜。忽如登山。忽如墜淵。加之潮水入自鼻孔。鹹苦刺喉。痛不可忍。手痺足軟。氣竭息促。努力奮進。僅得遠岸。發自北條之西岸。著于八幡之濱。廻游水路凡三里。始於辰初。終於未中。初入水者三十五人。其能得遠岸者。僅及半云。客有難者曰。濟水有舟楫之便。有杜梁之安。何取乎馮河徒涉。且溺沒之慘。往往生於泅泳。

何費生之不自重也。余解之曰。客所謂知其一而未知其二者。夫言舟杜之便安者。以有舟杜而言也。一旦蹈無人之境。入未闢之野。逢川溪河湖。寧能待舟杜乎。夫鳥獸之性。雖不馴水。猶能自知泅游。今人渡波濤。則往往不免畏懼退怯。若或不然。徒誇馮河之勇。不察流勢之順逆。不詳水底之深淺。不審水性之冷溫。不測水力之强弱。驀然赴蹈。所以招溺沒之禍。皆坐不講游泳之過也。且夫習游泳者。曰炙潮浸。皮膚如銅鐵。筋骸緊束。風雨不能厲。寒暑不能侵。無有感冒染疫之憂。此又衛生之一端矣。不啻此也。國家四面環海。莫不賴舟船之用。使海陸將士皆不習水。則畏怖退怯。不戰而氣先餒。水術之所以不可不講。豈不較然明著乎。客唯唯而退。

○大正十二年度

前年度の混雜から今年は寮の設備や施設に大改革を加へた。學校の許可を得て寮委員は春の休暇の頃より房州に出張して寮の修繕換氣の設備疊換等を命令して夏迄には完成したかくて夜の蒸暑さを和らげ寮の收容能力を更に增した。事務の方は在來の帳面制度を廢止してカード式を採用し新なる考案になるカード面にて今迄の到着簿、食事表、進級簿、會計表の全部を兼ねしむる樣にして、非常な手數と時間とを省く事が出來た。この爲に委員は充分な時間を得、先に立つて競泳の練習を始めその他の仕事が工合よく運ぶ事になつた。

今迄は開場式は七月末の頃に行はれるが普通であつたが此は開場式と云ふ名から見ると誠に無意義な事である。依て、今年は渡房後直ちに（七月十日）開場祝コンパを行ひ七月末の先生方の來部せらるに都合よき時機に競技會を行ふ事とした。七月二十五日に先生方來部され舟遊びをし、翌日は鷹之島遊びと島に於ける競技會にコンパに先生寮生一同共に歡を盡した。海が靜かで非常に愉快だつた。

鏡浦游泳協會が出來た爲に今年からは互に自分の會に他の部を招待し合ふ事は廢止した。

此學年の始五月大阪に極東オリンピック開催の時に松澤は日本の水泳軍主將として參加し四百四十碼、一哩に三着を得た夏の競泳の練習は實に今迄になくよく出來た。松澤主將となり瀧澤マネヂャーとなり湊川の砂洲の蔭の深い所に本年新調のターニング臺を二つ並べて練習を續けた。練習を共にしインターカレヂ選手として申込みたるメンバー左の如し。

西本、稻積、土田、岡本、安藤、西田、德江、山本、近藤、田中、齋藤、上野、畠村、片岡、等。

天候もよく練習は順調に愉快に運んで相當自信ある程度のチームとなつたけれども好事魔多しの喩に漏れず。九月一日の大地震に寮は倒壞し競泳練習の努力も全く水泡に歸して終つた。

尙地震の事は後に述べるが幸部員一同に死者を出さなかつたが東京の大混亂を聞き歸京は樣子判明の後と決心し村の救恤事業に働いたり寮の跡片付けをしたりした。

九月八日に一部、同九日に全部、一先づ跡片付を打切つて歸京した。歸京後善後策を講じ學校とも交渉の上九月二十六日西本、田中、岡本、は北條に出張して跡片付けを完了する事にした。十月四日までかゝる。此頃より今後の方針に就ての相談が始まつた。十月十二日には詠歸寮倒壞の報告書を先輩に出す。今後の策として若し校内にプールが出來れば他の總ての條件を我慢しやうと云ふ事になつてあらゆる機會を與へ出來るだけの策を廻らしたまゝ此年は暮れた。越えて大正十三年一月二十六日に至り他の條件を考慮に入れて此の考を放棄し再び寄宿舍新築の決心を立て校友會に對して運動を開始したのである。

大正十三年度

寮移轉及新築が此の年の問題である。寮新築と決心してからは房州の寮の建坪百餘坪を基礎として、坪百圓を見て約一萬圓を水泳部の復興計畫とした。一方に校友會費の增額運動ありたるを幸、水泳部の復興費用を此による事を學校に賴み

校友會基金と增額の會費中より年に千圓づゝ支出して貰ふ事の許可を得一方種々の過程はあつたが結局清水組の清水一雄氏より不足金額を融通する事を諾して下さつた。此が二月の末であつた。大體考を房州の舊位地に殆ど舊同樣のものを建てる積であつたが三月二十四日先輩永井了吉氏より伊豆宇佐美の土地を紹介せられ兩者の比較研究の結果同月二十九日の助手會にて移轉と決定し五月下旬に至り房州の寮の木材全部は道具と共に四百圓にて賣却し遂に房州と分れて伊豆宇佐美の古城趾に詠歸寮は新しき姿に建設せられる事となつたのである。

此の間に經濟上の問題に關して清水一雄氏、寮舍の設計に關しては清水組の矢田茂氏（一高出身）先輩永井了吉氏宇佐美の杉山市郎氏の諸氏は非常に御盡力下された。玆に厚く謝意を表する次第である。

此年は總て創始時代の渾沌狀態であつた、七月十日開場したが天候その他の原因で工事遲れ寮は未成であつたので取あへず杉山氏宅に厄介になつた、開場式前後に漸く雨露を凌げる樣になつた新寮に泊り始めたが井戸は出來ず風呂はなし殆ど杉山氏宅で厄介になつて居るのも同然であつた。こんな狀態で整理も出來ず練習は固より出來なかつた、丁度寮を作るために人夫に來て居る樣に餘計な仕事ばかりした、八月下旬に至つてやつと住める樣になつた次第である。依て此の寮の價値は次年度以降で無ければ評し得ざる所である。

總ての混亂に年中行事の如きは只前年度の者をその儘守るより外は仕方は無かつた。遠泳の標準は盡く變化して在來の北條遠泳に相當するものは宇佐美灣内の一四〇〇米突遠泳となり、（七月十九日）沖之島片道に相當するものは伊東片道となり、（八月八日）大遠泳としては伊東往復となつた。（八月三十日）有志にて初島遠泳を計劃したが種々の障害で遂に決行する事が出來なかつた。

競泳に關しては、宇佐美の濱の大なるウネリに始めより心配して居つたが果して落付いて毎日練習出來ず迫つて來る諸種の試合に不安なき能はず遂に意を決して戸田の帝大水泳部に合宿練習した。今年より水戸高校との試合を東京石神井プ

ールで行ふ事になつた、結果は三十五對十二にて大勝して、練習試合の形式にて兩校相見え合宿中より兩校ともコンパその他の機會に友誼を深くし會は些少なものであつたが、愉快な成功を得た會であつた。結果左の通りである。

五十米	中田（水）	33.″2	稲積（一）	土田（一）	
百米	稲積（一）	1'16.″8	中田（水）	岡本（一）	
二百米	岡本（一）	3'9.″8	八木（水）	野田（一）	
四百來	片山（一）	6'49.″0	安藤（一）	八木（水）	
八百米	片山（一）	14'2.″7	安藤（一）	八木（水）	
跳伸	中田（水）	16m	松尾（一）	梁瀬（一）	
胸泳	稲積（一）	3'45.″4	松尾（一）	清水（一）	
四百米リレー	一高チーム	5'17″	（土田、安藤、岡本、稲積）		

インターカレヂにては（九月十三、十四日）殘念ながら一人も決勝に參加する事を得ず第二豫選に皆恨を呑んで斃れたのは如何ともする事が出來なかつた、夏の忙しさに練習不足の結果なる事は正に大正十一年の時と同樣である。

七月二十四日には開場落成式を盛大に行つた。齋藤、谷山、三浦、丸山、吉田、龜井、高橋、長峯の八先生御出席になり午前は海上にて競技會午後は村の方達に立食宴、來會者は六十餘名の盛會であつた。夜は寮生と村の消防夫、青年團と共に酒を汲み交し歡を盡した。翌二十五日は初島に遊び熱海に入湯し開場式に働きたる寮生を勞ひ暮ゆく伊豆の海に太平洋や水泳部歌をどよませて鏡の如き海面を滑るが如く汽船を進ませたる快は又今年の深い感激の一つであつた。

九　一高水泳部の現在

我々は前節に於て我部の委員が爲して來た仕事の結果を述べた。然し仕事の經過の敍述はどうしても部の形式方面が主となる。我部の如き多樣な複雜な內容を持つた所では更に內容の方面に就て考へなければならぬ。而して內容の進展の原因を合せて考へれば玆に容易に我部の現在を提示する事も出來るのである。故に敢て「一高水泳部の現在」なる標題の下に此項を一括する事にした。

我部の內容の各方面に就て考察を下す前に概括的に我部の現狀を述べて置く方がよい。現在の我部(或は校友會の殆ど總ての部がさうであらうが)は歪んだ狀態にあるのである。競泳と云ふ一大內容を加へて將に伸びんとする所を費用の不足、設備の皆無、地震の影響一高移轉と云ふが如き多くの力にて壓迫を加へて止めて居るのである。恰も鐵棒に力を加へて曲げて居る形である。力を長く加ふれば棒は曲つたまゝになつて終ふし少しでも力が大きくなれば折れなければならぬ。水泳部の現狀たるや又危い哉。此の一事が我部の事業の各方面に深く影響して居るのである。水泳部將來の解決は後進諸君の努力に俟つ、我々は此處に逐次前節の我部の本領の項に照應して我が現況を物語らう。

詠歸寮生活

水泳部其物の本質から云へば我が寮生活の效果如何は敢て問ふ所では無い。游法を完成せしめ、競泳に勝利を獲得すべく努力する事がその本領であらう。而し一高水泳部に至つては寮を所有し合宿をなす事は本質的の要素となつて來る。斯て我部の特徵ある二大綱領が成立するのである。向陵に於ける自治寮は夏二ヶ月我が詠歸寮に移るのである。此數年向陵に於ける變化はその儘詠歸寮に移して行つた。地震の爲の移轉まであまりにその儘であるのに驚く。先づ房州詠歸寮に於ける變遷を考へやう。

かの大正八年夏に於て自治寮に率先して自炊制を施き大正九年度に於て確立するに至つた食事の制度は寮生活の大改革であつた、最初の年は圖らざる困難から經濟上の損失もあつたけれども翌年から此制度故に此の損失も回收する事が出來年々經濟的に安心して居られるのは全く他水泳部に見ざる所である。而し此の安心も常年に對してゞあるが大正八年の如く、一夏中に鷄卵が倍額に騰貴する樣な年に對しては些か不安の念無き能はず、寮に於ける準備金に相當する何か他の策が欲しいものである。自炊制度の價値に至つては今更喋々するを要しないであらう、正に向陵に於て評價せられると同樣である。

次に重要なる問題は交通の變化の詠歸寮生活に及ぼした影響である。夫迄は汽船で早くも半日、遲ければ殆ど一日を費し魚油の嗅甚しき船底に積まれて來たのが大正八年よりは遲くとも兩國驛より四時間にて達し得る樣になつたのである。一般の來部が容易になつたので部員は激增したが歸り易くもなつたので結局部員の出入も甚しくなつた事及部員の滯在日數平均が低下した事等の直接影響を與へた。間接影響としては、北條町に於ける夏時海水避暑客の激增にて物價の騰貴を來した事と土地の人の利に趨りて漸く湘南嬌奢の風を學び俗化し來り土地の開拓者たるべき學生に對する態度に慊らざるものあり、漸く北條町に對する不快の感を起すに至つた事等である。要するにそわそわして落付きが無くなつて來た水泳部の生活は、永く滯在して總ての人の氣分に融合する樣になつてこそ味があるのである。永く居る程面白くなるのであるから此の事は寮の擴張設備改善と相俟つて改めらるべきであらう。

又一方大正十年より學校にて新學制施行の事あり、即夏期休業が一、二學期の間にあると云ふ事が在來の學年の終りであつた事に比して寮の落付きに對して影響を與へた。現今迄は何となくそわ〳〵する原因となつて居るが將來は此により反つて落付きを增す原因となるべきであると思ふ。又此制度により新入生が來部する機會が多くなつたのも見逃す可から

ざる事である。未熟の人の來部が多くなつた事と大學も亦制度を改めたので助手の來部が尠くなつた事とは同時に水泳部を苦しめて居る難問題である。此のみならず直接に響く事は授業日數の增加を圖る爲に夏期休業の短縮となつた。我部の活動制限を受けたる此より甚しいものはないのである。而も年々短縮されて行く狀況を前掲の日記表に就き參照せよ、此の爲に我部は鷹之島遠泳の廢止その他の年中行事二三を廢止せねばならなくなつた。かて〻加へて同じ理由で野球部陸上運動部を始め各部の對校試合が夏休中に行はれると云ふ怪現象を呈するに至つた。此が又我部にとつて大影響であつた。(特に十二年以後)試合前後の部員の出入は決定的である、此により我部の經營は非常に困難となるが然し我部は我綱領に從ひ寮生に刺戟を與へる夏中の唯一の機關として詠歸寮を提出するものである、斯の如く各種の理由は相錯綜して水泳部生活より落付きを奪つて終つたが何等かの手段を講じて防がないと遂に水泳部は海水浴宿屋と變化するに至るであらう。

北條の都會化は在來聞かなかつた盜難がある樣になり大正十年我部に遂に創始以來始めての盜難に遭ひ以後は雨戸も閉ぢる必要を生じて夜の寢苦しさには耐へられず十二年に至り大修築を行つたが地震により跡方もなくなつた。依て新築に際しては特に通風に意を用ひた。序であるが新寮を全部十疊にしたのは多くの人を收容した時に苦しくない樣にと思つた結果である。

寮生の出入頻繁と十一年度の混雜に鑑み寮事務を極端に簡略にして委員をして充分にその本來の眞面目たる水泳の仕事をなし得る樣にと云ふ考で十二年には新式のカードを作成し在來食事の月表到着者名簿進級簿が三重の手間を要する上に部員の名札を書き人員を調べたり食費領收の都度會計簿に書き入なくてはならなかつたのをすべて集めて一葉の紙にて濟ませる樣にした。時間と勞力との利益は非常なもので爲に十二年度には委員は擧げて海上の取締が出來競泳の練習等は從前に見ざる完全のものであつた。

寮舍の狹隘と云ふ事も前から云はれて居た事であつた。大正七年の混雜の頃より部長に請願して新築の運動は或點まで運んで居たのであるが競泳が漸く盛になり一時全日本を風靡したが(大正七年)その後敗戰頻に續き無念やる方なく、全力を擧げてプールの建設を期する爲に遂に寮建增しはその後となり、遂に震災に至つたのである。

プール問題及震災に於ける寮の樣子は後で述べるがとにかく、詠歸寮をして寮生活の延長たらしむる事には委員も部員も共に成功して居ると云ひ得る。唯氣分が昔年に比すれば落付きが無くなつたと云へやう。然しながら又宇佐美に移轉した事である。狀況は昔年の房州と髣髴たり、玆で新しき氣分を作らなければ何時他にその時を求め得やうか、落付いた新氣分の化成是こそ現在の詠歸寮生活の進むべき道ではあるまいか。

(ロ) プール問題

(此の問題は當然競泳の項に包括せしむべき一項であるが震災史には再び此の問題に入り終結を得る行掛上簡單に豫備的に記述する事とした)

(イ) の所に一寸云つた樣に寮舍の增築をやめて迄完成を期したプール建設運動は部史には現れて來ないけれども常に水泳部に過去數年間纏つて來ためんだうな問題であつて夏以外の委員の仕事は殆ど總て此事件であつたのである。事の起りは前の增補時代に入るが大正七年戸田にて一高水泳部は全國選手權を獲得したけれども八年は高師に破れ翌九年には茨木中學の若輩に二點の差にて破れたのであつた。(因に此の會に於て彼の茨木の選手は二百米迄に Crawl Stroke を使用して皆を驚かせた Epoch-making の競技會であつたのだ)八年度にては只管練習の不足を思ひ口惜しい殘念で濟んだが翌年の茨木の成績には眼を瞠つた、引續き茨木チームの旭日の昇るが如き勢で日本全國を征服する有樣に驚いた、そして理由を糺せば彼の誇である校内プールである事が識者の認める所となつた、その頃神田青年會館の屋内水泳場に於ける體驗からも其必要を痛感する樣になり遂に具體化して九年の秋には最初の運動が開始され標準を得る爲に五十米プールの專門家の

見積が石本巳四郎氏清水一雄氏の兩先輩の御手數により得られた。何れも一萬五千乃至二萬五千圓位であつた。一方學校と交渉數回十一月終になつて敷地としてボート用タンクの東側を定める事となつた。助手會實行委員會は度々開かれ寄附による事の決定學校當局との交渉等ありたれども殆具體的の發展を見ざるに新學制による學年は改つた、此の時遽に有力なる先輩助手は相續いて洋行入營卒業等の故障にて遂に殘部の仕事は一高生の微力なる手に移され空しく歳月を過した、十一年度委員は此事を繼續せんとしてその年の春永井丁吉氏を介して丸之内の久保田工作所に於て二十五米場所は前述の所としての見積を得たが此亦一萬圓程度の者であつた、建設問題は斯く實行難から行悩みとなつて大正十二年に至つた。

而るに競泳界は益進歩し、遂にインターカレヂまで組織さるに至つたが（大正十一年）、我部の設備は皆無である、彌縫策として大正十年度一學期に於て廣く寮内を勸誘して數十名を神田青年會室内プールに送つたが本郷から通ふ熱心家も少く失敗に終つた、十一年度には雜誌を利用して宣傳したが二三の人を得たのみで此亦不成功であつた。

現在の一高に於てプールが無いと云ふ事が總ての禍根となつて居る。此無き爲に夏は主として競泳の練習に意を用ひ游法の研究は疏になり而も充分の競泳練習すら出來ぬ狀況である。校内プール無しで必勝しやうと云ふことは現在の一高では如何に頑張つても不可能と斷言したい其は例へば野球部からグラウンドを奪ひ去つたと同じであらう、而らば何故作らうと努力しないのか、それは次の震災記中に說明しやう、そして此の項はたゞ時の問題を紹介するに止めて置かう、何はとまれ他に邪魔があらうが無からうが現在の一高にはプールが是非必要である事が此の問題の結論として殘る事になる。

（八）大震災記及詠歸寮の移轉

大正十二年夏は事務の都合よく湊川の水利もよく始めより組織的に競泳練習を行ふ事が出來て例年に見ざる練習の效果を擧げる事が出來たので部員一同大いに自信を以てインターカレヂに臨む事が出來るやうになつた。此年の試合は九月八、九の兩日であつたので合宿の都合もあり早く歸京する事は思はしくないので閉部を九月一日とした。當時競泳選手一同炊事係給仕等合せて約二十人ばかり在寮して居つた。九月一日は朝より騷雨來り荒模樣の嫌な天氣であつたので一時は練習を斷念し寮の跡片付に沒頭して居つた。漸く午前九時頃に至り雲に切れ目を見せ薄日が射して來た。恰も練習時間に定められてあつた滿潮時であつたので、此の機を逸さじとばかり仕度をして練習疲れに澁る一同を引立たせて練習に出たのであつたが後にして之を見れば我等の生命を救ふべき貴重なる練習であつたのである。遙に沖を眺めると暗雲低く海面を覆ひ突風屢〻起り鷗群は砂洲の端に下り立ちて飛ばんともせず、不安な兆のある天候であつたが常の如くに河中に臺を立て二時程の練習を濟ませ將に道具を引上げて上陸せんとする刹那の事である、遽に大地は動搖し立つて居る事が出來ず皆砂上に打倒された、二三の者は河中に居つたが水の動搖に自由を失ひ、急には岸に上る事が出來なかつた、地面の龜裂陷沒の爲に湊川口の美しきスロープの砂丘は無數の凹凸を生じて終つた。暫くは何の事か譯が分らず一同唖然たり北條那古舟形の町に砂塵蒙々と上るを見大房岬の崖崩れに綠色の草地の斑點が落ち行くのも見えた、斯くて第一震は終へた、一同立上つて聲も立て得ず只顏を見合すのみ續て來る、第二震に一同は道具を其儘として、松原の中に逃げ込めば再び大地は强く震ひ松原の中にてさへ龜裂を生じて泥水を噴き出すなど生きた心地はしなかつた。

忽ちに沖に異樣の波の起るを見る大房岬先端の雀島は盡く白浪に覆はれ尙進みて大房岬の崖を嚙みつゝ進み來るのが見える。スハ津波と海岸に散りたる道具類を急ぎ持ちて松原の中に逃げて樣子を見て居たが幸大したものでなく大きなうねりが濱に碎けたのみで濟んだがその後は潮が非常な沖まで引いて終つた。却てその後に大きな津浪が來るのではないかと危ぶまれたが後に土地の隆起の結果と知れた、眺むれば舟形北條の空に黑煙の沖するを見る、火災が起つたのである、此の間幾何の時間を經過したかは知らぬが給仕馳せ來り「寮が倒れました」と云ふ聲に愕然我に還つたが然し嗚呼萬事休矣。

直に寮に歸つて人員を點檢するに二三人不明なので驚いて調べると河中に居たものが舟形の方の岸に上つたものと知れ

寮生炊事係から犬に至るまで一同無事なのを喜び合つた。寮は見るも無惨に南方に倒れ二階廂は庭の松の下の根本に來て居つた、尙餘震劇しき中を水泳部關係の土地の人の家を見舞つて歩いてその何れも無事なるを知り、その後は手を分ちて諸方の救護に出掛けて我々の手のみにて數人の人を堀出した。

此の夜は增田氷店の小屋の中に寢る事となり先づ寮より各人の寢具だけを堀り出した、餘震尙劇しく僅かに殘つた家も午後の餘震で倒壞するに至つたものもある、北條全滅の報來る。東京との交通は全く杜絶した。斯くして一日の夜は暮れた。幸に北條の火は止めたが舟形はそのまゝ大火となり終夜炎燒した、絶えず爆發樣の物音と烈しき餘震と蚊軍の襲來に安眠を得ず疲勞の極に達した。

此より九月九日に歸京する迄の約十日間を想ひ出す時は苦しくもあり恐しくもあり愉快でもあり書くべき事は多いが要點だけを略記しやう。九月三日に至り東京の大慘害の樣子が多少解り出した我々は二十人の一行が旅行する事の不可能なるを想ひ東京の狀態が治つて判明する迄は滯在する事に決心して、靑木の蝟小屋に籠城し各手を分ちて食料品を集める者寮を片付けるもの町の爲に配給者の手傳ひに行くもの等となし、一は公共事業に、一は自分等の仕事の爲に盡した。寮の片付けは學校當局の檢分を待つて後と思ひ日用品を取出して後は棄てゝ置いたが東京の狀況の判明するにつれその不可能なるを知り最後に至つて我々の手だけで二階の方だけを全部片付け各自の荷物水泳部備品を殆ど全部發掘して、後汽船により八日九日兩日に分れて一同歸京した、十日には學校に報告を濟せ善後策を考へて貰ふ事となつた。八幡に放置してある材木や跡片付未濟の部分置いて來た荷物の處分法を學校にたのみ人夫賃を得て、九月二十六日西本、岡本、田中、は再び房州に渡り、十月三日まで全部の跡片付を終り材木その他家財道具を三つの小家を作つて納めて來た、更に西本は十月十三日再び渡房して重要な荷物全部をもつて歸つた、斯して地震以後詠歸寮の方は一先づ事件が落着したのである。

此大震災に於て我部の助手西川友義氏は本所被服廠附近に於て行方不明となられたのは遺憾の極である。

九月以後十三年三月に移轉となるに至るまでの事件の徑緯は實に複雜であるがその大體の傾向經過を述ぶれば次の如くである。

房州詠歸寮の倒壞と共に直に前後策に頭を惱したが我々は夏の事を想へばすぐに移轉を考へ、もつと氣持のいゝ土地にもつといゝ海のある所でバラックでも天幕でも宿屋住ひでもいゝから行きたい、房州を離れたいと云ふ考とプールさへあれば他は何も要らないと云ふ案との間に迷つた、而し一高の水泳部に於てプールを要求する事の明かなるは前項の記事でも分る筈である。非常に無理と困難があるけれども努力して見やうと云ふ氣になつた。十一月十七日助手會を開き我々の此の意見を先輩に問うたが何れもその事で一苦勞して來た人達ばかりなので贊成であつた、決定事項はプールを寮附屬の水浴場と同じものに取扱ひ一般的にする事、構造は二十五米突で學校本館の古煉瓦を用ひ費用は水道設備を入れて約六千圓の豫定（丸之內久保田工作所積）金は房州の土地を抵當として農工銀行あたりより先輩を通じて借りる事償還方法は主として一高生より寄附を集め先輩のも之に加へ後は新入生より徵收する事其の他ホール上納金の融通を試みる等の事であつた。夏の生活は天幕生活その他でやる事、財源は房州の古材木を賣つて得た金でと云ふ事であつた、各方面にプール建設費用の見積を積つたり銀行調査をして時間が經つて行つた、そこへ帝大の擴張問題や一高移轉問題が絡つて來て全く他方面に發展を見るに至つたのである。又此の時の先の年の例に習つて、淸水組の淸水一雄先輩を煩して又同じプールの設計をお願ひした所が完全なるものを作るべしと云ふ御意見で出來上つたのは約一萬圓の豫算であつた。段々調査を進めると學校はプールの意見には好意を見せては呉れぬ、銀行もはかばかしくは行かぬ、遂に意を決めて總てを淸水先輩に御賴みしやうとしたが此又勿論不可能な事であつた、要は震災で痛手を蒙つた世間に對しての仕事である、根本の無理は其處にあるのであつた。

：此の間に突如一月十二日に校長より駒場へ一高が移轉しやうとするとき生徒一同の意見を問はれた、交換條件にプール

水泳部部史

も出來ると云ふ事を云はれた時は、我々の耳を疑つた程に喜んだ。かくて我々の意見はプールは時間の問題で解決がつき我々が手を引いても將來必ず出來る、それより學校も好意を有する詠歸寮を復興する事が最自然な出來易い而も我々のなすべき事業であるまいかと云ふ意見に變つた、清水先輩も極力此説に贊成せられ我先輩である清水組の矢田茂氏を紹介せられ種々設計見積その他に御力を賜つた、大體最も出來易い方法として元の房州の地に元と同樣の建物を作る事が安價なる事を忠言せられ設計もその樣に出來上つた。此前丁度校友會費値上げの問題が學校に起りつゝあつた際なので水泳部運動して學校及各部委員との了解を得て校友會基金と增額費用中より毎年千圓づゝ金額一萬圓を詠歸寮建築費の償還用に提供する事を約された、而して清水氏は更に我々に對して建築費の金額を立替へて下さる事となつた、此の事の決定を見たのは二月の下旬であつた、一方移轉に際して駒場に出來るプールを室内として貰ふ交渉があつた。かくて我々は試驗の終了を待つて房州に行き矢田氏立合の下に材木を調べ大工に見積りをさせるばかりになつたのである。

三月二十五日に我々は出發しやうとして居つた時前日秋の頃に我々が移轉を考へて居たと云ふ話を聞いて居た永井了吉氏は伊豆宇佐美村にて我々を好意を以て迎へやうとして居る話をせられたので事件は更に一大展開を見るに至つた。房州には二十五日菅沼、谷山兩先生、清水組の矢田氏、西本、松澤、德江、岡本の一行が出發し豫定の如く材木の檢分を行ひ矢田氏の設計に從ひ大工に見積らしめたる所約一萬四千圓なるを知つた、正に豫算の超過である。歸京後直に翌日前記の中先生と先輩とを除きたる四人は永井氏と共に宇佐美に行き杉山氏所有地城山を檢分した。位置は申分ない、地は高爽にして風景は雄大である、海もウネリはあるが大體靜かである事、海水は伊豆特有の透明にして溫暖、底は氣持よき砂地なる事の確證を得た。交通は現今不便であるが熱海線の開通道路の完成と共に房州よりもよくなる位である而も建築費は房州より安いのであつた。四人の意見は移轉と決して三月二十九日の助手會には近來稀に見る多數の人の出席を得てその決議により移轉する事とはなつた、その後再び谷山、菅沼兩先生及矢田氏に宇佐美出張を乞ひ現今の設計（同く矢田氏）を得學

校より許されたる一萬圓以内にて請負も濟み新案が生れるに至つたのである井戸のポンプ及水槽給水工事に關しては多く畔柳健太郎氏を煩した。但事件はかゝる急な進行の結果である爲萬事に遺漏多く大正十三年には殆ど用をなさなかつたのは殘念であつた。五月下旬房州の木材は建具と共に賓拂ひ水泳用具船家財道具炊事用具等は一切永井氏の好意で同氏所有の船で北條の眞西に當る宇佐美の地に送つたのである。その後細い事件はあるが上述せる所が震災後の我々の活動である。今後は我々の此の寮を一層よい氣分の下に育てねばならない。

（二）游法及遠泳

昔時の一高水泳部の水泳研究は游法が全部であつた、漸く競泳がその全部とならんとして居るが我は敢て一高水泳部に於ては兩者を相平行せしむべしと云つた、所論に就ては何も混亂する事は無いが事實上實行問題に關しては先に分類の所で云つた樣に現在は尙兩者を一夏に行はんとする爲混亂せざるを得ない狀態にある、若しプールがあれば競泳は常住不斷の練習をなし夏時に於ては廣いわだつみの中に美しい游法を樂む事も出來やうにと思はず愚痴の出る所である、游法に對しては昔程の熱が無くなつた、（勿論競泳が盛になつたと云つた方が至當である）優秀な技をもつた人は出なかつたが而し前掲の助手の諸君は尙他の部を優に凌駕し得るものである。泳法は傳統的に神傳水府二流を取るの外ブレストストロークと相平行せしむる爲觀海流をも加へた、その他は舊部史と大同小異である。

遠泳の事を一通り見ておかう、氣分の上で昔と比較するならば昔よりは非常に容易な氣分で決行して居るのを見るであらう。一般の進歩か或は代々の成功がその氣分を誘致したものか考へるべき點であらう、今後とも輕擧をなさざる樣昔の愼重なりし態度を鑑みる必要があらう、殊に參加者全部が必死を以て全泳に努力した點は、此頃の如く稍もすれば形式的に流れんとする時に當つて是れ學ばねばならぬ點であらう、遠泳の目的は要は忍耐修養即眞の頑張である。

次に各年度の沖之島廻游に就て通覽しやう。

大正九年、八月二十二日、全員三十一、全泳二十一、午前九時十分出發午後二時到着、晴天、初め逆潮にして歸りは順となる、概して波は靜かなり水溫二十四度中附先登、澤田武治、及關屋悌藏全泳者姓名左の如し。生田純次郎、青木實、芳野道一、鈴木國太郎、中橋謹二、西村芳彦、佐藤、桂壽一、鈴木政造、川井章知、奥田孝六郎、小谷野貞一、澤田鐵男、澤本三郎、木村武松、板井秀夫、川野昌美、福田武雄、加藤珹、村井富之助、松澤一鶴。

大正十年、八月二十一日、全員四十四全泳三十七、午前八時出發、所要時間先頭四時間二十分、殿六時間五分、晴天波靜か、水溫二十六度、終始逆流に苦しめらる、海月も多かつた、中附先登山極三郎全泳者姓名左の如し。

山極三郎、中橋謹二、西村愼四郎、澤田鐵男、青木實、芳野道一、中村、村井富之助、鈴木國太郎、津田正夫、松澤一鶴長東憲、林振成、木村恒、引田重夫、伊東卓治、林鏡秋、關正猷、三關敦、野崎進、稻垣茂樹、戸塚芳男、平井尙一、紺野登、渡邊次郎、武田忠哉、戸塚環、前田克巳、內海扇之介、湯淺辛、沙俊、岩崎昶、古澤潤一、松尾正弘、長岡順吉、植野二郎、伊地知秀廣、岡田辰雄。

大正十一年、八月十五日、全員六十三全泳三十七、午前八時四十分、所要時間五時間八分殿五時間四十分、半晴時に驟雨來る、水溫寒冷にして上船するもの多し、氣溫も寒冷にして乘船したるものを送り返したり、始め逆潮歸路は送られた、中附先登澤田鐵男全泳者姓名左の如し。澤田鐵男、稻垣茂樹、長岡順吉、渡邊和夫、原久一郎、永野俊夫、林振成、瀧澤延次郎、中橋謹二、西村愼四郎、鈴木國太郎、生田純次郎、松澤一鶴、近藤剛、森田豐吉、岡本勁一、山口平次、濱口守三、倉田藤一、田中勝俊、谷井毅夫、中島資忠、安田宗次、日野原節三、沙俊、小谷野貞一、鈴木利治、板井秀夫、山本義男、外山宜道、金子憲太郎、畠村嘉兵衛、今村重元、岩田金太郎、德江德、紺野登、長倉義夫。

大正十二年、八月十六日、全員五十二全泳三十五、午前七時半出發所要時間六時間殿七時間、晴天波靜かなれども潮流惡く終始逆なりき、沖之島高之島を8の字に廻游したのは未曾有であつた、水溫はかなりあつた、中附先登瀧澤延次郎全泳者姓名左の如し。瀧澤延次郎、安藤秀雄、近藤剛、山本弘、田中勝俊、鈴木利治、南雲道夫、森威光、佐藤金治、西本淺男、永野俊夫、原久一郎、松澤一鶴、渡邊次郎、德江德、山崎正武、秋葉盛事、林茂、片岡三郎、不破秀夫、青木蔚、碓井雄三、佐藤鐘二、三宅精、寺村豐造、土田武雄、小長谷透、成島俊一郎、天野賢治、嵯峨根遼吉、山崎恒、小宅習吉、岡田辰雄、小林肇、畠村嘉兵衛。

大正十三年、八月十三日、此年からは伊豆にて伊東往復遠泳を擧行した但種々の都合で遲く萬事につき、工合惡かつた全員十九全泳十七、出發午前九時二十分、全距離二里餘、水溫は溫泉の湧く爲か非常に溫かで樂であつた、全泳者姓名左の如し。西本淺男、外山宜道、小谷野貞一、德江德、南雲道夫、田中勝俊、宮本茂業、平川守、淺沼清吉、青木蔚、川井立夫、坂本吉勝、田中繁雄、秋葉盛事、德岡二郎、小山莊之助、橋本永助。

(ホ) 競泳

競泳は夫自身が競技會に乘出したのが新しい事である、世界的に水泳は古くからあつたが、競泳は新しい事である。舊部史を見れば直に分るが我が部が競泳試合の形を具へたものに參加したのは明治四十三年の第五回關東大會の時レコードレースに梶井、佐々木二氏が優勝した時であらう、その後我部は關東大會のレースを重要視して來たが大正八年限りで廢止した。(前參照)大正七年より戸田の水泳大會に出場した、その成績は各年度に出して置いた。一高は前に述べた理由で戸田の方も大正十年限で中止してインターカレヂを選ぶ事となつた、又最近大正十三年からは對水戸高校とのレースが始つた、現在は此の二つを我部の試合の眼目として居る。

各競泳に於ける我部の成績は甚だ惡い、選手の努力の不足と云ふ責は甘んじて受けやうが而しまだ云ふべき多くの理由

がある、或は原因はたゞ一つ――數回繰り返すけれども――校内にプールの無い事であつて、此が各方面へ影響して諸の敗因を形成すると云つた方がよい、多くの人の中から選ぶ事も出來ず僅に集つた同志の者も練習に一々外に行くのでは時間と費用がかゝりすぎるので結局離れて終ふとか數へれば限りが無い、而してインターカレヂに於ける我が相手は如何なるものであらうか玆にも又三年に對する數年の差入學難から良選手が得難い等の不利益に我が努力も酬ひられざる樣な結果になりはしまいか（既になつて居るのであらう）此等の點から見るも我々は寧ろ高校同志の試合に力を注ぐ事の利益を考へざるを得ないのである。

毎年の成績や選手等は既に各年度特別記事の項に記したから玆に書くのはやめるが練習方法に就て一言すれば昔は關東大會等にては二百米位が最長距離で總て直線コースで行はれたが近頃では五十乃至百米コースにてターニングを行ふ故海面でも水路を限る事及ターニングで跳込スタートの練習を行ふ必要が生じた依て我部に於ては大正八年にターニング臺と稱するものを創案した、低い脚立に板を張つたものである、海岸にスリツトを立てゝ此により距離を定めて此臺を入れ練習したその後脚立にも板を張り往復練習が試みられたが波浪に防げられ練習出來るのは一夏中に數日に過ぎなかつた大正十二年には新ターニング臺二つを作り湊川に相對應して立て稍理想に近い練習をした此方法は房州に於ける各水泳部にて一般に用ひられる樣になつた、十三年宇佐美に於ては此が又用ひられなくなり止むなく競泳選手は戸田に帝大と協同して練習する事となつた何はともあれプールに於けるレースが正式とさるるのにプールにて練習しないでは他の何れの方法も完全とは云へないのであるそのプール建設に關する問題は前項に述べたから玆には記さぬ。

競泳を加へた爲に部の內容は倍加した、或は部の內容が變化したと云ふ方がより適切であらう即水泳部も一つの競技部となつたのである而るに我部の設備は依然として舊の如しである、形式が內容に適應して變化して居ないのである、我部の現在は斯の如き狀態なのである、而うして此を解決するに時間を以てせんとしつゝあるのである。

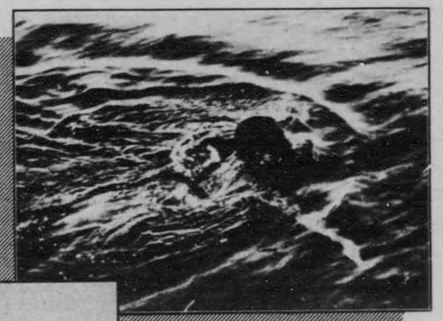
嗚呼又何をか云はん駒場に移るまでは仕方ない事であらう。が競泳に何事かを爲さざれば部の存在は認められざる今日である、設備の充分不充分に拘らず發揮し得る者は最後迄の努力に頑張り盡す一高精神だけである、現在の我々の此努力が駒場に設備完成の曉に發揮され成果を結ぶのも遠き將來では無いであらう。

我部の現在及將來を支配する重要なる因子は競泳及プールの問題である。（松澤一鶴記）

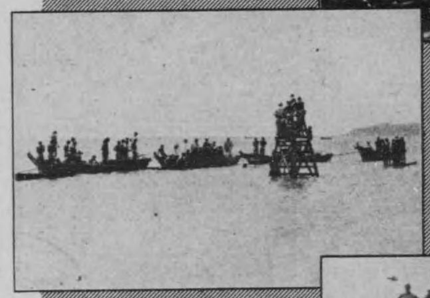
習練法殿ルヶ於ニ町法福八條北

寮歸詠新ル十佐宇郡方田縣岡靜

波間の雄



梅澤舊師範斐伸（神傳流）

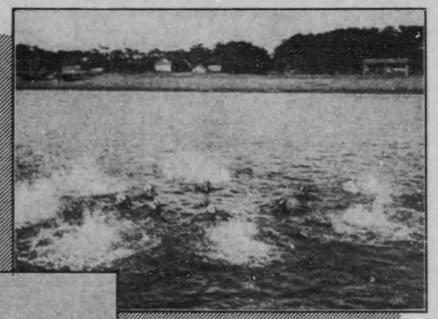


水泳部二十年記念式盛況

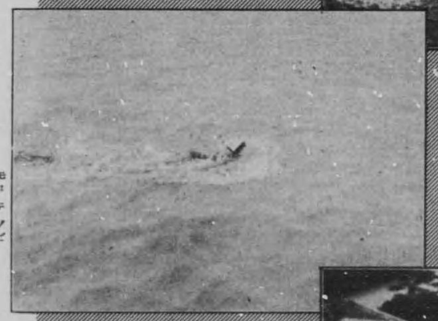
佐々木舊師範一重伸（水府流太田派）

澤田助手片拔手一重伸（水府流太田派）

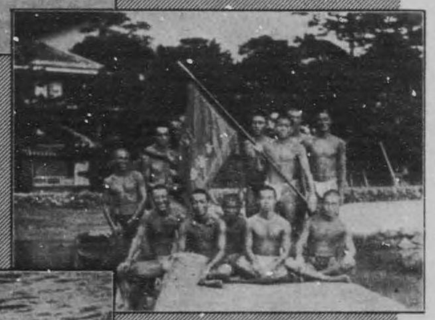
波間の雄



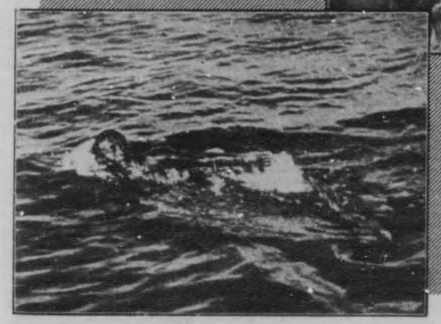
遊戯蓮華



齋藤舊副師範諸手伸（水府流太田派）



大正七年戸田遠征選手



佐々木舊師範（水府流太田派）片拔手一重伸